



岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第600集

国分遺跡・川端遺跡・堤遺跡発掘調査報告書

2012

(公財) 岩手県文化振興事業団
岩手県県南広域振興局農政部農村整備室

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第600集

こく ぶん かわ ばた つつみ
国分遺跡・川端遺跡・堤遺跡
発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都鳥2期地区関連遺跡発掘調査

2012

国分遺跡・川端遺跡・堤遺跡 発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都鳥2期地区関連遺跡発掘調査

国分遺跡・川端遺跡・堤遺跡 発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都鳥2期地区関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業都島2期地区に関連して平成22年度に行われた奥州市胆沢区国分遺跡、川端遺跡、堤遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。今回の調査により、国分遺跡からは中世末から近世初頭の建物とそれに付属する施設が見つかりました。また、川端遺跡では溝や土器が確認されています。そして堤遺跡では奈良時代と平安時代の竪穴住居跡が見つかっています。今回の調査結果は、古代から近世に至るまでの胆沢地区の歴史を知る上で貴重な資料となると思われます。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県県南広域振興局農政部農村整備室をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成24年2月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 池田克典

例　　言

- 1 本報告書は、岩手県奥州市胆沢区南都田字上広岡445番地ほか、字大道219番地ほか、字四ッ柱109番地ほかに所在する国分遺跡、川端遺跡、堤遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の発掘調査は、「経営体育成基盤整備事業都鳥2期地区」に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と岩手県南広域振興局農政部農村整備室との協議を経て、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。なお、費用負担は岩手県教育委員会が岩手県南広域振興局農政部に農家負担分を補助している。
- 3 本遺跡の調査成果の概略は、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第588集『平成22年度発掘調査報告書』に公表しているが、本書の内容を優先するものとする。
- 4 本遺跡の岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡コード番号並びに遺跡略号は、以下の通りである。

国分遺跡 番号：NE25- 1107 略号：KB- 10

川端遺跡 番号：NE25- 0240 略号：KBT- 10

堤遺跡 番号：NE25- 0226 略号：TT- 10

- 5 各遺跡の調査期間・調査面積（調査対象面積）、担当者は、以下のとおりである。

野外調査

遺跡名	調査面積	野外調査期間	担当者
国分遺跡	1,814 m ²	平成22年6月18日～8月31日	米田 寛、杉沢昭太郎
川端遺跡	300 m ²	平成22年6月14日～6月24日	米田 寛、杉沢昭太郎
堤遺跡	340 m ²	平成22年6月1日～6月15日	米田 寛、杉沢昭太郎

室内整理

遺跡名	室内整理期間	担当者
国分遺跡	平成23年1月1日～平成23年3月15日	米田 寛
川端遺跡	平成22年12月1日～平成22年12月15日	米田 寛
堤遺跡	平成22年12月16日～平成22年12月31日	米田 寛

- 6 野外調査での遺構写真撮影は調査員、遺物写真撮影は当センター写真撮影を専門とする期限付職員が担当した。
- 7 本報告書の執筆は、第1章第1節を岩手県南広域振興局農政部農村整備室が、その他を米田が執筆し、編集は米田が担当した。
- 8 出土遺物の鑑定・分析・保存処理業務委託は次の機関に委託した。
放射性炭素年代測定……… 株式会社 加速器分析研究所
種子・炭化物同定分析……… 古代の森研究室
昆虫同定分析……… …… パリノ・サーヴェイ株式会社
鉄製品保存処理……… …… 岩手県立博物館
- 9 本報告書に掲載した地図は以下の通りである。

国土交通省国土地理院 1 : 25,000地形図「供養塚」(NJ- 54- 14- 14- 3)

国土交通省国土地理院 1 : 50,000地形図「水沢」(NJ- 54- 14- 14)

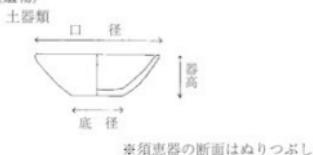
- 10 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡　　例

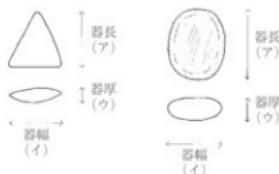
〈遺構〉



〈遺物〉



石器類



〔表現方法・使用トーン〕



ミガキ



ヘラナデ



ヘラケズリ



ハケメ



回転ナデ



黒色処理 (土器)



磨面 (石器)



遺物・雑



使用範囲 (石器)

東北センターで使用しているコンテナの大きさは以下の通りである

大: 42×32×30cm 中: 42×32×20cm

小: 42×32×10cm

目 次

I 調査に至る経過

1 調査経緯	1
2 調査経過	1

II 立地と環境

1 遺跡の位置	2
2 地理的環境	2
3 歴史的環境	6

III 国分遺跡

1 概要	13
(1) A区概要	14
(2) B区概要	14
(3) C区概要	14
(4) D区概要	15
(5) E区概要	15
2 調査・整理の方法	
(1) 野外調査	17
(2) 室内整理と遺物分類	17
3 基本層序	18
4 検出遺構	
(1) 陷穴状土坑	19
(2) 掘立柱建物	25
(3) 土坑	37
(4) 溝	46
5 出土遺物	
(1) 陶磁器	60
(2) 石器	60
(3) 土製品	60
(4) 木製品	61
(5) 鉄製品	61
(6) ガラス製品	61

IV 川端遺跡

1 概要	77
(1) A区概要	78
(2) B区概要	78

(3) C 区概要	78
2 調査・整理の方法	78
3 基本層序	78
4 検出遺構	
(1) 土坑	81
(2) 溝	81
5 出土遺物	
(1) 弥生土器	82
(2) 石器	82
(3) 土師器	82
V 堤遺跡	
1 概要	83
2 調査・整理の方法	83
3 基本層序	83
4 検出遺構	
(1) 壓穴住居	83
(2) 壓穴住居状遺構	88
(3) 土坑	88
(4) 溝	90
(5) 柱穴	91
5 出土遺物	
(1) 土師器・須恵器	91
(2) 石器	92
(3) 土製品	94
(4) 鉄製品	94
(5) 粘土塊	94
VI 自然科学分析	
1 国分遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)	97
2 国分遺跡から出土した種実	100
3 堤遺跡から出土した炭化物	101
4 昆虫同定 (国分遺跡)	102
5 分析結果所見	106
VII 調査のまとめ	
1 国分遺跡の調査成果	108
2 川端遺跡の調査成果	118
3 堤遺跡の調査成果	118
報告書抄録	167

図版目次

第1図 遺跡位置図	3	第3図 地形分類図	5
第2図 調査区位置図	4	第4図 周辺の遺跡分布	7
<国分遺跡>			
第5図 国分遺跡遺構配置全体図	13	第23図 1～6号土坑	43
第6図 国分遺跡A・B区遺構配置図	14	第24図 7～11号土坑	44
第7図 国分遺跡C・D区遺構配置図	15	第25図 12～18号土坑	45
第8図 国分遺跡E区遺構配置図	16	第26図 1～6号溝	49
第9図 基本層序	18	第27図 7～10号溝、1・2号池状遺構(1)	50
第10図 1～6号陥穴状土坑	22	第28図 7～10号溝、1・2号池状遺構(2)	51
第11図 7～12号陥穴状土坑	23	第29図 11～17号溝	55
第12図 13号陥穴状土坑	24	第30図 18～20号溝	56
第13図 B区柱穴配置図	25	第31図 出土遺物(1)	62
第14図 E区柱穴配置図	26	第32図 出土遺物(2)	63
第15図 1～5号掘立柱建物配置図	27	第33図 出土遺物(3)	64
第16図 1号掘立柱建物(1)	28	第34図 出土遺物(4)	65
第17図 1号掘立柱建物(2)	29	第35図 出土遺物(5)	66
第18図 2号掘立柱建物(1)	30	第36図 出土遺物(6)	67
第19図 2号掘立柱建物(2)	31	第37図 出土遺物(7)	68
第20図 3号掘立柱建物	33	第38図 出土遺物(8)	69
第21図 4号掘立柱建物	35	第39図 出土遺物(9)	70
第22図 5号掘立柱建物	36	第40図 出土遺物(10)	71
<川端遺跡>			
第41図 川端遺跡遺構配置全体図	77	第43図 基本層序、遺構図	80
第42図 川端遺跡遺構配置図	79	第44図 出土遺物	82
<堤遺跡>			
第45図 堤遺跡遺構配置図	84	1～4号溝	89
第46図 1号竪穴住居	85	第50図 出土遺物(1)	92
第47図 2号竪穴住居(1)	86	第51図 出土遺物(2)	93
第48図 2号竪穴住居(2)	87	第52図 出土遺物(3)	94
第49図 1号竪穴住居状遺構、1～3号土坑、			

<VII 調査のまとめ>

第53図 国分遺跡2・4号掘立柱建物配置案	110	第55図 北上市田代遺跡2号掘立柱建物	112
第54図 国分遺跡1・3・5号掘立柱建物配置案		第56図 近世前半の遺跡地周辺図	116
...	111		

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	8
--------------	---

<国分遺跡>

第2表 柱穴觀察表	57	第5表 土製品觀察表	75
第3表 陶磁器觀察表	72	第6表 木製品觀察表	76
第4表 石器觀察表	75	第7表 鉄製品・ガラス製品觀察表	76

<川端遺跡>

第8表 遺物觀察表	82
-----------	----

<堤遺跡>

第9表 柱穴觀察表	91	第11表 石器・土製品・鉄製品・粘土塊觀察表	96
第10表 土師器・須恵器觀察表	95		

写真図版目次

<国分遺跡>

写真図版1 遺跡遠景	122	写真図版10 8~14号土坑	131
写真図版2 1~3号陷穴状土坑	123	写真図版11 15~18号土坑、1・2号溝	132
写真図版3 4~7号陷穴状土坑	124	写真図版12 3~7号溝	133
写真図版4 8~10号陷穴状土坑	125	写真図版13 8~10号溝	134
写真図版5 11~13号陷穴状土坑	126	写真図版14 9~10号溝	135
写真図版6 1・2号掘立柱建物	127	写真図版15 1号池状遺構	136
写真図版7 3・4号掘立柱建物	128	写真図版16 2号池状遺構、11・12号溝	137
写真図版8 5号掘立柱建物、1~3号土坑	129	写真図版17 13~17号溝	138
写真図版9 4~7号土坑	130		

写真図版18	E 区柱穴群 (1)	139	写真図版27	出土遺物 (2)	148
写真図版19	E 区柱穴群 (2)	140	写真図版28	出土遺物 (3)	149
写真図版20	E 区柱穴群 (3)	141	写真図版29	出土遺物 (4)	150
写真図版21	A 区	142	写真図版30	出土遺物 (5)	151
写真図版22	B・C 区	143	写真図版31	出土遺物 (6)	152
写真図版23	D 区	144	写真図版32	出土遺物 (7)	153
写真図版24	E 区 (1)	145	写真図版33	出土遺物 (8)	154
写真図版25	E 区 (2)	146	写真図版34	出土遺物 (9)	155
写真図版26	出土遺物 (1)	147			
<川端遺跡>					
写真図版35	試掘風景、基本土層、1号土坑、 1・2号溝	156	写真図版36	3号溝、調査区完掘、出土遺物	157
写真図版37	1号竪穴住居	158	写真図版41	2・3号土坑、1～3号溝	162
写真図版38	2号竪穴住居 (1)	159	写真図版42	3・4号溝、調査区完掘ほか	163
写真図版39	2号竪穴住居 (2)	160	写真図版43	出土遺物 (1)	164
写真図版40	2号竪穴住居 (3)、1号竪穴住居状 遺構、1号土坑	161	写真図版44	出土遺物 (2)	165
			写真図版45	出土遺物 (3)	166

I 調査に至る経過

1 調査経緯

経営体育成基盤整備事業都鳥2期地区のほ場整備工事に伴い、その事業区域内に国分、川端、堤遺跡が存在することから、発掘調査を実施することとなったものである。

都鳥2期地区は奥州市胆沢区南都田地内に位置し、水田の大部分は昭和26年～29年にかけて積雪寒冷地土地改良事業により、10a区画に整備されているが、農業機械の大型化が進む中で小区画となつたこと、農道は幅員2～3mと狭小で通行に支障があること、水路は用排兼用土水路であるため用水不足や排水不良であり、維持管理に多大な労力を投じていることなどから、地域営農の確立に十分な対応ができない状況である。このため、本事業により水田を標準区画1haの大区画とし、併せて用排水路、道路の整備を行い、地域農業の中心となる経営体を育成し活力があり生産性の高い地域営農の確立を目指しているものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県県南広域振興局農政部農村整備室から平成21年10月7日付け「県南広農整第143-2号『経営体育成基盤整備事業都鳥2期地区に係る埋蔵文化財の試掘調査（依頼）』」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成21年11月に試掘調査を実施し、工事に着手するには国分、川端、堤遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成21年12月25日付教生第1187号「経営体育成基盤整備事業都鳥2期地区における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当農村整備室へ回答してきた。

その結果を踏まえて、当農村整備室は、岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成22年4月22日付で財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（岩手県県南広域振興局農政部農村整備室）

2 調査経過

国分遺跡、川端遺跡、堤遺跡は、平成22年6月1日より調査を開始した。調査区現況は水田である。調査区は発掘調査後にすみやかに圃場整備事業を行う予定であったため、休耕中であった。岩手県県南広域振興局農政部農村整備室の要望で、堤遺跡、川端遺跡、国分遺跡の順番で調査を行うこととなった。堤遺跡の調査対象範囲は、南都田小学校の南側に位置し、道路に面する。3遺跡の中で、もっとも堆積層が薄く、水田耕作土を重機によって除去すると、調査区東側で河岸段丘礫層が露出した。堤遺跡は平成22年6月15日まで調査を行った。堤遺跡の西側に位置する川端遺跡は、伊勢神社と公民館施設（南都田第13部落コミュニティセンター）を中心とする微高地範囲で、調査区は伊勢神社の西側に3ヵ所設定された。調査は平成22年6月14日～6月24日まで行った。国分遺跡は、5ヵ所の調査区が設定された。遺構の調査中は、溝や井戸と考えられる深い土坑などから絶えず湧水したため、水中ポンプを稼働しながら調査を進めた。平成22年7月28日には、一部の調査区について部分終了確認検査をうけ、平成22年8月25日には全体の調査区について終了確認検査を受け、8月31日に野外調査が終了した。

II 立地と環境

1 遺跡の位置

国分遺跡、川端遺跡、堤遺跡は、奥州市胆沢区南都田に所在する。JR東北本線水沢駅から西方6~7kmの胆沢扇状地の中位段丘面と低位段丘面上に位置する(第1図)。その位置は国土地理院発行の地形図1/25,000「供養塚」NJ-54-14-14-2図幅に含まれてあり、北緯39度8分17秒~39度7分35秒、東経141度5分0秒~141度5分25秒付近(世界測地系)である。遺跡の北側には、扇状地から北上川に向かって東西に流れる胆沢川とほぼ並行して国道397号線が走る。一方、遺跡の南側は広岡街道が東西に走り、遺跡より西方約2.5kmで奥州市胆沢区総合支所に至る。調査前現況では、大部分が水田で、そのほか宅地・畠地となっている。また、国分遺跡の西側には平成20年度に当埋蔵文化財センターにより調査が行われた尼坂遺跡、牡丹野遺跡、作屋敷遺跡が位置している。

2 地理的環境

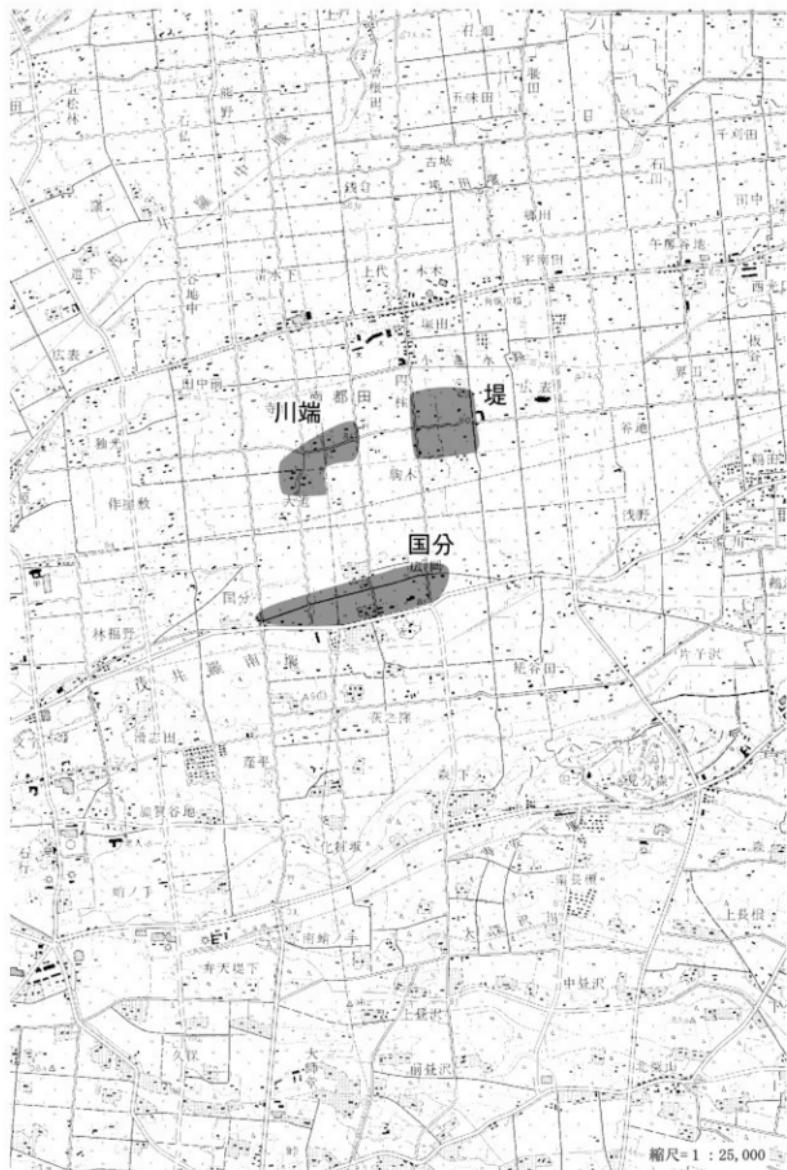
3 遺跡は、岩手県奥州市胆沢区南都田字上広岡・字大道・字四ツ柱に所在する。奥州市は平成18年2月20日の市町村合併により、水沢市・江刺市・前沢町・胆沢町・衣川村の5市町村を集め新設された名称である。遺跡の所在する胆沢区(旧胆沢町)は岩手県南の内陸部に位置し、西側の奥羽山脈と東側の北上山地に挟まれた南北に長い北上盆地にある。この盆地は南流する北上川によって盛岡以北を上流域、盛岡~前沢間を中流域、前沢以南を下流域と3区域に区分されている。胆沢区はこの中流域南端に位置し、北は金ヶ崎町、東は水沢区、南は衣川区と境を接している。

北上川は岩手県内に南北に延びる北上低地帯を南流し、宮城県石巻市で太平洋に注ぐ全長249km、流域面積10,150km²の東北地方有数の河川である。流路は低地帯の東側に偏り、また北上川に注ぐ支流のうち大きな河川の殆どが奥羽山脈に源をもつことから、扇状地や段丘の発達は奥羽山脈に接する西側で良好である。これらの扇状地は北上川の支流で開析され、発達した河岸段丘や扇状地、河岸平野および起伏量の小さい丘陵地が互いに入り組む構造となっている(第3図)。

本遺跡の所在する胆沢区においてもこの傾向はそのまま現れるが、南流する北上川によって分断される東部と西部では対照的な様相を示している。東部地域は北上山地が近くに迫る丘陵地帯を呈し、標高90m以上の浸食面と標高50~90mの段丘面が認められ、多くの小支谷によって分断されている。一方、西部地域は胆沢区の若柳、市野々を扇頂部とする広大な胆沢扇状地の東部に位置する。この扇状地は大きく高位・中位・低位の段丘に区分され、さらにその中で細分されている。胆沢川南岸の高位段丘面(一首坂段丘)から、中位段丘面(胆沢段丘:比高上位から順に上野原、横道、堀切、福原に4細分)、低位段丘面(水沢段丘:水沢高位段丘と水沢低位段丘に細分)へと続く。低位段丘面は、高・中位段丘を取り巻くように北と南、扇端部に広がっている。すなわち、低位段丘面の堆積物は胆沢川から前沢区にまで広がっており、北上低地帯にまで及んでいる。国分遺跡は、中位段丘面の福原面に、川端遺跡と堤遺跡は低位段丘面の水沢高位段面に位置している。

胆沢扇状地中位段丘面のうち、国分遺跡が立地する福原面は標高60~130mに分布し、8~9万年前に形成された。また、福原面上には、黒沢尻火山灰が堆積する。

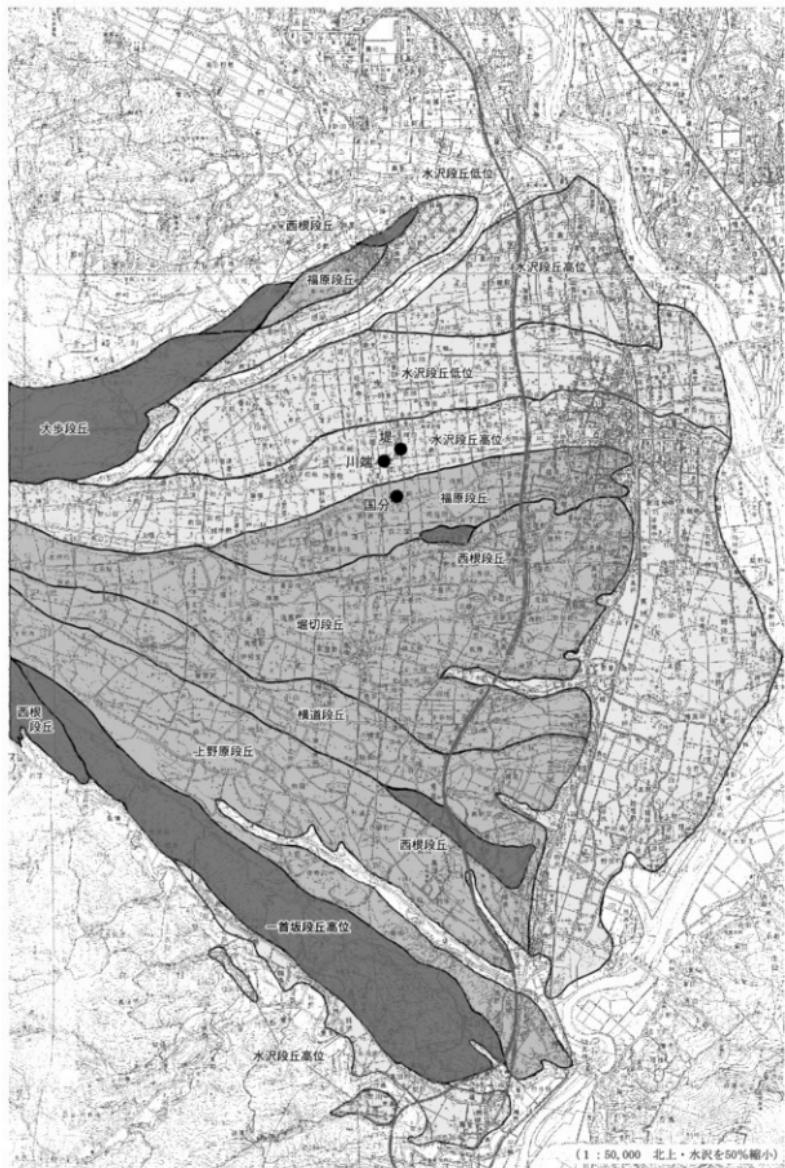
一方、川端遺跡と堤遺跡が立地する低位段丘面は水沢高位段丘面(標高40~290m)と水沢低位段丘面(標高38~120m)に分けられ、川端・堤遺跡は水沢高位段丘面上に位置する。水沢高位段丘面



第1図 遺跡位置図



第2図 調査区位置図



第3図 地形分類図

の形成年代は、花泉段丘（35,000～21,430yBP）に対比されている（斎藤1978）。また、胆沢扇状地の段丘区分を示した柱状図上に、水沢段丘の形成年代が19560+540yBP（大上・吉田1984）と記載されている。これは、水沢段丘の堆積物（木炭）のC14年代である。しかし、水沢高位段丘面上の奥州市前沢区水尻遺跡から後期旧石器時代前半期の石器群が確認されており、また、水尻遺跡より南南東約6kmに位置する鶴ノ木遺跡も、水沢高位段丘面上に立地し、水尻遺跡と同様の石器群が確認されている。現在の年代観では、後期旧石器時代の前半と後半に分けられる時期頃に降下した始良・丹沢火山灰（AT）が約25000～26000yBP（約29000CalyBP）とされており、水尻遺跡と鶴ノ木遺跡の石器群はそれよりも確實に古い。水沢高位段丘の形成年代は、再考する必要性がある。

3 歴史的環境

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は胆沢扇状地に分布している。胆沢扇状地の中位段丘面には下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡、上萩森遺跡、岩洞堤遺跡、二の台長根遺跡など、石器集中部が確認された遺跡が複数ある。低位段丘面では水尻遺跡と鶴ノ木遺跡で石器集中部が確認されている。第2節に記載したとおり、胆沢扇状地の低位段丘面に位置する水沢高位段丘面は、年代測定値を参考としてこれまで約2万年前に形成されたと考えられてきた。この形成年代が正しければ、水尻遺跡と鶴ノ木遺跡の石器群は約2万年前以降となるが、編年学的研究成果からはそれよりも古いAT降下前の石器群と考えられる。水沢高位段丘面の年代測定資料が増加すれば、このミスマッチは次第に解消していくものと期待される。後期旧石器時代前半期の石器群は、上萩森遺跡、二の台長根遺跡、鶴ノ木遺跡で確認され、台形石器と打面残置のナイフ形石器が出土している。一方、後期旧石器時代後半期の石器群としては、いわゆる「真正の石刃技法」を保有していることが特徴のひとつであるが、岩洞堤遺跡や北上川東岸の生母宿遺跡でその存在が明らかとなっている。

縄文時代・弥生時代

縄文時代の遺跡は胆沢区内で85ヵ所登録されているが、前期～中期の遺跡が多い。南都田地区とその周辺では、漆町遺跡（12）から早期中葉の貝殻文系土器が出土しているほか、芦の隨遺跡（27）は前期～中期の集落跡が発掘調査されている。小十文字遺跡からは早期後半から前期初頭の土器が出土している。

弥生時代では清水下遺跡（11）、漆町遺跡（12）など水沢低位段丘面上にも遺跡の形成が見られる。また、角塚古墳（16）、牡丹野遺跡（32）でも弥生土器が出土している。

古代

奥州市内は非常に多くの古代遺跡の発掘調査が行われている。

古墳時代では国指定史跡の角塚古墳（16）が5世紀中頃に造営されている。また、いわゆる末期古墳に位置づけられる蝦夷塚古墳（6）、桜谷田古墳（37）、鶴田古墳群（43）、見分森古墳（194）が存在する。さらに、角塚古墳の東方には石田Ⅰ・Ⅱ遺跡（23）、北方には中半入遺跡（101）などで、大規模な集落が見つかっており、古墳造営に関与したムラと考えられる。

奈良時代では、漆町遺跡（12）、二本木遺跡（13）、要害遺跡（15）、机地（20）、塚田遺跡（17）、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡（23）、堤遺跡（36）、小十文字遺跡（29）などがある。



図4 周辺の遺跡分布

第1表 周辺の遺跡一覧表①

No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地	備考	
1	古井田跡	城郭跡	中世	土塁、堀	照光山古墳群新里		
2	中井	散布地	平安	須恵器	照光山古墳群子中井		
3	寺原城	散布地	平安	土師器	照光山古墳群子五松林		
4	河原田	散布地	平安	土師器	照光山古墳群子猪川		
5	新屋敷	散布地	平安	土師器	照光山古墳群子猪川		
6	飯森古墳	古墳	奈良	土師器、須恵器、マウンド	照光山古墳群子狗堂	近理文第380集(2002年)	
7	小姓塚	散布地	平安	土師器	照光山古墳群子狗堂		
8	外記II	散布地	繩文・平安	縄文土器、器、土師器	照光山古墳群子外記		
9	外記I	散布地	繩文	縄文土器	照光山古墳群子外記		
10	新里城(新里六丁)	城郭跡	平安	土師器、須恵器、堀	照光山古墳群子新里		
11	清水下	散布地	平安	土師器、須恵器、石棺、石頂、土輪器	照光山古墳群子清水下		
12	津守	散布地	平安	土師器、須恵器、縄文早期土器	照光山古墳群子津守		
13	木本	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器、唐土器、縄文土器	照光山古墳群子木本	照光町教委第26集(1996年)	
14	鍛冶	散布地	奈良・平安	土師器	照光山古墳群子鍛冶	照光町教委第28集(2002年)	
15	要者(さき井館)	散布地・城郭跡	奈良・平安・近世	土師器、須恵器、土器	照光山古墳群子坂田	照光町教委第14集(1985年)	
16	角屋古墳	古墳	古墳時代	埴輪	照光山古墳群子坂田		
17	坂塚	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器、春秋時代の土器	照光山古墳群子坂塚		
18	机地館(通稱)	城郭跡	中世	水槽	照光山古墳群子古城		
19	堀田	散布地	平安	土師器	照光山古墳群子堀田		
20	机地	散布地	奈良・平安	土師器	照光山古墳群子机地		
21	沢田	散布地	奈良・平安	土師器	照光山古墳群子沢田	照光町教委第18集(1968年)	
22	宇田	集落跡	平安	土師器	照光山古墳群子宇田		
23	石田1・2	散布地	古代	土師器、須恵器	照光山古墳群子石田		
24	署塚	散布地	繩文・古代	縄文土器、器	照光山古墳群子署塚		
25	若柳要塞跡	城郭跡	中世	土師器	照光山古墳群子若柳		
26	十文字	散布地	繩文・古代	縄文土器(早期)、土師器、石器、石礫	照光山古墳群子十文字		
27	芦の橋	散布地	奈良・平安	土師器	照光山古墳群子(中)・石器、土師器	照光山古墳群子の森	照光町教委第21集(1991年)
28	石行	散布地	繩文・古代・近世	土師器、須恵器	照光山古墳群子石行	照光町教委第27集(1996年)	
29	乍小文字	散布地	繩文・古代	縄文土器(中期)、土師器、石器	照光山古墳群子乍小文字		
30	乍小屋敷	散布地・墓葬群	古墳・平安	土師器、須恵器、石器、石棺	照光山古墳群子乍小文字		
31	佐野	散布地	古墳・平安	土師器、須恵器、石器	照光山古墳群子佐野	照光町教委第1・2・3・5集(2001年)	
32	村野丹	散布地	古代・譲	土師器、須恵器、石器	照光山古墳群子村野丹	古手文書第19集(2008年)	
33	正門前(飯坂館)	城郭跡	中世	土器	照光山古墳群子正門		
34	國分	散布地	古代・中世～近世	绳文土器・器、土師器、須恵器、石器、石斧	照光山古墳群子国分	照光町教委第21集(1991年)	
35	国川	散布地	奈良・平安	土師器	照光山古墳群子人道	照光町教委第22集(1995年)	
36	堀	散布地	奈良・平安	土師器	照光山古墳群子堀		
37	桃谷田	散布地	繩文・古代	縄文土器(前期)、土師器	照光山古墳群子桃谷田		
38	月子沢	散布地	繩文・古代	縄文土器、土師器、須恵器、フレーク	照光山古墳群子月沢		
39	浅野	散布地	繩文・古代	縄文土器(中)・須恵器、土器	照光山古墳群子浅野	照光町教委第17集(1988年)	
40	浅野前	集落跡	繩文・古代	縄文土器(中)・須恵器、土師器	照光山古墳群子浅野		
41	鶴田I	散布地	平安	土師器	照光山古墳群子鶴田		
42	鶴田II	散布地	繩文・平安	土師器	照光山古墳群子鶴田		
43	鶴田古墳群	古墳群	古代	土師器	照光山古墳群子鶴田		
44	鶴川	集落跡	繩文・平安	土師器(前・晚期)、土師器、須恵器	照光山古墳群子鶴川		
45	白野	散布地	繩文・古代	土師器(前・中期)、石器、石礫	照光山古墳群子合野		
46	森下	散布地	繩文・古代	土師器、堅穴住居跡	照光山古墳群子森下	※照光町教委調査	
47	南浦の手	散布地	繩文	土師器	照光山古墳群子南浦の手		
48	大森	散布地	繩文	土師器	照光山古墳群子大森		
49	森日	散布地	平安	土師器	照光山古墳群子大森		
50	小山	散布地	繩文・古代	縄文土器(前)、石器、須恵器、土器	照光山古墳群子大深沢		
51	阿野森	散布地	繩文・中世	縄文土器、須恵器	照光山古墳群子野森		
52	南曾森	散布地	繩文	縄文土器(初期)、石器、石礫	照光山古墳群子曾森、暴川		
53	純	散布地	繩文	縄文土器	照光山古墳群子純		
54	小山方八丁廻	城郭跡	中世・近世	土器、二頭	照光山古墳群子方八丁		
55	大坂	散布地	繩文・古代	縄文土器(中)・石器、土師器	照光山古墳群子大坂		
56	袖塙	散布地	繩文・古代	縄文土器(中)・石器、土師器	照光山古墳群子袖塙		
57	後大塙	散布地	繩文	縄文土器(中)・石器	照光山古墳群子後大塙		
58	鶴戸	散布地	繩文	縄文土器(中)・石器	照光山古墳群子鶴戸		
59	堆山	散布地	繩文・古代	縄文土器、土師器、須恵器	照光山古墳群子堆山		
60	金立塙	散布地	繩文	縄文土器(中)	照光山古墳群子北赤塙		
61	恩原長根	散布地	繩文	縄文土器(中)・石器	照光山古墳群子恩原長根		
62	明山	散布地	繩文	縄文土器、石器	照光山古墳群子明山		
63	上選略	散布地	繩文	縄文土器(中)・石器	照光山古墳群子上選略		
64	長根	散布地	繩文	縄文土器	照光山古墳群子長根		
65	中谷塙	散布地	平安	土器	照光山古墳群子中谷塙		
66	西ノ原	散布地	繩文	土器	照光山古墳群子西ノ原		
67	高日向	散布地	縄文	土器、基、埴輪・穴吹焼横渠1基	照光山古墳群子四ツ原		
68	高日切	散布地	縄文	土器、基、埴輪・穴吹巻、石器、埴輪・穴吹横渠	照光山古墳群子中田切		
69	上領・志原	散布地	縄文	フレーク	照光山古墳群子上領・志原		
70	武森	散布地	繩文・平安	縄文土器、土師器	照光山古墳群子武森		
71	西尻民	散布地	縄文	縄文土器(中)	照光山古墳群子西尻民		
72	中平人	集落跡	平安	土師器、須恵器、陶生土器	木沢区佐食子中平人	近理文第380集(2002年)	
73	木ノ木	散布地	平安	土師器	木沢区佐食子木ノ木		
74	石頭	散布地	平安	土師器	木沢区佐食子石頭		
75	吉田法	散布地	繩文・平安	土師器、須恵器、石組	木沢区佐食子西田中		
76	中ノ日	散布地	平安	土師器	木沢区佐食子中ノ日		
77	太田I	集落跡	平安	土師器	木沢区佐食子太田		
78	太田II	散布地	平安	土師器、須恵器	木沢区佐食子太田		
79	太田III	散布地	平安	土師器	木沢区佐食子太田		
80	玉ノ木I	散布地	平安	土师器	木沢区佐食子玉ノ木		
81	玉の木II	散布地	平安	土师器	木沢区佐食子玉ノ木		
82	今朝	集落跡	平安	土师器	木沢区佐食子今朝		
83	今泉	集落跡	古墳～平安	穴吹住居跡、土師器、須恵器	木沢区佐食子今泉		

第2表 周辺の遺跡一覧表②

No	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地	備考
117	今泉II	東漢跡	奈良・平安	土師器、須恵器	水戸区佐食町今泉	
118	今泉III	東漢跡	奈良・平安	土師器、須恵器	水戸区佐食町今泉	
119	玉賀	散布地	奈良	土師器、須恵器	水戸区佐食町玉賀	
120	鏡原	散布地	奈良	土師器、須恵器、フレーク	水戸区佐食町鏡原	
121	貴賀	散布地	奈良	土師器、須恵器	水戸区佐食町貴賀	
122	伊勢原(ターピング)	城郭跡	奈良	土師器	水戸区佐食町伊勢原	
123	伊勢原	散布地	奈良・平安・近世	土師器、須恵器	水戸区佐食町伊勢原	
124	寛田(А)	散布地	繩文・平安	繩文土器、火拂面、須恵器	水戸区佐食町寛田	
125	寛田(В)	散布地	繩文	繩文土器、スカラベマーク	水戸区佐食町寛田	
126	獅子鼻	散布地	平安	土師器	水戸区佐食町獅子鼻	
127	大曾根	散布地	繩文・奈良・平安	竪土器(穿孔)、土師器、スクリーパー、フレーク	水戸区佐食町大曾根	岩瀬文第44集(1982年)
128	上古(古井・木桶)	城郭跡	中世	平塁、堀	水戸区佐食町北田中	
129	八ヶ口	東漢跡	平安	土師器、須恵器	水戸区佐食町八ヶ口	
130	北田中	東漢跡	平安	土師器、須恵器	水戸区佐食町北田中	
131	枳武城(方八)	城郭跡	平安	土師器、須恵器、鉢	水戸区佐食町枳武	
132	北川(高麗・長毛)	散布地	奈良・平安・近世	土師器、須恵器	水戸区佐食町北川	
133	祇園	東漢跡	平安	土師器、須恵器	水戸区佐食町祇園	
134	施明堂	東漢跡	奈良	土師器	水戸区佐食町施明堂	
135	三町	散布地	平安	土師器、須恵器	水戸区佐食町三町	
136	八幡山	東漢跡	平安	竪土器(穿孔)、石器、石軒、小杉、石斧	水戸区佐食町北幡	
137	藤古	東漢跡	繩文・平安	須恵器	水戸区佐食町藤古	
138	外和田	散布地	平安	土師器	水戸区佐食町外和田	
139	白浜寺	散布地	奈良	土師器	水戸区佐食町白浜寺	
140	松木本	散布地	平安	繩文土器(穿孔)、土師器	水戸区佐食町松木本	
141	松木日	集落跡	平安	土師器	水戸区佐食町松木日	
142	施室	散布地	平安	土師器	水戸区佐食町施室	岩瀬文第44集(1982年)
143	施室Ⅱ	集落跡	中世	土師器	水戸区佐食町中田	
144	東大畠	東漢跡	繩文・奈良・平安	土師器、須恵器、石器	水戸区佐食町東大畠	岩瀬文第44集(1982年)
145	東大畠Ⅱ	東漢跡	繩文・平安	土師器、須恵器、石器	水戸区佐食町東大畠	
146	東大畠Ⅲ	散布地	平安	須恵器	水戸区佐食町東大畠	
147	衝原	東漢跡	古墳・奈良	土師器、須恵器	水戸区佐食町衝原	
148	高山	東漢跡	古墳	竪穴式住居跡、土師器	水戸区佐食町西高山	
149	西大畠	散布地	古墳・平安	竪穴式住居跡、土師器、須恵器	水戸区佐食町西大畠	
150	五千刈	散布地	繩文	繩文土器	水戸区字小中	
151	西前	散布地	平安	土師器	水戸区佐食町西前	
152	東前(海野別荘)・毛利	城郭跡	中世	平塁	水戸区字植林	
153	桜荷田	散布地	平安	土師器	水戸区字平沢	
154	綱下	散布地	繩文	繩文土器(中期)、石器、土偶	水戸区字綱下	
155	里原	東漢跡	繩文	繩文土器(晚期)、石器、土偶	水戸区字里原反町他	
156	栗原	散布地	繩文	繩文土器	水戸区佐食町栗原	
157	鍬原	散布地	平安	土師器、須恵器	水戸区佐食町鍬原	
158	鍬原	散布地	平安	土師器、須恵器	水戸区佐食町鍬原	
159	久田	散布地	平安	土師器、須恵器	水戸区佐食町久田	
160	元町	散布地	平安	土師器	水戸区佐食町元町	
161	南久田	散布地	平安	土師器、須恵器	水戸区佐食町南久田	
162	中城	散布地	繩文	繩文土器	水戸区字中城	
163	蓬石	散布地	繩文	繩文土器	水戸区佐食町蓬石	
164	花栗林	散布地	繩文	繩文土器	水戸区北栗林	
165	小水田	散布地	平安	繩文土器・陶器・漆器・生糸	水戸区字半天	
166	水沢女子高敷地	散布地	平安	土師器、須恵器	水戸区字半天	
167	水沢城(要塞)	城郭跡	中世・近世	土師器、須恵器	水戸区大手町一丁目他	
168	新小路	散布地	繩文	繩文土器(後・熊期)、石器	水戸区字新小路	
169	西光田Ⅰ	散布地	平安	土師器、須恵器	水戸区字西光田	
170	西光田Ⅱ	東漢跡	平安	土師器、須恵器	水戸区字西光田	
171	西光田Ⅲ	散布地	平安	土師器、須恵器	水戸区字西光田	
172	大明神	東漢跡	平安	土師器、須恵器	水戸区字大明神	
173	足寄井	東漢跡	繩文・平安	繩文土器、土器、須恵器	水戸区字足寄井・大明神	
174	足寄井Ⅱ	東漢跡	平安	土師器、須恵器	水戸区字人明神	
175	寺前	散在地	奈良	土師器、須恵器	水戸区字寺前	
176	石原	散在地	奈良	土師器、須恵器	水戸区字内石原	
177	後田	東漢跡	奈良	土師器、須恵器	水戸区字後田	
178	前田	城郭跡	平安	土器	水戸区字前田	
179	木本	散布地	平安	土器	水戸区字木本	
180	南矢中Ⅱ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水戸区字南矢中	
181	南矢中Ⅲ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水戸区字南矢中	
182	西田Ⅰ	東漢跡	平安	繩文土器、土器、須恵器	水戸区字西田	
183	西田Ⅱ	東漢跡	平安	土師器、須恵器	水戸区字西田	
184	前谷地	東漢跡	平安	土師器、須恵器	水戸区字前谷地	
185	寿安館(福原廬)	城郭跡	中世	平塁	水戸区字福原	
186	北田	東漢跡	繩文・平安	繩文土器、土師器、須恵器	水戸区字高砂敷・北田	
187	高屋敷	東漢跡	平安	土師器、須恵器	水戸区字高砂敷	
188	福原	東漢跡	平安	土師器、須恵器	水戸区字福原	
189	大鷲	散布地	平安	土師器	水戸区字大鷲	
190	新上	散布地	繩文	繩文土器、土器(早期)	水戸区字・同字天合通り	
191	鶴形山公園	散布地	繩文	繩文土器(中期)、石器	水戸区字中上町	
192	東上野	散布地	繩文	繩文土器(中期)	水戸区字東上野町	
193	小山田	散布地	繩文・平安	繩文土器(中期)、土師器、須恵器	水戸区字小山田	
194	森	散在地	平安	土器、石器	水戸区字見分森	
195	森下日	散在地	平安	繩文土器(中期)	水戸区字見分森	
196	袖谷地Ⅰ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水戸区字袖谷地	
197	袖谷地Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器	水戸区字袖谷地	
198	袖谷地Ⅲ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水戸区字袖谷地	
199	袖谷地IV	集落跡	繩文・平安	土師器、須恵器、フレーク	水戸区字袖谷地	
200	鹿ヶ馬場	散布地	繩文・平安	繩文土器、土師器、須恵器	水戸区字鹿ヶ馬場	
201	御神Ⅰ	集落跡	平安	土師器、須恵器	水戸区字真城子御神地	
202	真城子(江口地)	東漢跡	平安	土器器、須恵器、灰陶、灰瓦、瓦	水戸区字真城子真城	
203	田中	散布地	繩文・平安	繩文土器、土師器、須恵器	水戸区字真城子田中	

第3表 周辺の遺跡一覧表①

No	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地	備考
204	上林下	散布地	古代	土師器	水戸区真城子下林下	
205	中林下	集落跡	平安	土師器、須恵器	水戸区真城子下林下	
206	中林A	集落跡	平安	土師器、須恵器	水戸区真城子中林	
207	中林B	集落跡	平安	土師器、須恵器	水戸区真城子中林	
208	中林III	散布地	平安	土師器、須恵器	水戸区真城子中林	
209	馬鹿野	散在跡	中世	石灯籠、仏像用熱祀器	水戸区真城子馬鹿野	
210	堀ケ沢A	散在跡	平安	土師器、須恵器	水戸区真城子堀ケ沢	
211	堀ケ沢B	散在跡	平安	土師器、須恵器	水戸区真城子堀ケ沢	
212	折原跡	散在跡	中世		水戸区真城子折原	
213	東山跡	城跡	中世・近世	塹、土堤、單郭	水戸区真城子東山	
201	道場河跡	散布地	中世	土師器	前沢区古城子道場	
302	北面東B	散布地	繩文・古代		前沢区古城子北面東	
303	砂子田	散布地	古代	土師器	前沢区古城子砂子田	
304	鏡合下	散布地	平安	土師器、須恵器	前沢区古城子鏡合下	
305	下町	散布地	繩文・平安	繩文土器、石器、土師器、須恵器	前沢区古城子下町	
306	熊野	散布地	平安	五	前沢区古城子熊野	
307	船	散布地	平安	繩文土器、土師器、繩土	前沢区古城子船	
308	前堀	散布地	繩文・古代		前沢区古城子前堀	
309	八郎館	散布地	平安・中世・繩文	土師器、須恵器、壺、瓶	前沢区古城子八郎館	
310	宗角館	城跡跡	中世・平安	甃、穴井、白磁、かわらけ	前沢区古城子宗角	
311	明治沢	散布地	平安	布目瓦、屋根瓦、瓦瓦	前沢区古城子明治沢	
312	鳥子沢	散布地	平安・中世	埴輪、土師器	前沢区古城子鳥子沢	
313	古城外北	散布地	古代・繩文前期	繩文土器（中期）、土師器、環狀石器	前沢区古城外北	
401	川日	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	金・崎町西川日	
402	三居寺古墳	城跡跡	中世	塹、土堤、平塁、郭	金・崎町西川三居寺	
403	越子沢	散在跡	奈良・近世	土師器	金・崎町西川越子沢	
404	曾勾塚	散在跡	繩文		金・崎町西川曾勾塚	
405	利利	散布地	繩文		金・崎町西川利利	
406	利利	散布地	繩文～中世	繩文土器（中期）、土師器、須恵器、石神	金・崎町西川利利	
407	取揚石	集落跡	奈良・平安・繩文	繩文土器	金・崎町西川取揚石	
408	藤舟	散布地	繩文		金・崎町西川藤舟	
409	清水	散布地	繩文	繩文土器（陶器）、石器、磨製石斧	金・崎町西川清水	
410	黒沢	散布地	奈良・平安	繩文土器（陶器）	金・崎町西川黒沢	
411	道場	古墳（円）	奈良・繩文	繩文土器（陶）、中期）、土師器	金・崎町西川道場	
412	相田	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器、刀劍、刀子	ガラス小玉	金・崎町西川相田
413	勾玉杜下	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	金・崎町西川勾玉杜下	
414	前谷塙	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	金・崎町西川前谷塙	
415	五郎岸古墳	古墳	奈良	須恵器、管首、直刀、五鈴鏡、傳令口	金・崎町西川五郎岸	
416	荒屋敷	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	金・崎町西川荒屋敷	
417	三反田古墳	古墳（円）	奈良		金・崎町西川三反田	
418	五葉郡跡	城跡跡	平安・中世	土師器、塹、郭	金・崎町西川五葉郡	
419	梅場	散布地	奈良・平安・中世	土師器、須恵器、圓立柱	金・崎町西川梅場	
420	梅場古墳	古墳（円）	奈良・中世	勾玉、刀	金・崎町西川梅場	
421	二ノ宮古墳	古墳	奈良・平安		金・崎町西川二ノ宮	
422	長坂古墳	古墳	奈良・平安	土師器、須恵器、陶、罐	金・崎町西川長坂	
423	長坂	散布地	奈良・平安	土師器	金・崎町西川長坂下	
424	西根	散在跡	奈良・平安		金・崎町西川西根	
425	細井跡	城跡跡	中世		金・崎町西川細井跡	
426	細井	散布地	奈良・平安	土師器	金・崎町西川細井	
427	長坂後	散布地	奈良～平安	弥生土器、土師器	金・崎町西川長坂後	
428	長坂前	散布地	繩文	繩文土器（陶器）	金・崎町西川長坂前	
429	横沢	散布地	繩文		金・崎町西川横沢	
430	岡田	村跡	中世		金・崎町西川岡田	
431	米ぼさき供養塚	塚	近世	石碑	金・崎町西川米ぼさき	
432	春廢	散布地	繩文	石器	金・崎町西川春廢	
433	清水	散布地	弥生	弥生土器	金・崎町西川清水	
434	開谷	散布地	繩文	繩文土器（陶器）	金・崎町西川開谷	
435	開谷	散布地	繩文	繩文土器	金・崎町西川新田	
436	新田	散布地	繩文	繩文土器（陶器）	金・崎町西川新田	
437	獅子	散布地	繩文	繩文土器	金・崎町西川獅子	
438	明道	散布地	奈良・城跡跡	土師器	金・崎町西川明道	
439	明道	散布地	奈良・平安	土師器	金・崎町西川明道	
440	エキ守塙跡	古墳（円）	奈良		金・崎町西川守塙	
441	守塙	散布地	繩文～平安	繩文土器（中期）、土師器、石器、石碑	金・崎町西川守塙	
442	御宿城	城跡跡	中世	土師器、塹、平塁	金・崎町西川御宿城	
443	後衛古	散在跡	中世	土器	金・崎町西川後衛古	
444	若森	散布地	繩文	繩文土器（陶器）	金・崎町西川若森	
445	不動沢	散布地	繩文	繩文土器（前期）	金・崎町西川不動沢	
446	駆除古墳	今丘跡	中世	礎石、平塁、坪	金・崎町西川大林	
447	八幡館	城跡跡	平安・中世	塼、土器、平塁、郭	金・崎町西川八幡館	
448	柏山前跡	城跡跡、墓葬	近世・中世	塼、平塁、壁六往居	金・崎町西川柏山前	
449	下田谷	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	金・崎町西川下田谷	
450	齊林寺	散布地	奈良・平安・繩文	土師器、須恵器、石斧	金・崎町西川齊林寺	
451	百間	集落跡	繩文～平安	土加石、石器、碗、石臼、明鏡	金・崎町水百間	
452	飛鳥田B	散布地	奈良	土師器	金・崎町水百間飛鳥田	
453	飛鳥田	古墳（円）	奈良	土師器	金・崎町水百間飛鳥田	
454	嶺崎	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	金・崎町水百間嶺崎	
455	寒入田	散布地	奈良・平安	土師器	金・崎町水百間寒入田	

平安時代の遺跡は非常に多く、沢田遺跡（21）、宇南田遺跡（22）、尼坂遺跡（31）、牡丹野遺跡（32）、作屋敷（30）、川端（35）、堤（36）などがある。水沢区では、古代城柵の胆沢城跡（131）をはじめ、中平入遺跡（101）、石田遺跡（176）など大規模な集落が形成されている。南都田地区の遺跡では作屋敷遺跡と堤遺跡から須恵器甕が出土している。これら須恵器甕の中には器面の発泡が顕著な個体も散見されるため、須恵器窯が遺跡周辺に存在したことの間接的な証拠である。国分遺跡の南に位置する独立丘陵に見分森公園が存在し、その範囲にある見分森遺跡では穴窯と須恵器窯が発掘調査によって確認されている（伊藤・佐久間1990）。見分森遺跡は南都田地区平安時代遺跡への須恵器供給源であった可能性が考えられる。

ほかに、前沢区では昭和38年に県史跡に指定された明後沢遺跡がある。水沢区胆沢城、江刺区瀬谷子窯跡群と同範囲にある瓦が大量に出土している。古くから城柵説、窯跡説、寺院説などの仮説がたてられ、古代東北史において重要視されてきた。これまでの調査により、明後沢遺跡では平安時代の集落と粘土採掘坑が検出され、瓦、かわらけ、渥美・常滑産陶器、白磁、青磁が出土している（及川ほか2005）。

中世・近世

胆沢区内で登録されている遺跡は25カ所ある。広岡館跡（飯坂館）（33）、小山方八丁館（54）、若柳要害館（25）、香取根館（1）などがある。中世前期は確認されている遺跡が少なく、中世末から遺跡数が増加する。国分遺跡（34）もそのひとつであり、近世初頭以降の伊達藩領内における発展と遺跡数の増加は連動していると考えられる。

最近の発掘調査で、中世の資料は、国分遺跡で16世紀末の陶磁器、隣接する牡丹野遺跡で12世紀の常滑窯産陶器、川端遺跡の西方にある作屋敷遺跡で15世紀の連弁文青磁碗片と16～17世紀の瀬戸・美濃系陶器碗片が出土している。牡丹野遺跡の12世紀陶器は河川跡から出土している。

近世発掘調査例としては、同じく牡丹野遺跡で肥前産陶器、尼坂遺跡で18世紀の大堀相馬産陶器碗が出土している。

さて、国分遺跡範囲は近世都鳥村に位置する。「都鳥」は古代の胆沢城出土墨書の「鳥取」や延喜式市神名帳記載の止々井神社と共に通する由来が想定されている。止々井神社跡は現在国道397号沿いの二本木遺跡（奈良～平安時代）地内にあるが、伝承では堤遺跡と川端遺跡の中間に現在の伊勢神社（御伊勢堂）南方にあったとされる。

国分遺跡と関わる歴史的環境としては、国分遺跡の南側に宝蔵山宝寿寺（曹洞宗）が弘治元年（1555年）に創建される（寺伝による）。胆沢郡は慶長年間に伊達家の支配地となり、寛永年間以降は水沢の留守伊達家を中心とした領地経営が行われた。そのほか、藩臣の知行地が点在し、国分遺跡周辺には17世紀前半に飯坂家が広岡館に、国分家が国分館に入った。これにより広岡館は飯坂館と伝わり今日に至るが、胆沢町史記載の仙台藩の記録に従えば、寛永11年（1634年）飯坂宗長が広岡に知行地を賜るとある。元禄時代に描かれた上伊沢絵図によれば、前沢方面への街道は、北上川にほぼ並行する奥大道と広岡付近から見分森に向かって延びる街道が主要道と考えられる。想定であるが、出羽地方と連絡する広岡街道（旧仙北街道）沿いでは、広岡がひとつの要衝であったと考えらえる。上記絵図には広岡付近に、上伊沢郡代官を務めた牧野家の屋敷地も描かれている。郡代官は仙台に常駐する群奉行とは異なり、各群に居住していることが多い。このように広岡は有力者が集まる地区であり、知行主の館と宝寿寺の中間に家臣の屋敷が点在していた可能性が考えられる。国分遺跡はそうした家臣あるいは庶民たちの居住によって街道沿いに町屋が並ぶ景観となっていたと想定される。

参考・引用文献

- 胆沢町教育委員会 1995 「古文書から見えて来る江戸時代の胆沢」『胆沢町郷土資料館第3回企画展』胆沢町
胆沢町教育委員会 2005 「地名・屋号が物語る胆沢の歴史と自然」『胆沢町郷土資料館第13回企画展』胆沢町
胆沢町史刊行会 1997 『胆沢町史IV 近世編1』胆沢町
- 及川 真紀ほか 2005 「明後沢遺跡群第7・10・15次発掘調査報告書」岩手県前沢町文化財調査報告書第18集前沢町教育委員会
- 大上 和良・吉田 充 1984 「北上川中流域・胆沢扇状地における火山灰層序」『岩手大学工学部研究報告』137
斎藤 享治 1978 「岩手県胆沢川流域における段丘形成」『地理学評論』51
穴倉 圭介・安倍 庄吉 1991 『国分・芦の隨遺跡』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第21集 胆沢町教育委員会
星 雅之・田中 美穂 2010 「尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第569集 (財) 岩手県文化振興事業団
丸山 浩治ほか 2009 「道上遺跡第3次・合野遺跡・小林繁長遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第544集 (財) 岩手県文化振興事業団

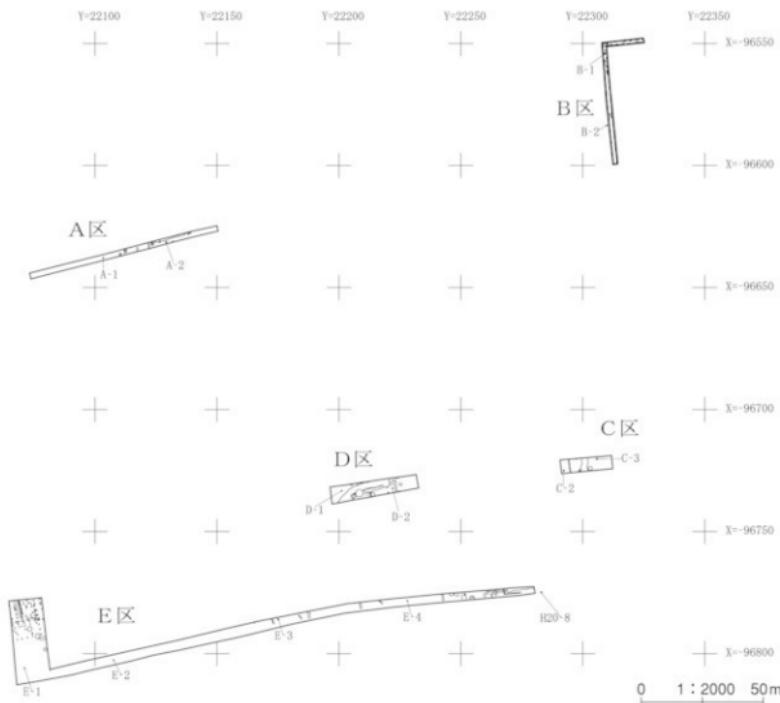
III 国分遺跡

1 概要

遺跡範囲は南都田字上広岡445番地を中心に広がっている。調査前現況は水田、畠地、宅地であつた。遺跡は胆沢扇状地中位段丘の福原段丘崖上に位置し、崖下には水沢高位段丘面上の水田地帯が広がっている。調査面積は1,814m²で本調査区1716m²、内容確認調査区98m²に分かれる。

調査区は5カ所に分かれ、北からA区（現況水田）、B区（現況水田）、C区（現況農道・水田）、D区（現況水田）、E区（現況水田・水路）と呼称し調査を行った（第5図）。

検出遺構は、陥穴状土坑13基、掘立柱建物跡5棟、土坑18基（内7基が井戸状土坑）、溝20条、柱穴170個である。遺構は、陥穴状土坑が構築された縄文時代～古代以前と、掘立柱建物、溝、井戸状土坑が構築された中世末以降に大別される。



第5図 国分遺跡遺構配置全体図

出土遺物は、土器・陶磁器小コンテナ1.5箱、金床石2点、磨石1点、砥石10点、火打石1点、石核2点、炭化種子、昆虫の羽根である。また、古代の須恵器破片が近世の溝から出土していることから、調査区外には古代集落の痕跡があると考えられる。

(1) A 区 概 要

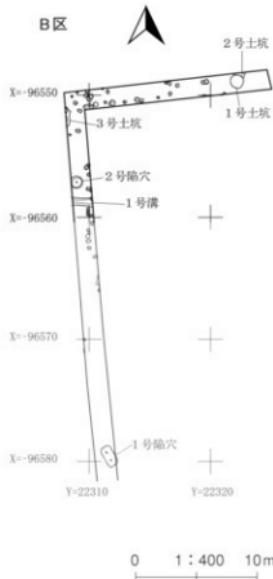
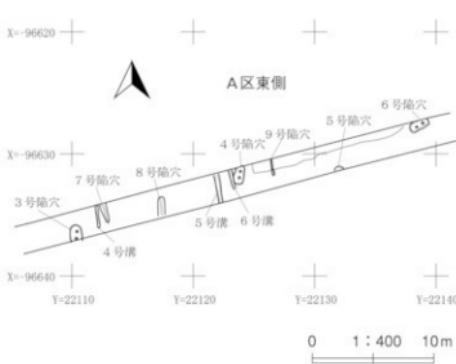
A区（第5・6図）は現況が水田である。A区の中央から東側に遺構が密集し、西側では確認されなかった。水田床土を重機によって掘削すると黄褐色土（Ⅲ層）が現れた。陥穴状土坑7基、溝3条を検出した。また、圃場整備以前の水田跡と思われる範囲からガラス片、昭和60年代の10円硬貨が出土している。水田造成による削平が進み、掘削深度の深い遺構のみが残存したものと考えられる。調査区は段丘崖線上に近く、陥穴状土坑がほぼ並列配置をとる。溝は、遺物が出土していないものの、水田面の区画と平行に走るものが多く、堆積土に水田床土が一部混入していることから新しい時期の構築と考えられる。

(2) B 区 概 要

B区（第5・6図）は現況が水田である。水田床土を重機によって掘削すると黄褐色土（Ⅲ層）が現れた。陥穴状土坑2基、土坑3基、溝1条、柱穴55個を検出した。水田造成による削平が進み、掘削深度の深い遺構のみが残存したものと考えられる。A区と同様、調査区は段丘崖線上に近い。縄文時代～古代にかけては、閔獵の行われた狩場であったと考えられる。近世以降は屋敷地であったことから、柱穴は近世以降の建物の構成要素と考えられる。ただし、調査区幅が狭いため、建物形態などは不明である。

(3) C 区 概 要

C区（第5・7図）は現況が水路、水田、農道である。C区は一部が内容確認調査区である。土坑3基、溝2条を検出した。水田造成による削平が進み、掘削深度の深い遺構のみが残存したものと考えられる。出土遺物は溝から近世後半以降の陶磁器が出土している。



第6図 国分遺跡A・B区遺構配置図

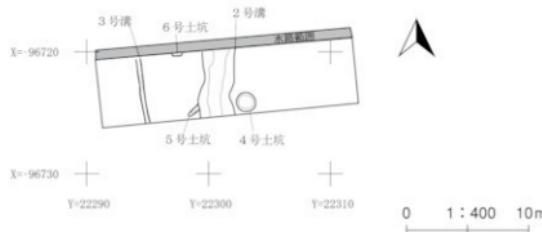
(4) D区概要

D区(第5・7図)は現況が水田である。水田床土を重機によって掘削すると黄褐色土(Ⅲ層)が現れた。D区は北側4m幅分が内容確認調査区であったが、中世末以降の貴重な遺物が多数出土したことから、調査期間内で出来る限り完掘を目指した。土坑5基(内1基が井戸状土坑)溝4条、柱穴14個を検出した。水田造成による削平が進み、掘削深度の深い遺構のみが残存したものと考えられる。井戸状土坑と溝から中世末～近世初頭の唐津産陶器、瀬戸・美濃産陶器が出土しているほか、溝の堆積土から昆虫、炭化種子が見つかった。D区は中世末以降に屋敷地となったと考えられる。溝を挟んで柱穴が散在するが、井戸状土坑と溝が同時併存であるため、建物は南側に存在すると想定される。

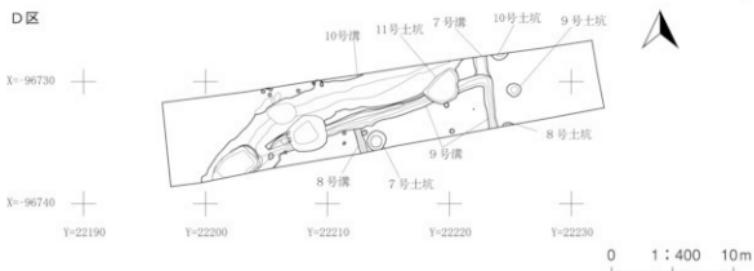
(5) E区概要

E区(第5・8図)は現況が水田と水路である。水田床土を重機によって掘削すると黄褐色土(Ⅲ層)が現れた。E区は水路から大量に水が浸み出し、また、すべての遺構から湧水した。そのため、調査区沿いに溝を掘削して水路を設置し遺構の把握に努めた。掘立柱建物5棟、土坑7基(内5基が井戸状土坑)溝10条、柱穴101個を検出した。水田造成による削平が進み、掘削深度の深い遺構のみが残存したものと考えられる。掘立柱建物を構成する柱穴からは中世末～近世初頭の輸入磁器(明朝末期の染付皿)や唐津産陶器が出土している。また、建物に隣接する井戸状土坑からも唐津産陶器が出土していることから、調査区西側は数棟の立て替えが行われた屋敷地内と考えられる。一方、調査区中央は繩文時代に多くみられる溝状の陥穴状土坑が並列配置され、A区と同様の傾向である。調査区東側は近世後半以降の井戸状土坑のほか、現代まで利用されていた暗渠廐水がある。調査区東側にも近世以降に屋敷があったものと考えられる。遺物は、鉄製品、陶磁器、木製椀、木製蓋、土製灯籠、土製人形、砥石、金床石が出土した。

C区



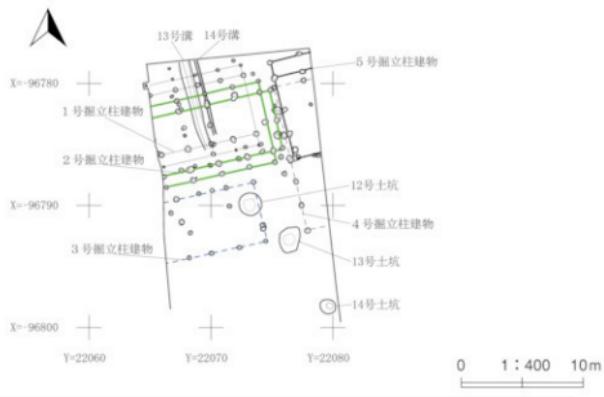
D区



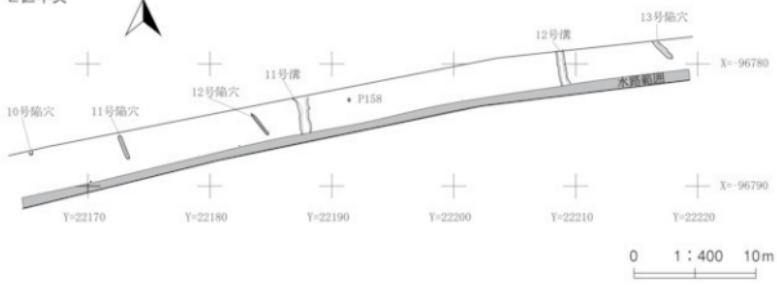
第7図 国分遺跡C・D区遺構配置図

1 概要

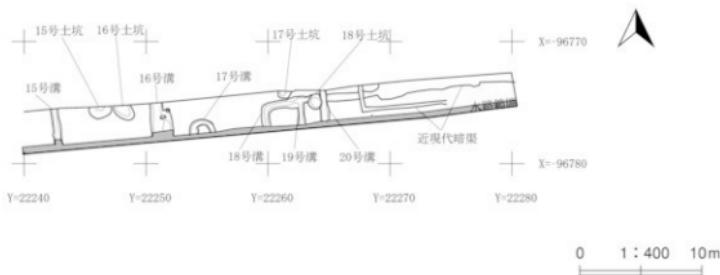
E区西侧



E区中央



E区東側



第8図 国分遺跡E区遺構配置図

2 調査・整理の方法

(1) 野外調査

3遺跡共通である。3級基準点から世界測地系座標にしたがってグリッドを組み、遺物の取り上げを行っている。

国分遺跡では、圃場整備事業施行による基準点測量成果を利用し、調査区内及び調査区付近に3・4級基準点を設置した(第5図)。設置した基準点は以下のとおりである。

A区

A- 1 :	X=- 96637.807m	Y=22103.334m	H=85.972m
A- 2 :	X=- 96631.456m	Y=22129.038m	H=85.482m

B区

B- 1 :	X=- 96554.193m	Y=22309.135m	H=83.860m
B- 2 :	X=- 96583.573m	Y=22309.815m	H=84.860m

C区

C- 2 :	X=- 96724.878m	Y=22292.195m	H=84.340m
C- 3 :	X=- 96720.153m	Y=22305.815m	H=84.440m

D区

D- 1 :	X=- 96733.237m	Y=22201.116m	H=85.463m
D- 2 :	X=- 96732.252m	Y=22222.021m	H=85.276m

E区

E- 1 :	X=- 96808.449m	Y=22070.861m	H=86.478m
E- 2 :	X=- 96802.755m	Y=22107.411m	H=86.132m
E- 3 :	X=- 96785.927m	Y=22174.969m	H=85.849m
E- 4 :	X=- 96774.997m	Y=22228.021m	H=85.197m

公道設置3級

H20- 8 :	X=- 96774.973m	Y=22282.835m	H=85.120m
----------	----------------	--------------	-----------

遺構はレベル水準器、光波測量器と電子平板システム(Cubic社製実測支援システム「遺構くん」)を用いて図化した。

(2) 室内整理と遺物分類

遺構図面は電子データを加工して、版下を作成した。遺物は洗浄、接合、復元作業を経て実測、計測、実測図トレースを行い、図版の作成を行った。図化は出土遺物のうち、遺構内出土遺物を優先し、その中でも口径推定可能な資料を優先したが、適宜破片資料も掲載した。

3 基本層序

本遺跡は第2章で紹介したとおり、胆沢扇状地の中位段丘面に属する福原面にある。基盤となる層は、福原面を構成する疊層で、約8～9万年前に形成された。その上位に黒沢尻火山灰を包含する黄褐色土（Ⅲ層）が厚く堆積する。その上位は黒～暗褐色土（Ⅱ層）で、圃場整備以前の旧表土層である。さらにその上には現代の圃場整備後の耕作土・盛土（Ⅰ層）が堆積する。

遺跡範囲内は、ほ場整備や長年の耕作によって削平と盛土が繰り返されている。そのため、Ⅱ層の堆積が確認できるのは、ごく一部の群に限られる。今回の調査区内ではⅡ層の良好な堆積を確認できなかつたので、第9図にⅡ層の堆積状況を反映できなかつた。第9図は崖線に近いB区調査区壁面の観察による。国分遺跡における遺構堆積土のベースは、Ⅱ層と考えられる。また、Ⅱ層はさらにⅡa層とⅡb層に細部可能で、Ⅱa層が圃場整備以前の表土であり、中・近世以降の堆積土のベースとなつてゐる。Ⅱb層は、若干Ⅱa層より明るく、陥穴状土坑など古代以前の遺構堆積土のベースとなつてゐる。Ⅲ層については、D・E区の井戸状土坑の壁面の観察により、層厚が150cm程度あることを確認している。Ⅲ層は、湧水する井戸状土坑内での観察で細分困難であったが、周辺遺跡において、黒沢尻火山灰と前沢火山灰の地層を確認できる遺跡があることから、観察条件の良い場所では細分可能と考えられる。なお、本遺跡では火山灰分析を行っていないが、胆沢扇状地内の旧石器時代遺跡からは、十和田八戸火山灰、十和田大不動火山灰、黒沢尻火山灰、前沢火山灰が検出されている。本遺跡Ⅲ層相当層についても、今後旧石器時代調査を行う際は、火山灰分析が必要と考えられる。

I a層 10YR3/3 暗褐色土
 (耕作土) 層厚20～40cm

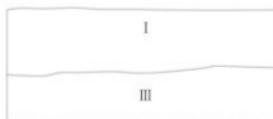
I b層 10YR4/1 褐灰色土
 (水田床土) 層厚20～40cm

II a層 10YR2/2 黒褐色土
 (圃場整備以前の表土)

II b層 10YR3/4 暗褐色土
 (古代以前の遺構堆積土のベース)
 層厚0～3cm

III 層 10YR5/8 黄褐色土
 (上部を遺構検出面)
 層厚100～150cm

— L=85.200m —



第9図 基本層序

4 検出遺構

(1) 陷穴状土坑

1号陷穴状土坑（第10図、写真図版2）

<位置・検出状況> B区の座標値（X=-96580m、Y=22312m）に位置する。現況は水田である。水田床土を除去後にⅢ層で暗褐色の隅丸長方形プランを検出した。

<規模・形状> 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸（北-南）1.74m、短軸（西-東）0.93mで、最深部54cmである。壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面は平坦で、逆茂木痕が2個ある。

<堆積土> 暗褐色～黒褐色土を主体とする。第6層が固くしまる堆積層であったため、当初、第6層上面を底面と捉えて、断面図作成を行った。その後、掘り足して第6・7層の堆積を加筆したため、断面図があたかも陷穴を掘り直したようになっているが、自然堆積である。

<遺物> なし。

<時期> 明確な時期決定根拠はない。奥州市胆沢区宮沢原下遺跡の調査成果から、本遺構と同一形態の隅丸長方形で底面平坦な陷穴状土坑は縄文時代～To-a降下（西暦915年）前と考えられる。

2号陷穴状土坑（第10図、写真図版2）

<位置・検出状況> B区の座標値（X=-96558m、Y=22309m）に位置する。現況は水田である。水田床土を除去後にⅢ層で暗褐色の円形プランを検出した。

<規模・形状> 西側一部が調査区外であるが、平面形は円形を呈すると考えられる。規模は（北-南）0.99m、短軸（西-東）0.94m以上で、最深部85cmである。壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面は平坦で、副穴が1個ある。

<堆積土> 暗褐色～黒褐色土を主体とする。自然堆積である。

<遺物> なし。

<時期> 明確な時期決定根拠はない。県内の調査事例から、本遺構と同一形態の陷穴状土坑は縄文時代と考えられる。

3号陷穴状土坑（第10図、写真図版2）

<位置・検出状況> A区の座標値（X=-96636m、Y=22111m）に位置する。現況は水田である。水田床土を除去後にⅢ層で暗褐色の隅丸長方形プランを検出した。

<規模・形状> 南側が調査区外であるが、1号陷穴状土坑と同形態の隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は長軸（北-南）1.41m以上、短軸（西-東）1.03mで、最深部66cmである。壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面は平坦で、逆茂木痕が2個ある。

<堆積土> 上部が暗褐色～黒褐色土、下部が褐色土を主体とする。自然堆積である。第7層が固くしまる堆積層であったため、当初、第7層上面を底面と捉えて、B-B'断面図の作成を行った。その後、掘り足して調査区壁のA-A'断面図を作成した。

<配置> 3～6号陷穴状土坑が列状配置と考えられる。

<遺物> なし。

<時期> 明確な時期決定根拠はない。奥州市胆沢区宮沢原下遺跡の調査成果から、本遺構と同一形態の隅丸長方形で底面平坦な陷穴状土坑は縄文時代～To-a降下（西暦915年）前と考えられる。

4号陥穴状土坑（第10図、写真図版3）

<位置・検出状況> A区の座標値（X=- 96632m、Y=22123m）に位置する。現況は水田である。水田床土を除去後にⅢ層で暗褐色の隅丸長方形プランを検出した。

<規模・形状> 北西端部が調査区外であるが、1号陥穴状土坑と同形態の隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は長軸（北-南）1.53m、短軸（西-東）0.75mで、最深部31cmである。壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面は平坦で、逆茂木痕が2個ある。

<堆積土> 上部が暗褐色土、下部が褐色～にぶい黄褐色土を主体とする。自然堆積である。

<配置> 3～6号陥穴状土坑が列状配置と考えられる。

<遺物> なし。

<時期> 明確な時期決定根拠はない。奥州市胆沢区宮沢原下遺跡の調査成果から、本遺構と同一形態の隅丸長方形で底面平坦な陥穴状土坑は縄文時代～To-a降下（西暦915年）前と考えられる。

5号陥穴状土坑（第10図、写真図版3）

<位置・検出状況> A区の座標値（X=- 96631m、Y=22131m）に位置する。現況は水田である。水田床土を除去後にⅢ層で黒褐色の半円形プランを検出した。

<規模・形状> 南部が調査区外であるが、1号陥穴状土坑と類似形態と考えられる。規模は長軸（北-南）0.50m、短軸（西-東）0.62mで、最深部32cmである。壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面は平坦である。

<堆積土> 上部が黒褐色土、下部が褐色土を主体とする。自然堆積である。

<配置> 3～6号陥穴状土坑が列状配置と考えられる。

<遺物> なし。

<時期> 明確な時期決定根拠はない。奥州市胆沢区宮沢原下遺跡の調査成果から、本遺構と類似形態の陥穴状土坑は縄文時代～To-a降下（西暦915年）前と考えられる。

6号陥穴状土坑（第10図、写真図版3）

<位置・検出状況> A区の座標値（X=- 96627m、Y=22139m）に位置する。現況は水田である。水田床土を除去後にⅢ層で黒褐色の隅丸長方形プランを検出した。

<規模・形状> 北西部が調査区外であるが、1号陥穴状土坑と同形態と考えられる。規模は長軸（北東-南西）1.68m、短軸（北西-南東）0.78mで、最深部46cmである。壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面は平坦で、逆茂木痕が4個あり、北西部に太い柱状が1個、南東部に細い柱状が3個分布する。

<堆積土> 上部が黒褐色土、下部が褐色～黄褐色土で、自然堆積である。

<配置> 3～6号陥穴状土坑が列状配置と考えられる。

<遺物> なし。

<時期> 明確な時期決定根拠はない。奥州市胆沢区宮沢原下遺跡の調査成果から、本遺構と同形態の陥穴状土坑は縄文時代～To-a降下（西暦915年）前と考えられる。

7号陥穴状土坑（第11図、写真図版3）

<位置・検出状況> A区の座標値（X=- 96634m、Y=22112m）に位置する。現況は水田である。水田床土を除去後にⅢ層で黒褐色の溝状プランを検出した。

<規模・形状> 北部が調査区外であるが、縄文時代後晩期にみられる溝状形態と考えられる。規模は

長軸（北-南）1.60m、短軸（西-東）0.50mで、最深部102cmである。壁はほぼ垂直に立ちあがり、開口部では広がる。

<堆積土> 上部が黒褐色土で下部に褐色・暗褐色土が堆積する。自然堆積である。

<配置> 7~9号陥穴状土坑が列状配置と考えられる。

<遺物> なし。

<時期> これまでの県内の調査成果から、本遺構と同形態の陥穴状土坑は縄文時代と考えられる。

8号陥穴状土坑（第11図、写真図版4）

<位置・検出状況> A区の座標値（X=-96635m、Y=22118m）に位置する。現況は水田である。水田床土を除去後にIII層で黒褐色の溝状プランを検出した。

<規模・形状> 南部が調査区外であるが、縄文時代後晩期にみられる溝状形態と考えられる。規模は長軸（北-南）1.59m、短軸（西-東）0.59mで、最深部103cmである。壁は開口部でやや広がる。

<堆積土> 黒褐色～暗褐色土が主体である。自然堆積である。

<配置> 7~9号陥穴状土坑が列状配置と考えられる。

<遺物> なし。

<時期> これまでの県内の調査成果から、本遺構と同形態の陥穴状土坑は縄文時代と考えられる。

9号陥穴状土坑（第11図、写真図版4）

<位置・検出状況> A区の座標値（X=-96630m、Y=22127m）に位置する。現況は水田である。水田床土を除去後にIII層で暗褐色の溝状プランを検出した。

<規模・形状> 北部が調査区外であるが、縄文時代後晩期にみられる溝状形態と考えられる。規模は長軸（北-南）1.40m、短軸（西-東）0.22mで、最深部40cmである。北部が水田跡によって削平されている。

<堆積土> 暗褐色土で、自然堆積と考えられる。

<配置> 7~9号陥穴状土坑が列状配置と考えられる。

<遺物> なし。

<時期> これまでの県内の調査成果から、本遺構と同形態の陥穴状土坑は縄文時代と考えられる。

10号陥穴状土坑（第11図、写真図版4）

<位置・検出状況> A区の座標値（X=-96787m、Y=22165m）に位置する。現況は水田である。水田床土を除去後にIII層で黒色プランを検出した。

<規模・形状> 北部が調査区外であるが、縄文時代後晩期にみられる溝状形態と考えられる。規模は長軸（北-南）0.28m、短軸（西-東）0.30mで、最深部96cmである。壁は開口部でやや広がる。

<堆積土> 黒褐色、暗褐色土、黄褐色土が堆積する。自然堆積である。

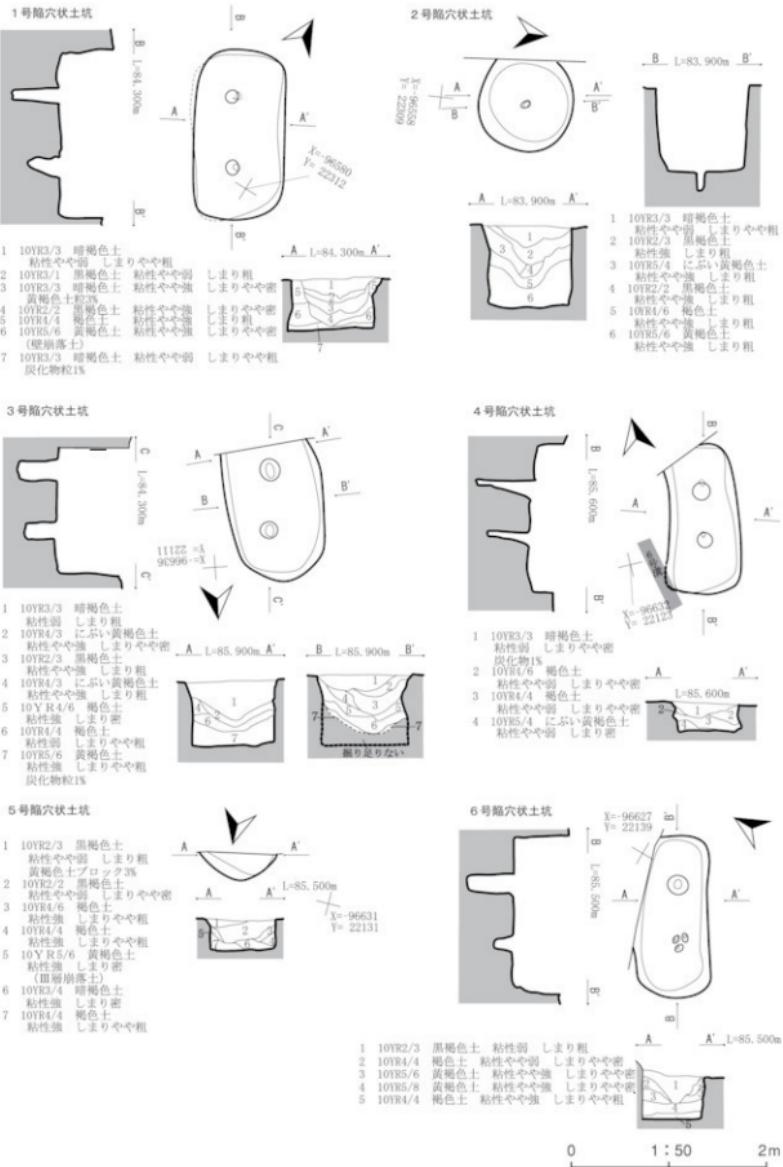
<配置> 10~12号陥穴状土坑が列状配置と考えられる。

<遺物> なし。

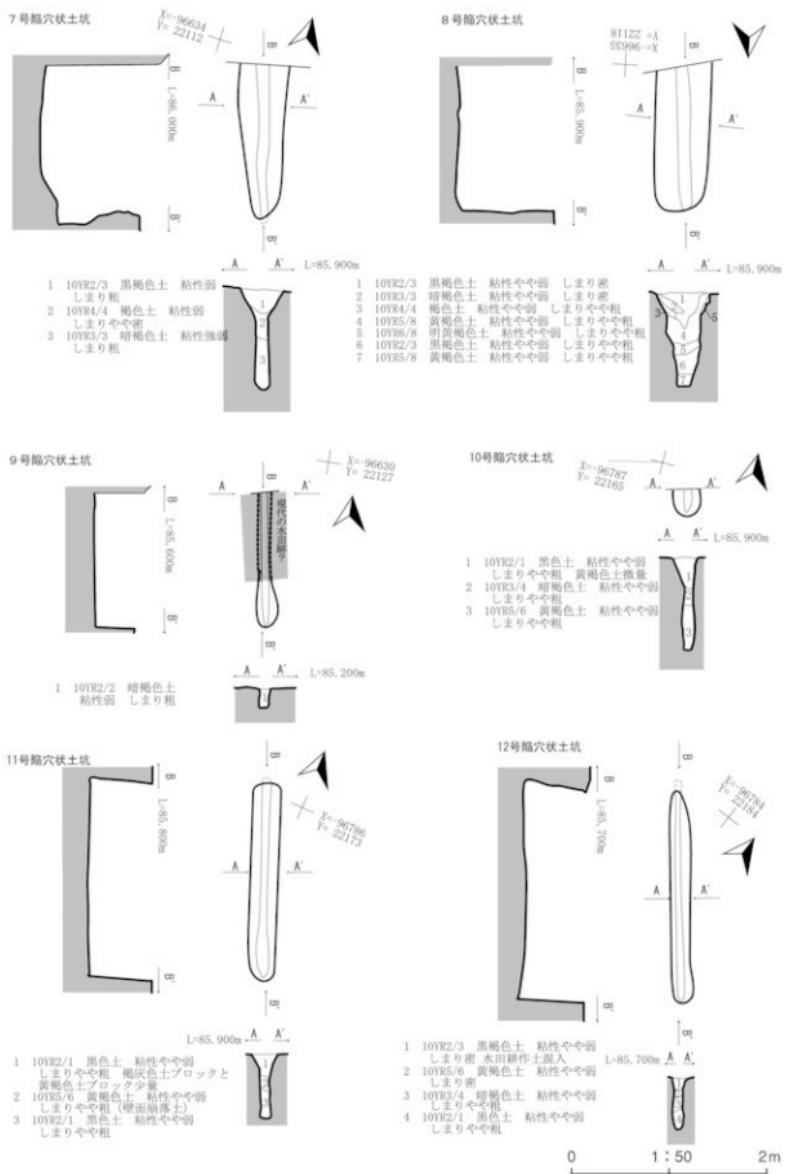
<時期> これまでの県内の調査成果から、本遺構と同形態の陥穴状土坑は縄文時代と考えられる。

11号陥穴状土坑（第11図、写真図版5）

<位置・検出状況> A区の座標値（X=-96786m、Y=22173m）に位置する。現況は水田である。水田



第10図 1 ~ 6号陷穴土坑



第11図 7 ~ 12号窯穴状土坑

床土を除去後にⅢ層で黒色プランを検出した。

<規模・形状> 繩文時代後晩期にみられる溝状形態である。規模は長軸（北-南）2.04m、短軸（西-東）0.30mで、最深部66cmである。壁は開口部でやや広がる。

<堆積土> 黒色土、黄褐色土が堆積する。自然堆積である。

<配置> 10~12号陥穴状土坑が列状配置と考えられる。

<遺物> なし。

<時期> これまでの県内の調査成果から、本遺構と同形態の陥穴状土坑は縄文時代と考えられる。

12号陥穴状土坑（第11図、写真図版5）

<位置・検出状況> A区の座標値（X=-96784m、Y=22184m）に位置する。現況は水田である。水田床土を除去後にⅢ層で黒褐色プランを検出した。

<規模・形状> 北部が調査区外であるが、縄文時代後晩期にみられる溝状形態である。規模は長軸（北-南）2.18m、短軸（西-東）0.22mで、最深部68cmである。

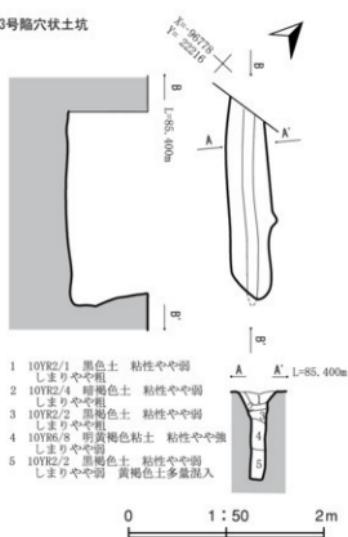
<堆積土> 黑褐色土、黄褐色土、暗褐色土、黒色土が堆積する。自然堆積である。

<配置> 10~12号陥穴状土坑が列状配置と考えられる。

<遺物> なし。

<時期> これまでの県内の調査成果から、本遺構と同形態の陥穴状土坑は縄文時代と考えられる。

13号陥穴状土坑



13号陥穴状土坑（第12図、写真図版5）

<位置・検出状況> A区の座標値（X=-96778m、Y=22216m）に位置する。現況は水田である。水田床土を除去後にⅢ層で黒色プランを検出した。

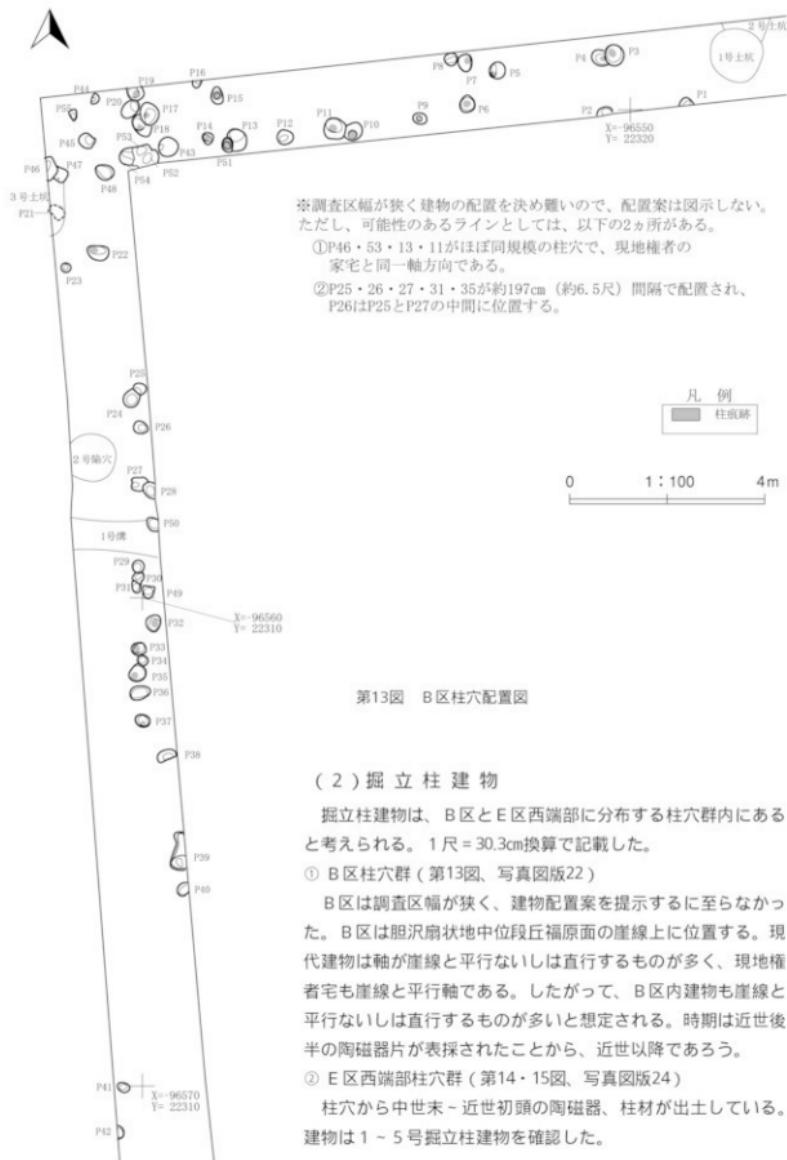
<規模・形状> 北西部が調査区外であるが、縄文時代後晩期にみられる溝状形態と考えられる。規模は長軸（北西-南東）2.10m、短軸（南西-北東）0.45mで、最深部80cmである。

<堆積土> 黑褐色土、明黄褐色土、暗褐色土、黒色土が堆積する。自然堆積である。

<遺物> なし。

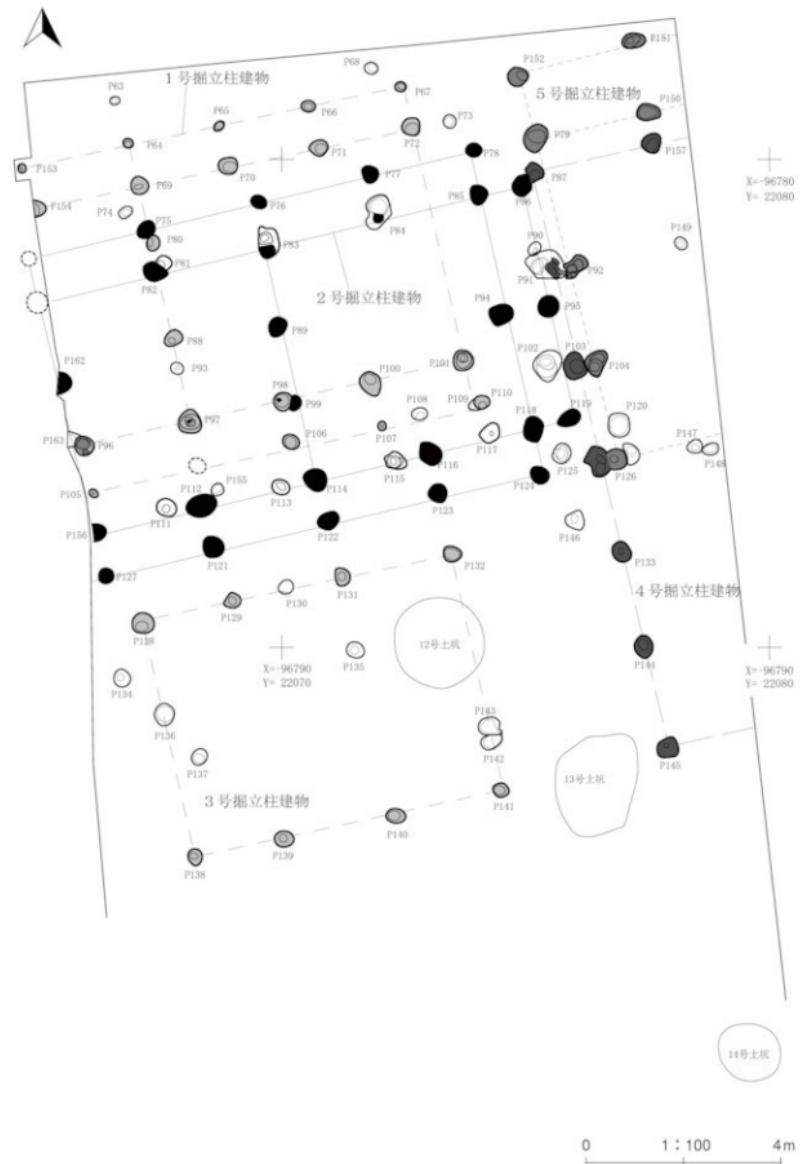
<時期> これまでの県内の調査成果から、本遺構と同形態の陥穴状土坑は縄文時代と考えられる。

第12図 13号陥穴状土坑

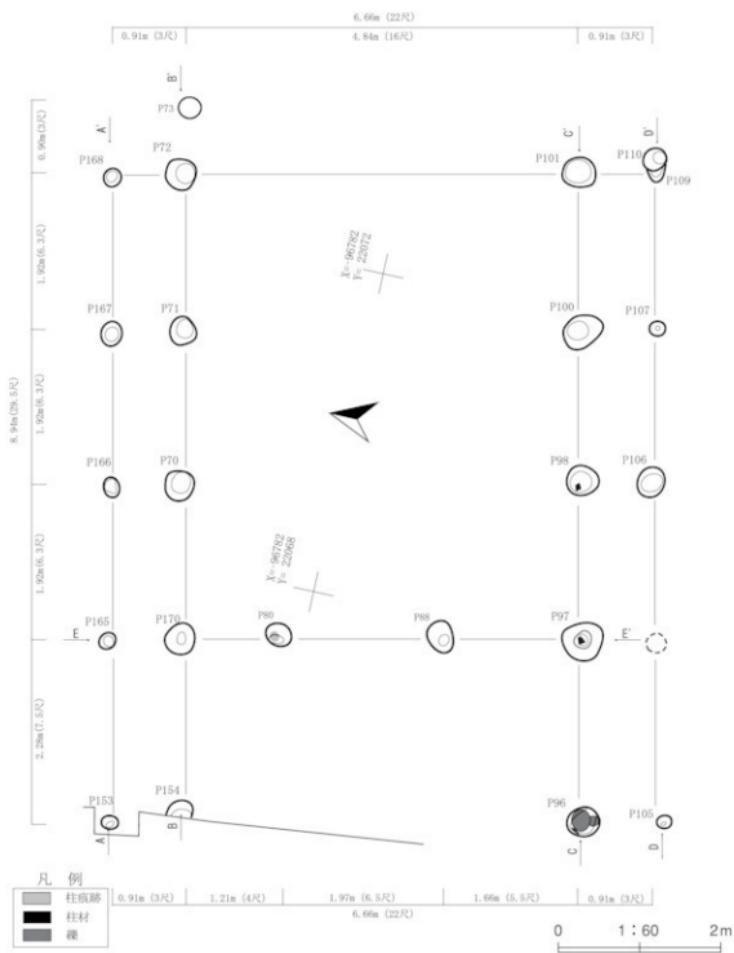




第14図 E区柱穴配置図



第15図 1~5号掘立柱建物配置図

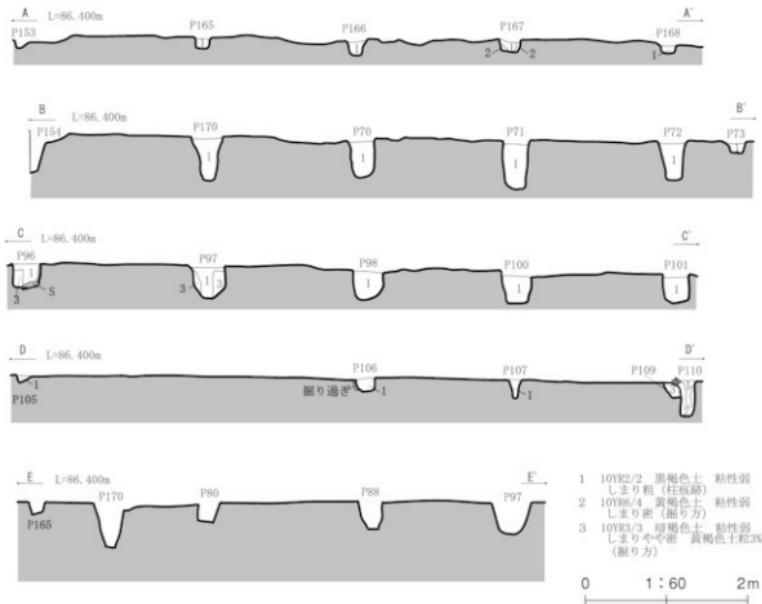


第16図 1号掘立柱建物(1)

1号掘立柱建物 (第16・17図、写真図版6)

<位置・検出状況> E区の座標値 ($X=-96782\text{m}$, $Y=22070\text{m}$) 付近に位置する。現況は水田である。検出時に東西方向に複数の柱穴列状配置が確認できたため、各柱穴を段掘りし、列を基準に建物配置を検討しながら調査を進めた。なお、調査区は全面湧水していた。

<形態> 調査区内の22個の柱穴で構成される。西部が調査区外であるため全体形状は不明であるが、



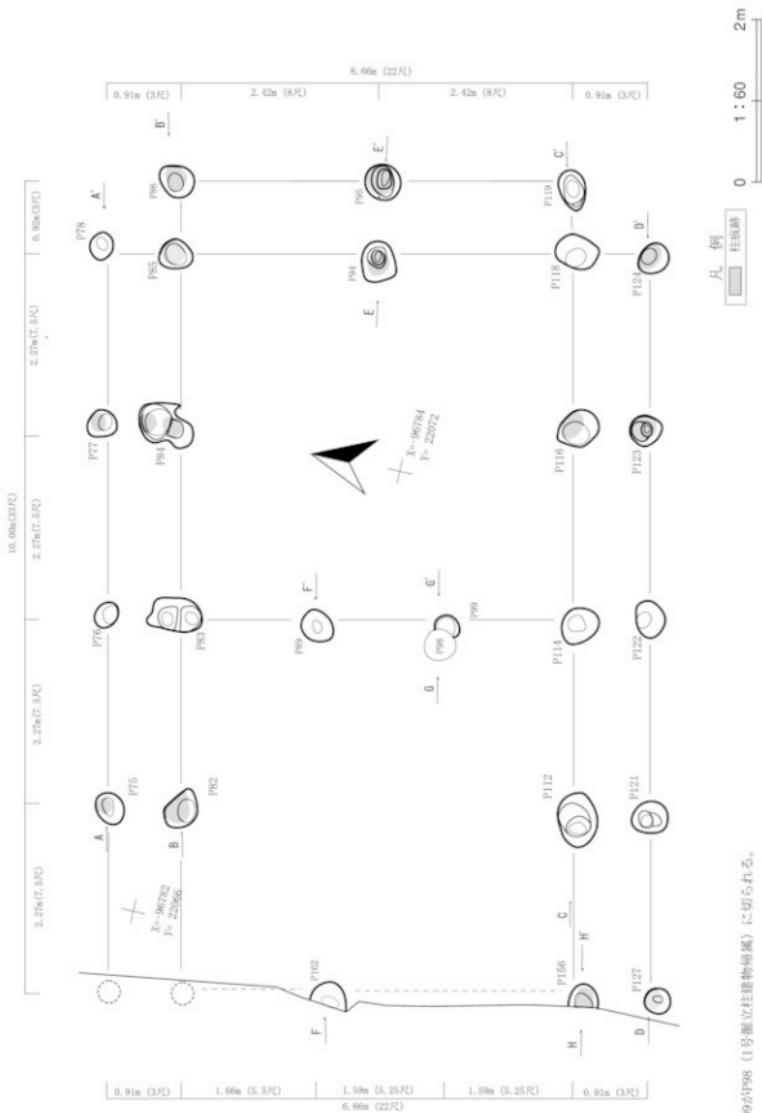
調査区範囲は4間2面分が明らかとなり、屋根型式が切妻造の母屋である。庇部は北側の柱穴深さがほぼ一定であるが、南側は深度にばらつきがある。当初本遺構と2号掘立柱建物の形態的類似性から、東側の庇部はP73~P72の3尺幅で存在すると考えたが、調査中にP101東側を入念に検出しても対応する柱穴は見つからなかったことと、梁間中央に庇部を構成する柱穴を見いだせなかつたため、存在しないとした。調査区内規模は、桁行8.04m(26.5尺)、梁間6.66m(22尺)である。調査区内面積は53.54m²である。側柱建物内には間仕切りがある。庇部は隅間のない形態で、幅は0.91m(3尺)である。桁行軸方向はN-76.8度-Eである。側柱の底面標高は85.60~85.70mが多い。庇部柱穴の底面標高は85.98~86.08mが多い。

<柱間寸法> 1尺=30.3cmとした場合、梁間の基準尺は8尺、桁の基準尺は6.3尺と7.5尺、間仕切りの柱間は、4・5.5・6.5尺の0.5尺基準が使われている。

<重複関係・配置> P98(1号掘立柱建物構成)がP99(2号掘立柱建物構成)を切る。1号掘立柱建物が母屋で、それに3・5号掘立柱建物の小屋が付属する。さらに13号土坑(井戸状土坑)が同一時期と考えられる。建物軸と切り合い関係から、1号掘立柱建物は、2号掘立柱建物(母屋)建て替えによって構築されたと考えられる。

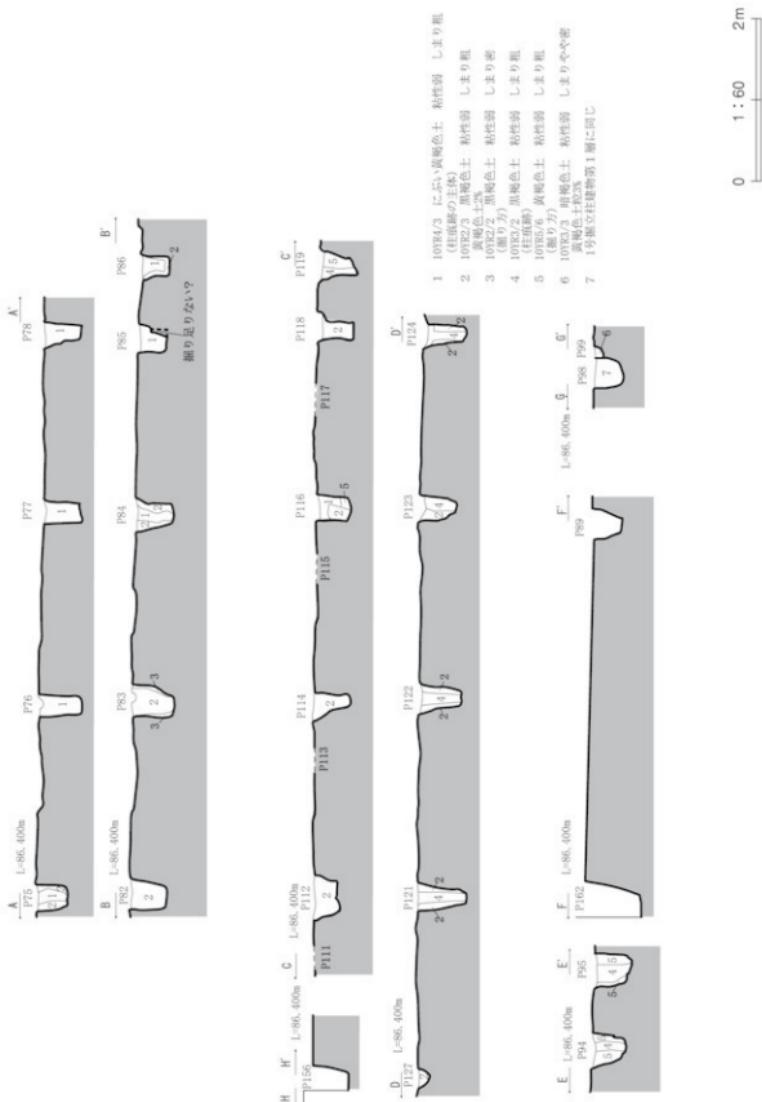
<堆積土> 黒褐色土、黄褐色土、暗褐色土である。第1層は柱痕跡と掘り方、第2・3層は掘り方の堆積土である。P109はP110の中場範囲かもしれない。

<遺物分布> P70~72・88・165から中世末~近世初頭の陶磁器(1~5)が出土している。



※P90がP98（1号櫛立柱建物）に切られる。

第18図 2号櫛立柱建物（1）



第19図 2号柱立柱建物（2）

< 遺物 > < 陶磁器 > 1は中国大陆産染付磁器皿、2・3は唐津産陶器皿、4は瀬戸産天目茶碗、5は肥前産磁器碗である。概ね中世末～近世初頭の遺物である。

< 時期 > 出土遺物と建物型式から中世末～近世初頭である。年代と建物型式については平泉町内の発掘調査事例に基づき、近世掘立柱民家がA・B・C類に分けられている（羽柴1997）。本遺構はA類に該当する。A類は建物に間仕切りがないか、あるがB類に比べて判然としないもので、1580年～1680年までの建物が抽出されており、事例としては1600～1650年が多い。

2号掘立柱建物（第18・19図、写真図版6）

< 位置・検出状況 > E区の座標値（X=- 96782m、Y=22070m）付近に位置する。現況は水田である。検出時に東西方向に複数の柱穴列状配置が確認できたため、各柱穴を段掘りし、列を基準に建物配置を検討しながら調査を進めた。なお、調査区は全面湧水していた。

< 形態 > 調査区内の25個の柱穴で構成される。西部が調査区外であるため全体形状は不明であるが、調査区範囲は4間3面建物で、屋根型式が切妻造の母屋である。調査区内規模は、桁行10.00m（33尺）、梁間6.66m（22尺）である。面積は66.66m²である。側柱建物内には間仕切りがある。庇部は隅間のない形態で、幅は0.90m（3尺）である。桁行軸方向はN- 76.7度- Eである。側柱の底面標高は85.60～85.70mが多い。庇部柱穴の底面標高は85.40～85.60mが多い。

< 柱間寸法 > 1尺 = 30.3cm換算だと、梁間の基準尺は8尺、桁行の基準尺は7.5尺である。間仕切りの柱間は、5.25・5.5尺の0.5尺基準が使われている。

< 重複関係・配置 > P99（2号掘立柱建物構成）がP98（1号掘立柱建物構成）に切られる。2号掘立柱建物が母屋で、それに4号掘立柱建物の小屋が付属する。また、12号土坑（井戸状土坑）が同一時期と考えられる。建物軸と切り合い関係から、2号掘立柱建物（母屋）の建て替えによって、1号掘立柱建物が構築されたと考えられる。

< 堆積土 > 黒褐色土、にぶい黄褐色土、黄褐色土、暗褐色土である。第1・4層は柱痕跡の主体である。第2・3・5層は掘り方の主体である。

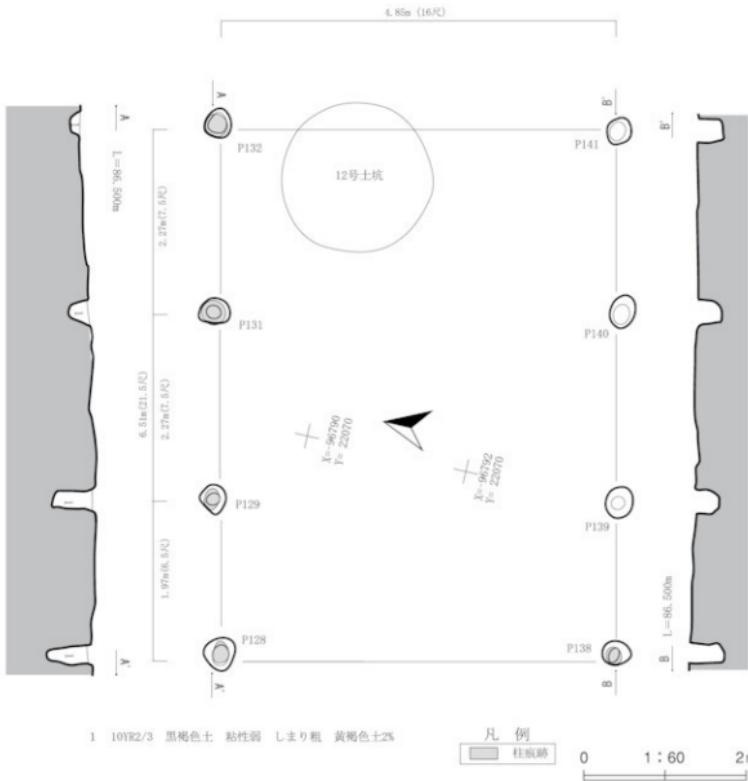
< 遺物 > 柱穴から出土した遺物はないが、検出面上で陶磁器が出土している。中世末～近世初頭の遺物である。

< 時期 > 建物型式から中世後半である。庇部に隅間をもたない型式は南北朝期以降に多くみられる形態である。

3号掘立柱建物（第20図、写真図版7）

< 位置・検出状況 > E区の座標値（X=- 96790m、Y=22070m）付近に位置する。現況は水田である。検出時に東西方向に複数の柱穴列状配置が確認できたため、各柱穴を段掘りし、列を基準に建物配置を検討しながら調査を進めた。なお、調査区は全面湧水していた。

< 形態 > 調査区内の8個の柱穴で構成される。建物西側の調査区外に延びる可能性も否定できない。また、P132の東側に位置するP146を仮に本遺構構成要素とすると、13号土坑（井戸状土坑）上に柱穴を想定する必要がある。その柱穴は13号土坑開口部の北東部付近に位置するはずで、他の柱穴の深さを考慮すると、掘方の痕跡が土坑側面に残るはずである。しかし、痕跡は確認できなかった。また、13号土坑埋没後に浅目に設置されたとしても、井戸埋没後の軟弱地盤に敢えて柱を建てるとは想定し難い。したがって、桁行3間の建物で、屋根型式が切妻造の小屋と考えられる。規模は、桁行6.51m（21.5尺）、梁間4.85m（16尺）である。面積は31.57m²である。桁行軸方向はN- 76.6度- Eである。柱



第20図 3号掘立柱建物

穴の底面標高は85.80～85.90mが多い。

<柱間寸法> 梁間の基準尺は8尺、桁行の基準尺は6.5尺と7.5尺である。

<配置> 本遺構は1号掘立柱建物を母屋とし、それに付属する小屋である。また、13号土坑（井戸状土坑）が同一時期と考えられる。

<堆積土> 黒褐色土である。

<遺物> なし。

<時期> 建物配置から1号掘立柱建物と同じ中世末～近世初頭である。

4号掘立柱建物（第21図、写真図版7）

<位置・検出状況> E区の座標値（X=-96782m、Y=22078m）付近に位置する。現況は水田である。検出時に南北方向に複数の柱穴列状配置が確認できたため、各柱穴を段掘りし、列を基準に建物配置を検討しながら調査を進めた。なお、調査区は全面湧水していた。

<形態> 調査区内の8個の柱穴で構成される。建物東側は調査区外である。調査区内で1×6間確認し、想定される規模は2×6間建物である。屋根型式が切妻造の小屋である。規模は、桁行11.82m（39尺）、梁間2.42m（8尺）以上である。調査区内面積は28.60m²、推定される建物全体は57.20m²である。桁行軸方向はN-12.5度-Wである。柱穴の底面標高は北側が85.55～85.70mが多く、南側が85.20～85.50mにまとまる。1～5号掘立柱建物は梁間の基準尺が全て8尺である。各建物の梁間は全て8尺の倍数である可能性が高く、県内の調査事例などから、本遺構の梁間は2間の可能性が高い。

<柱間寸法> 梁間の基準尺は8尺、桁行の基準尺は6.5尺である。

<配置> 本遺構は2号掘立柱建物を母屋とし、それに付属する小屋である。また、12号土坑（井戸状土坑）が同一時期と考えられる。切り合い関係は確認できなかったが、本遺構の建て替えが5号掘立柱建物と考えられる。

<堆積土> 黒褐色土、暗褐色土である。

<遺物> なし。

<時期> 建物配置から2号掘立柱建物と同じ中世後半である。なお、P145から出土した柱材の放射性炭素年代測定（AMS）を行った結果、1σで16世紀後半～末と17世紀前半の2つの年代幅が示された。中世後半は放射性炭素年代測定値の較正曲線がほぼフラットになるため、複数の年代幅が提示されることが多い。出土遺物がないため、どちらの年代幅が有効かは明確でないが、建物配置から16世紀後半～末の年代が支持される。なお、測定値の詳細はVI章に記載してある。

5号掘立柱建物（第22図、写真図版8）

<位置・検出状況> E区の座標値（X=-96782m、Y=22078m）付近に位置する。現況は水田である。検出時に南北方向に複数の柱穴列状配置が確認できたため、各柱穴を段掘りし、列を基準に建物配置を検討しながら調査を進めた。なお、調査区は全面湧水していた。

<形態> 調査区内の7個の柱穴で構成される。建物東側は調査区外である。調査区内では3間1面建物で、屋根型式が切妻造の小屋と考えられる。規模は、桁行8.02m（26.5尺）、梁間2.42m（8尺）以上である。調査区内面積は19.40m²、推定される建物全体は38.82m²である。桁行軸方向はN-13.7度-Wである。柱穴の底面標高は85.46～85.70mにまとまる。1～5号掘立柱建物は梁間の基準尺が全て8尺であるため、各建物の形態は全て8尺の倍数である可能性が高く、県内の他の調査事例などから、本遺構の梁間は2間と想定される。

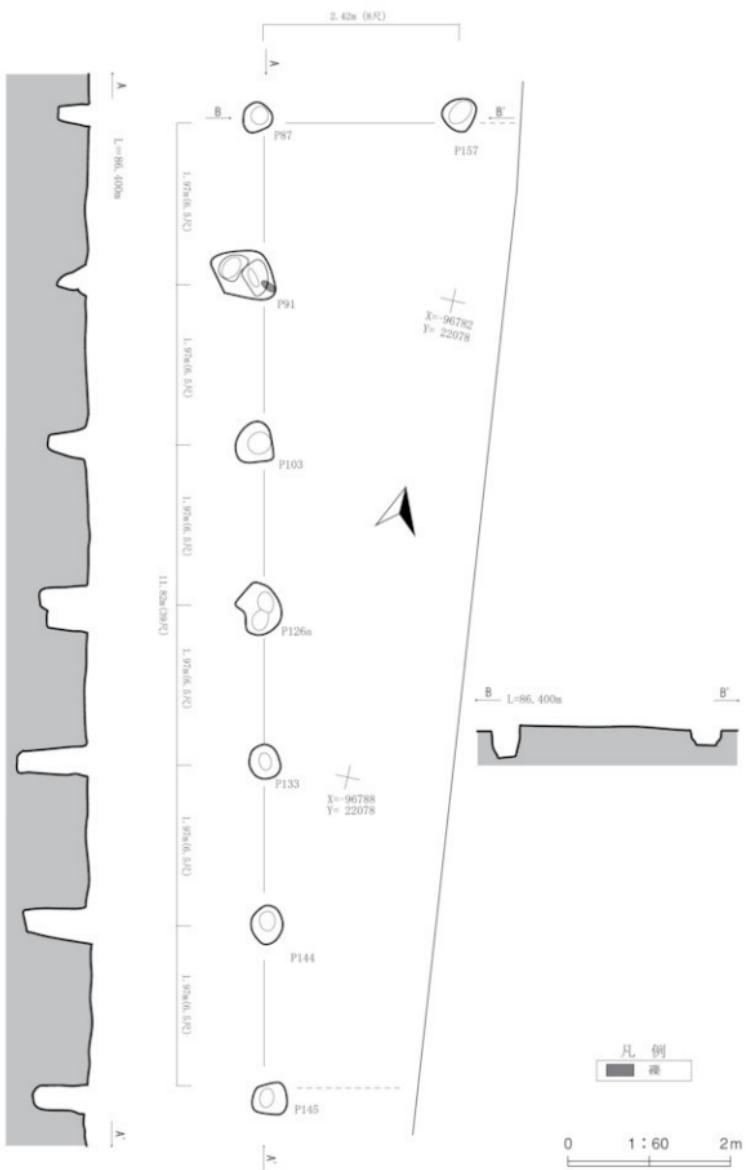
<柱間寸法> 梁間の基準尺は8尺である。桁行は6.5・9尺があり、基準尺は0.5尺単位である。庇幅は4.5尺である。

<配置> 本遺構は1号掘立柱建物を母屋とし、それに付属する小屋である。また、13号土坑（井戸状土坑）が同一時期と考えられる。4号掘立柱建物との切り合い関係は不明である。

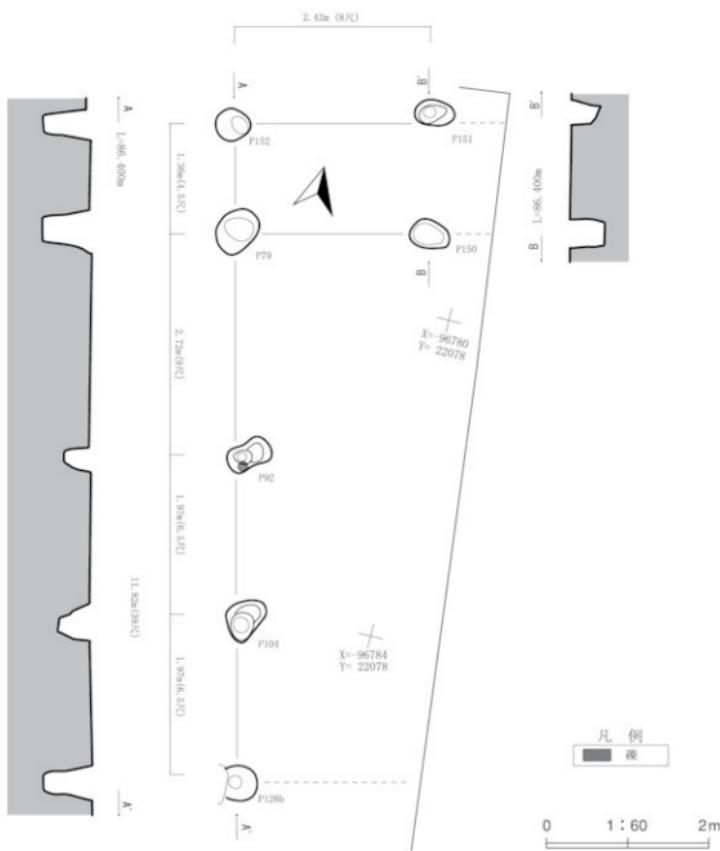
<堆積土> 黒褐色土、暗褐色土である。

<遺物> なし。

<時期> 建物配置から1号掘立柱建物と同じ中世末～近世初頭と考えられる。1・3・5号掘立柱建物と13号土坑は、同一時期の可能性がある。1号掘立柱建物が2号掘立柱建物を切ることから、本建



第21図 4号掘立柱建物



第22図 5号掘立柱建物

物は2・4号掘立柱建物よりも新しいと考えられる。

(3) 土 坑

1号土坑（第23図、写真図版8）

<位置・検出状況> B区の座標値（X=- 96549、Y=22323m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色の円形プランを検出した。

<規模・形状> 平面形は円形である。断面形はフラスコ形である。規模は（北-南）1.08m、（西-東）1.02mで、最深部62cmである。壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面は平坦である。

<重複関係> 1号土坑が2号土坑を切る。

<堆積土> 上部が黒褐色土を主体で、下部が黄褐色土と暗褐色土である。人為堆積である。

<遺物> なし。

<時期> 時期不明である。

2号土坑（第23図、写真図版8）

<位置・検出状況> B区の座標値（X=- 96549、Y=22323m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で1号土坑範囲に接する黒褐色プランを検出した。

<規模・形状> 平面形は不明である。断面形は楕形である。規模は調査区内で（北-南）0.60m、（西-東）1.00mで、最深部32cmである。壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面は平坦である。

<重複関係> 2号土坑が1号土坑に切られる。

<堆積土> 黒褐色土を主体とする。

<遺物> なし。

<時期> 時期不明である。

3号土坑（第23図、写真図版8）

<位置・検出状況> B区の座標値（X=- 96552、Y=22308m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で半円形のにぶい黄褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 西側が調査区外のため、平面形は不明である。断面形は楕形である。規模は調査区内で（北-南）1.06m、（西-東）0.40mで、最深部33cmである。壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面はほぼ平坦である。

<重複関係> 近世以降のP46・47に切られる。

<堆積土> にぶい黄褐色土と黄褐色土で人為堆積である。

<遺物> なし。

<時期> 近世以降である。

4号土坑（第23図、写真図版9）

<位置・検出状況> C区の座標値（X=- 96723、Y=22303m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で円形の黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 平面形は円形、断面形は皿形である。規模は（北-南）1.57m、（西-東）1.56mで、最深部15cmである。壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面はほぼ平坦である。

<堆積土> 黒褐色土で人為堆積である。

<遺物> なし。

<時期> 時期不明であるが、堆積土から近世以降の可能性が高い。

5号土坑（第23図、写真図版9）

<位置・検出状況> C区の座標値（X=- 96724、Y=22299m）付近に位置する。現況は水田である。Ⅲ層面で溝状の黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 平面形は溝状、断面形はバケツ形である。2号溝に切られるが、規模は（南西- 北東）1.50m、（北西- 南東）0.46mで、最深部32cmである。底面は2号溝方向に向かって下降する。平面形は縄文時代の陥穴状土坑と類似するが、近世以降の堆積土と類似するため、性格不明である。

<堆積土> 黒褐色土で人為堆積である。2号溝第2層に類似している。

<遺物> なし。

<時期> 堆積土から2号溝と同じ近世後半頃である。

6号土坑（第23図、写真図版9）

<位置・検出状況> C区の座標値（X=- 96720、Y=22297m）付近に位置する。現況は水田である。Ⅲ層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 北側が調査区外のため平面形は不明、断面形は椀形である。調査区内規模は（北- 南）0.21m、（西- 東）0.88mで、最深部27cmである。性格不明である。

<堆積土> 黒褐色土である。

<遺物> なし。

<時期> 時期不明であるが、堆積土から近世以降の可能性が高い。

7号土坑（第24図、写真図版9）

<位置・検出状況> D区の座標値（X=- 96734、Y=22215m）付近に位置する。現況は水田である。Ⅲ層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 南側の一部が調査区外であるが、平面形は梢円形である。規模は（北- 南）1.56m、（西- 東）1.55mで、調査の及んだ深さは244cmである。

<堆積土> 黒褐色土主体で人為堆積である。掘削作業は、湧水によって堆積土が崩落しやすく安全性を確保できないため、半裁作業を断念して、完掘に努めた。しかし、掘削深度が2mを超えて底面に達しないため、未完掘のまま、調査を終了した。

<配置・性格> 性格は井戸である。本遺構から出土した陶磁器と同一個体もしくは数枚セットと考えられる唐津産陶器皿が、9・10号溝でも出土している。本遺構は、区画溝の性格を持つ9号溝の内側に位置する。

<遺物> 検出面から1.5mより深い場所から、陶磁器、石器、多量の大形礫が出土した。

【陶磁器】10・11は中世末- 近世初頭の唐津産陶器皿で、草花文を描く。内面に胎土目が残る。

【石器】72- 75は砥石、80は金床石、81・82は石核である。81・82の石核は火打石素材である。

【礫】人頭大の個体が多く、井戸を埋め戻すために投げ込まれたと考えられる。

<時期> 出土遺物から、中世末- 近世初頭である。

8号土坑（第24図、写真図版10）

<位置・検出状況> D区の座標値（X=- 96734、Y=22224m）付近に位置する。現況は水田である。

III層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状>南側が調査区外のため平面形は不明、断面形は皿形である。調査区内規模は(北-南)0.28m、(西-東)1.00mで、最深部18cmである。性格不明である。

<堆積土>黒褐色土で、人為堆積である。

<遺物>なし。

<時期>時期不明であるが、堆積土から近世以降の可能性が高い。

9号土坑(第24図、写真図版10)

<位置・検出状況>D区の座標値(X=-96730、Y=22225m)付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状>平面形は不整円形、断面形は椀形である。規模は(北-南)1.06m、(西-東)1.18mで、最深部28cmである。性格不明である。

<堆積土>黒褐色土で、人為堆積である。

<遺物>なし。

<時期>時期不明であるが、堆積土から近世以降の可能性が高い。

10号土坑(第24図、写真図版10)

<位置・検出状況>D区の座標値(X=-96728、Y=22225m)付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状>北側が調査区外のため、平面形は不明、断面形は皿形である。調査区内規模は(北-南)0.53m、(西-東)0.96mで、最深部18cmである。性格不明である。

<堆積土>黒褐色土で、人為堆積である。

<遺物>なし。

<時期>時期不明であるが、堆積土から近世以降の可能性が高い。

11号土坑(第24図、写真図版10)

<位置・検出状況>D区の座標値(X=-96730、Y=22218m)付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状>北側が10号溝と接する。平面形は不整円形、断面形は皿形である。規模は(北西-南東)2.32m、(南西-北東)3.16mで、最深部21cmである。

<配置・性格>9号溝を切り、10号溝に接している。本遺構は、10号溝に付属する施設と考えられる。

<堆積土>黒褐色土で、人為堆積である。

<遺物>12は中世末～近世初頭の唐津産陶器皿で、草花文を描く。9・10号溝・7号土坑出土資料と、同一個体もしくは数枚セットと考えられる。

<時期>10号溝と同一時期の中世末～近世初頭である。

12号土坑(第25図、写真図版10)

<位置・検出状況>E区の座標値(X=-96789、Y=22074m)付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状>平面形は開口部が円形である。規模は(北-南)1.88m、(西-東)1.85mで、調査の

及んだ深さは160cmである。

<堆積土> 黒褐色土主体で人為堆積である。炭化材片が多く含まれていた。掘削作業は、湧水によって堆積土が崩落しやすく安全性を確保できないため、堆積土の半裁作業を深さ1m程度に達した段階で中止し、ベルトを残さず完掘に努めた。掘削深度160cmのところで、検土杖により深さを検討したが底面に達しなかった。湧水も激しく安全性を確保しがたいので、未完掘のまま、調査を終了した。

<配置・性格> 性格は井戸である。本遺構は中世末～近世初頭の遺構が密集した範囲に位置する。本遺構からは、中世末～近世初頭の遺物が出土している。他の遺構との配置関係から、本遺構は、2号掘立柱建物を母屋、4号掘立柱建物を小屋とする屋敷地内に構築された井戸と考えられる。本遺構は3号掘立柱建物と重複するが、切合い関係は不明である。

<遺物> 堆積土から、陶磁器、石器、多量の大形礫が出土した。

【陶磁器】22・23は中世末～近世初頭の陶器である。22が瀬戸・美濃産陶器小壺、23が唐津産陶器皿である。

【石器】79の金床石が出土している。79はスヌが全面に付着している。調査区内で鍛冶関連遺構は見つかっていないが、金床石の存在によって、本遺構周辺に鍛冶関連遺構の存在が想定される。

【礫】人頭大の個体が多く、井戸を埋め戻すために投げ込まれたと考えられる。

<時期> 出土遺物から、中世末～近世初頭である。隣接する13号土坑からは、近世前半の陶磁器が出土しており、本遺構よりも新しい。

13号土坑（第25図、写真図版10）

<位置・検出状況> E区の座標値（X=-96792、Y=22075m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 平面形は間口部が不整形、中場が楕円形である。規模は（北西-南東）1.95m、（南北-北東）1.78mで、調査の及んだ深さは170cmである。

<堆積土> 黒褐色土主体で人為堆積である。炭化材片が多く含まれていた。掘削作業は、湧水によって堆積土が崩落しやすく安全性を確保できないため、堆積土の半裁作業を深さ1m程度に達した段階で中止し、ベルトを残さず完掘に努めた。掘削深度170cmのところで、検土杖により深さを検討したが1m以上の深さまで刺しても底面に達しなかった。湧水も激しく安全性を確保しがたいので、未完掘のまま、調査を終了した。

<配置・性格> 性格は井戸である。本遺構は中世末～近世初頭の遺構が密集した範囲に位置し、1号掘立柱建物を母屋、3・5号掘立柱建物を小屋とする屋敷地内に構築された井戸と考えられる。なお、本遺構は、遺構としては4号掘立柱建物と重複関係はないが、想定される4号掘立柱建物の切妻屋根範囲内と重なる。したがって、本遺構と4号掘立柱建物は、同時期とするには近接しすぎていることから、同時併存とは考え難い。

<遺物> 堆積土から、陶磁器、石器、多量の大形礫、木材片が出土した。

【陶磁器】13は17世紀前半の唐津産陶器皿である。

【木製品・木材】94はナラ材の鍋蓋、105・106・108はクリ材の柱材である。

【礫】人頭大の個体が多く、井戸を埋め戻すために投げ込まれたと考えられる。

<時期> 出土遺物から、近世前半である。なお、出土した柱材の一部について放射性炭素年代測定を行った結果、1σで15世紀後半と17世紀前半の2つの年代幅が示された。中世後半は放射性炭素年代測定値の較正曲線がほぼフラットになる時期であるため、複数の年代が提示されることが多い。今回

の測定値は、確率論的には15世紀代が高いが、出土遺物の年代と一致する17世紀初頭の年代のほうが有効と考えられる。ただし、年代測定を行った資料が17世紀に伐採されたものでなく、古材の再利用品であるとするならば、15世紀の測定値でも有り得る数値である。測定値の詳細はVI章に記載してある。

14号土坑（第25図、写真図版10）

<位置・検出状況> E区の座標値（X=-96799、Y=22079m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 平面形は開口部、中場、底面が梢円形である。規模は（北-南）1.17m、（西-東）1.30mで、深さは190cmである。

<堆積土> 黒褐色土主体で人為堆積である。炭化材片と大形礫が、堆積土上部から下部まで掘削深度に関係なく出土した。掘削作業は、湧水によって堆積土が崩落しやすく安全性を確保できないため、堆積土の半裁作業を深さ1m程度に達した段階で中止し、ベルトを残さず完掘に努めた。掘削深度170cmのところで、検土杖により深さを検討した結果、残り20~30cm程度と判明したので底面まで掘り下げた。

<配置・性格> 性格は井戸である。本遺構は中世後半~近世初頭の遺構が密集した範囲に位置する。配置から、2・4号掘立柱建物と同時期か、1・3・5号掘立柱建物と同時期か二者が想定される。いずれにしても屋敷地内に構築された井戸と考えられる。

<遺物> 堆積土から、石器、多量の大形礫、木材片が出土した。

【石器】頁岩製剝片が1点出土している。

【木材】形状不明のクリ材が出土している。

【礫】人頭大の個体が多く、井戸を埋め戻すために投げ込まれたと考えられる。

<時期> 堆積土と配置から、中世後半~近世前半である。

15号土坑（第25図、写真図版11）

<位置・検出状況> E区の座標値（X=-96775、Y=22246m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 北側が調査区外であるが、平面形は梢円形と考えられる。調査区内規模は（北-南）0.93m、（西-東）1.84mで、深さは146cmである。

<堆積土> 黒褐色土主体で人為堆積である。掘削作業中は湧水が少なかった。

<配置・性格> 性格は井戸である。近世後半~近代の遺構が多いE区東側に位置し、16号土坑と隣接する。庭園に飾られる草屋型灯籠が底面から出土していることから、本遺構は、屋敷地内の庭園に設置されていた可能性がある。

<遺物> 堆積土下部と底面から陶磁器、土製品、鉄製品が出土した。調査区外にあたる本遺構北側部分には、今回の調査によって出土した遺物と同一個体資料も存在すると考えられる。

【陶磁器】17~21は19世紀代の陶磁器である。17は東北産擂鉢、18・19は大堀相馬産陶器皿、20は東北産陶器植木鉢、21は大堀相馬産从飯器である。

【土製品】89・90は人形片、92・93は草屋型灯籠である。灯籠には内面にススが付着している。

【鉄製品】110は棒状である。何らかの道具の軸であろうか。

<時期> 出土遺物から19世紀前半である。灯籠の廃棄と遺構の廃絶時期が一致するならば、本遺構を

含む屋敷地の廃絶もしくは増改築との関連性が想定される。

16号土坑（第25図、写真図版11）

<位置・検出状況> E区の座標値（X=- 96775、Y=22248m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒色土プランを検出した。

<規模・形状> 北側が調査区外であるが、平面形は橢円形と考えられる。断面形は皿形である。調査区内規模は（北西- 南東）1.38m、（南西- 北東）1.32mで、深さは16cmである。

<堆積土> 黒色土で人為堆積である。

<配置・性格> 性格は不明である。近世後半～近代の遺構が多いE区東側に位置し、15号土坑と隣接する。

<遺物> 堆積土から、陶磁器、土製品が出土した。

【陶磁器】15は17世紀代の肥前産磁器碗、16は18世紀以降の東北産陶器蓋である。

【土製品】86～88は人形片である。86は僧侶と考えられる。

<時期> 出土遺物から17世紀末～18世紀である。

17号土坑（第25図、写真図版11）

<位置・検出状況> E区の座標値（X=- 96774、Y=22261m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 北側が調査区外で、平面形は不明、断面形は椀形である。調査区内規模は（北- 南）0.52m、（西- 東）1.01mで、深さは25cmである。

<堆積土> 黒褐色土で人為堆積である。

<配置・性格> 性格は不明である。近世後半～近代の遺構が多いE区東側に位置し、18号溝と隣接するが、重複関係はない。

<遺物> なし。

<時期> 時期不明であるが、堆積土から近世以降と考えられる。

18号土坑（第25図、写真図版11）

<位置・検出状況> E区の座標値（X=- 96775、Y=22263m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 平面形は開口部が不整形、中場と底面が橢円形である。規模は（北- 南）1.20m、（西- 東）1.14mで、深さは245cmである。

<堆積土> 黒褐色土主体で人為堆積である。掘削作業中は湧水しており、18・20号溝との切り合い関係が把握困難であった。

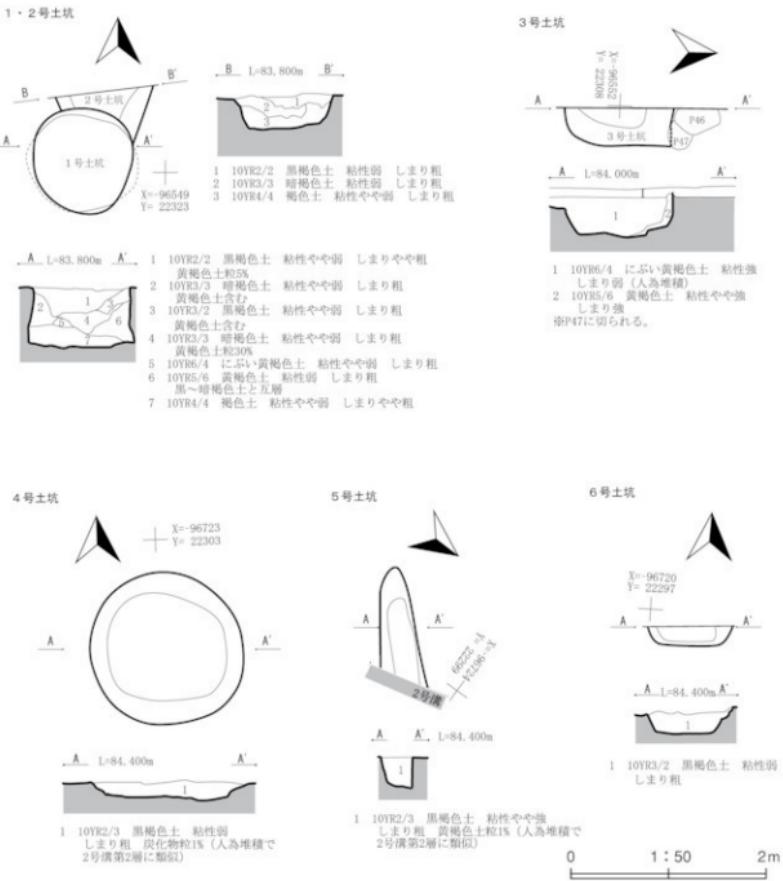
<配置・性格> 性格は井戸である。近世後半～近代の遺構が多いE区東側に位置し、18・20号溝と重複する。堆積土の把握が困難であり、新旧関係を明確にできなかった。

<遺物> 堆積土から、陶磁器、土製品、木製品、鉄製品が出土した。

【陶磁器】24～27・29は19世紀、28は18世紀後半の陶磁器である。24～26は擂鉢、27は鉢類、28・29は肥前産磁器碗である。

【土製品】91は人形片である。

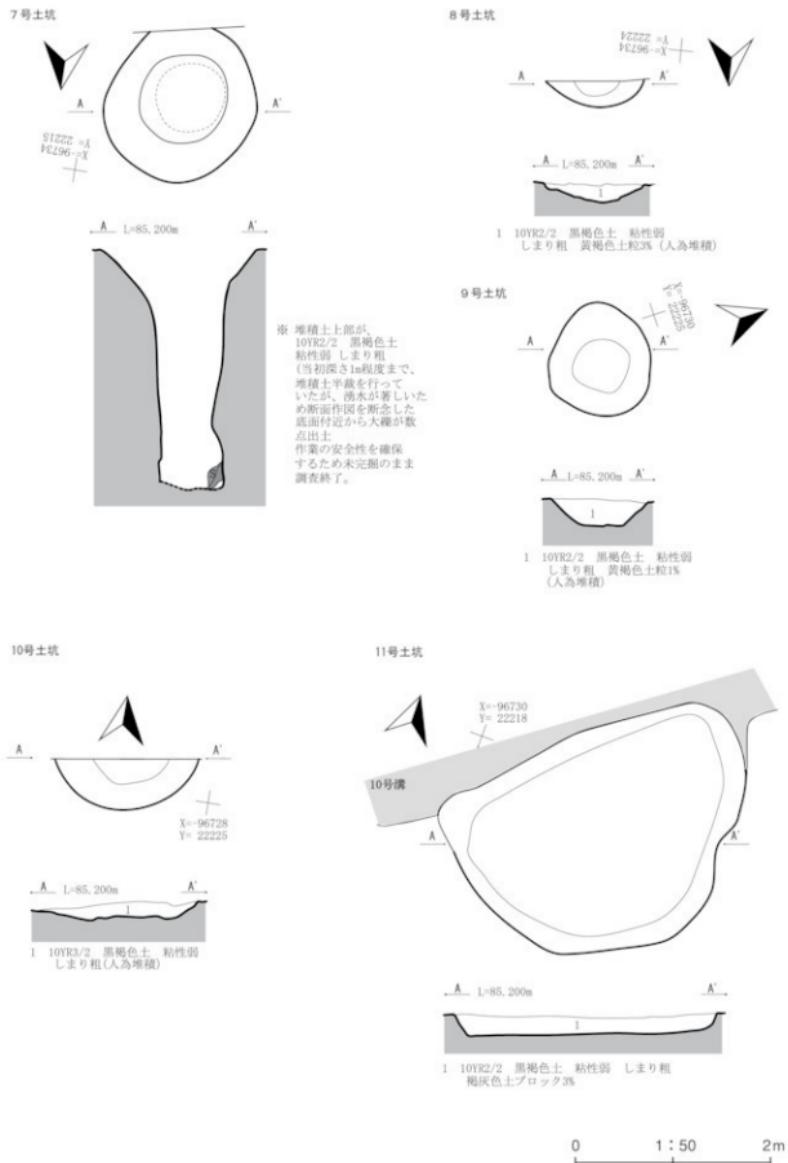
【木製品】95・96・98～104が出土した。95の漆器椀蓋と96の漆器椀はセットと思われる。98は曲物底



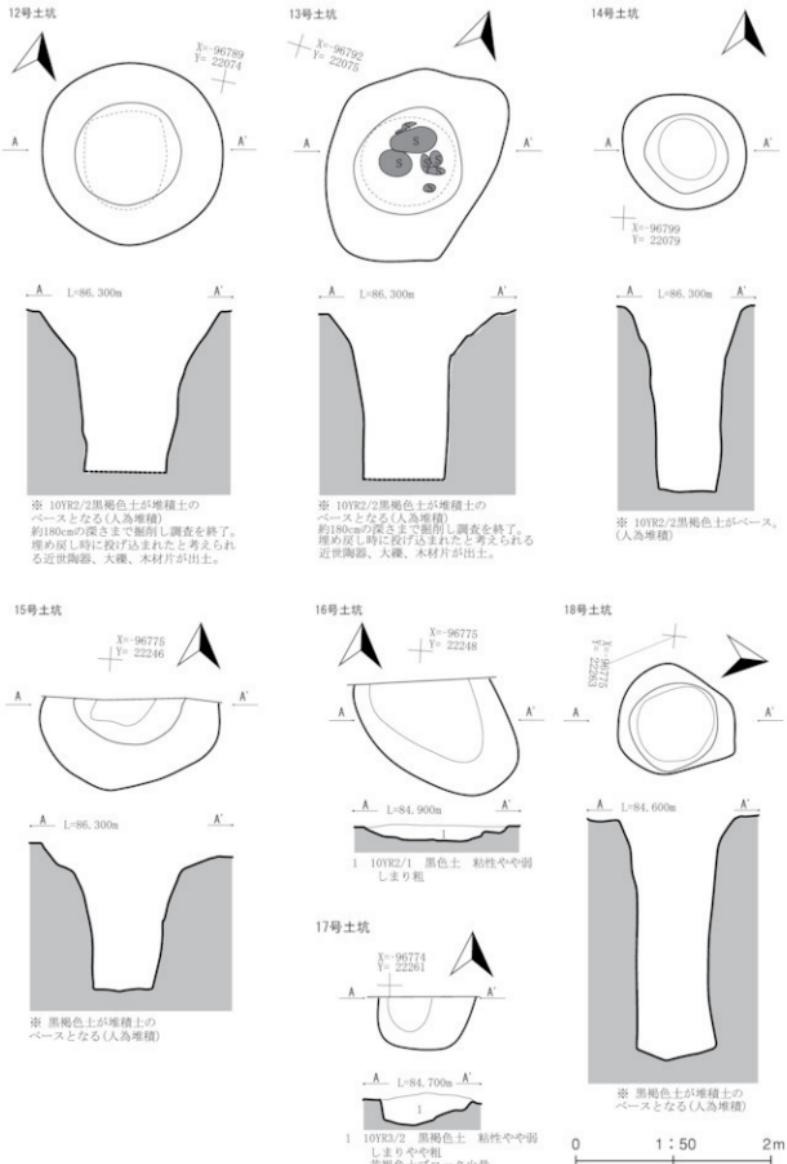
板、98・101・102は板材、100は木で、墨書きが表裏面にある。判別可能な文字は「廿四日」、「付」、「里」?の文字だけで、用途不明である。103は筋交のある建築部材であろうか。104は杭である。

【鉄製品】109は刀子である。

<時期>出土遺物から19世紀である。



第24図 7 ~ 11号土坑



第25図 12~18号土坑

(4) 溝

1号溝（第26図、写真図版11）

<位置・検出状況> B区の座標値（X=- 96559、Y=22308m）付近に位置する。現況は水田である。
III層面で暗褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 調査区内規模は（西- 東）1.73m、幅0.78mで、深さは22cmである。

<堆積土> 暗褐色土である。

<配置> P50と重なるが、切り合いは不明である。

<遺物> なし。

<時期> 時期不明である。

2号溝（第26図、写真図版11）

<位置・検出状況> C区の座標値（X=- 96723、Y=22299m）付近に位置する。現況は水田・農道である。
III層面で暗褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 調査区内規模は（北- 南）5.20m、幅2.85m、深さは44cmである。

<堆積土> 上部が暗褐色土、下部が黒褐色土である。上部の堆積土は3号溝と、下部の堆積層は4・
5号土坑堆積土と類似する。

<配置> 4・5号土坑の間に位置し、5号土坑を切る。

<遺物> 検出面上では18世紀後半～19世紀初頭の陶磁器が出土している。

<時期> 堆積土から、3号溝と同一時期の18世紀後半～19世紀前半である。

3号溝（第26図、写真図版12）

<位置・検出状況> C区の座標値（X=- 96723、Y=22295m）付近に位置する。現況は水田・農道である。
III層面で暗褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 調査区内規模は（北- 南）5.20m、幅0.44m、深さは12cmである。

<堆積土> 暗褐色土である。堆積層は2号溝第1層と類似する。

<配置> 2号溝と平行である。

<遺物> 30は18世紀末～19世紀前半の瀬戸・美濃系磁器碗である。

<時期> 出土遺物から、18世紀末～19世紀前半である。

4号溝（第26図、写真図版12）

<位置・検出状況> A区の座標値（X=- 96634、Y=22112m）付近に位置する。現況は水田である。
III層面で現代耕作土と同じ暗褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 調査区内規模は（北- 南）1.58m、幅0.22m、深さは10cmである。

<堆積土> I a層と同じ暗褐色土である。

<遺物> なし。

<時期> 堆積土から現代である。

5号溝（第26図、写真図版12）

<位置・検出状況> A区の座標値（X=- 96631、Y=22123m）付近に位置する。現況は水田である。

III層面で現代耕作土と同じ暗褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 調査区内規模は(北-南)2.34m、幅0.44m、深さは14cmである。

<堆積土> I a層と同じ暗褐色土である。

<遺物>なし。

<時期>堆積土から現代である。

6号溝(第26図、写真図版12)

<位置・検出状況> A区の座標値(X=-96631、Y=22123m)付近に位置する。現況は水田である。

III層面で水田床土と同じ褐灰色土プランを検出した。

<規模・形状> 調査区内規模は(北-南)1.63m、幅0.32m、深さは8cmである。

<堆積土> I b層と同じ褐灰色土である。

<遺物>なし。

<時期>堆積土から現代である。

7号溝(第27・28図、写真図版10・12)

<位置・検出状況> D区の座標値(X=-96730、Y=22222m)付近に位置する。現況は水田である。

III層面で水田床土と同じ黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 調査区内規模は(北-南)1.60m、幅1.10m、深さは22cmである。

<配置> 9号溝に切られる。

<堆積土> 黒褐色土である。

<遺物>なし。

<時期>堆積土と、9号溝に切られることから、中世末～近世初頭と考えられる。

8号溝(第27・28図、写真図版13)

<位置・検出状況> D区の座標値(X=-96735、Y=22213m)付近に位置する。現況は水田である。

III層面で水田床土と同じ黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 調査区内規模は(北-南)1.60m、幅1.10m、深さは16cmである。

<配置> 9号溝に切られる。

<堆積土> 黒褐色土である。

<遺物>陶磁器が出土している。31は中世末～近世初頭の美濃産陶器皿で内面に草花文を描く。

<時期>出土遺物、堆積土、9号溝に切られることから、中世末～近世初頭である。

9号溝(第27・28図、写真図版13・14)

<位置・検出状況> D区の座標値(X=-96730～-96735、Y=22205～22225m)付近に位置する。現況は水田である。III層面で水田床土と同じ黒褐色及び褐灰色プランを検出した。

<規模・形状> 調査区内規模は(西-東)24.40m、幅1.10m、深さは26cmである。東端部はほぼ直角に曲がり、7号溝を切る。2号池状遺構の両側範囲では中場が残る。

<配置・性格> 7・8号溝を切る。11号土坑に切られる。本遺構と10号溝・7号土坑(井戸状土坑)から同一個体もしくは数枚セットと考えられる唐津産陶器皿が出土している。性格は屋敷地を囲む溝の可能性がある。

<堆積土>上部に水田床土が混入した褐灰色土、その下部に黒褐色土が堆積する。7~10号溝は同時に使用されており、1・2号池状施設埋没後に9・10号溝のメンテナンスを行い、底面を整地し直した痕跡（断面図F-F'の第2・3・6層）がある。メンテナンスの際に、7・8号溝は廃絶され、9号溝と切り合い関係が生じたと考えられる。

<遺物>陶磁器、石器、鉄製品が出土している。

【陶磁器】32~35が出土している。32・34は中世末~近世初頭の唐津産陶器皿、33は型紙摺りの近代磁器碗、35は7号土坑・10号溝から同一個体もしくは数枚セットと考えられる中世末~近世前半の唐津産陶器皿である。なお、33は堆積土の最上部から出土している。

【石器】77は砥石、78は磨石である。

【鉄製品】112は平面台形の火打金である。

【ガラス製品】113はガラス玉である。

<時期>出土遺物から、中世末~近世初頭である。

10号溝（第27・28図、写真図版13~16）

<位置・検出状況>D区の座標値（X=-96730~-96735m、Y=22205~22225m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で水田床土と同じ黒褐色及び褐灰色プランを検出した。

<規模・形状>調査区内規模は（南西-北東）23.00m、幅3.20m、深さは64cmである。緩やかに蛇行する形状である。1・2号池状遺構を付属施設とする。

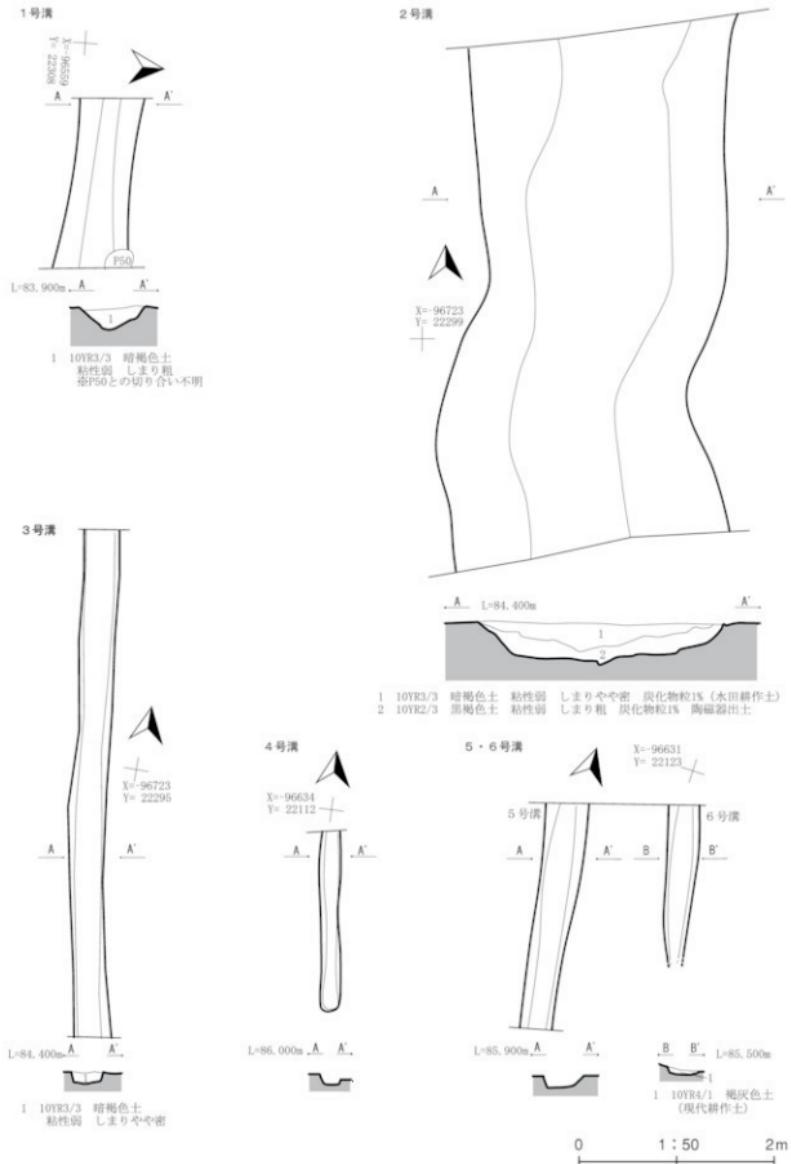
<配置・性格>9号溝と平行し、11号土坑と接する。本遺構と9号溝・7号土坑（井戸状土坑）から同一個体もしくは数枚セットと考えられる唐津産陶器皿が出土している。緩やかに蛇行し、水性堆積層であることから、性格は屋敷地北側に設置された水路と考えられる。

<堆積土>上部に水田床土が混入した褐灰色土、その下部に整地層と考えられる黄褐色土、黒褐色土、底部付近に暗褐色土が堆積する。まず、10号溝の下部、1・2号池状遺構が埋没し、その後に整地層が形成され、さらに10号溝上部と9号溝が埋没する順番である。

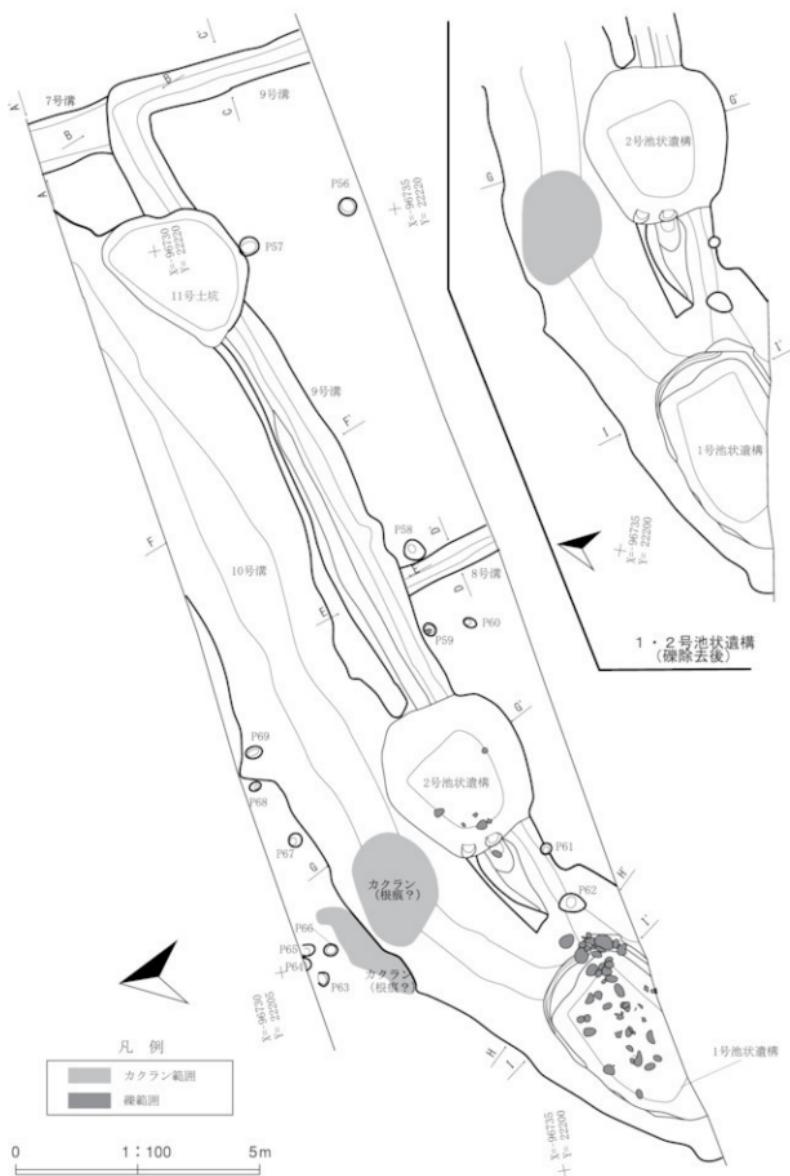
<付属施設>1・2号池状遺構は10号溝掘削時に構築されたものと考えられるため、10号溝付属施設として報告する。

【1号池状遺構】規模は（北西-南東）2.44m、（南西-北東）4.30m、検出面からの深さ105cmである。形状は平面形が隅丸長方形で、断面形は逆台形である。また、底面は平坦である。開口部縁辺に溝が廻る。縁辺部に組まれていたと考えられる石組が崩落して、底面に礫が散在している。遺物は中世末~近世初頭の陶磁器、火打石片、多量の礫のほか、昆虫の羽根、炭化種子（モモ、カポチャ仲間、ハクウンボク等）が出土している。性格は不明であるが庭園地、生糞の可能性が考えられる。調査時には、10号溝が屋敷を囲む水堀、1・2号池状遺構が門前の防御性を高める堀、1・2号池状遺構間に門と橋及び橋脚痕を想定してみたが、調査が進むにつれ、池状遺構の規模・規格が1号と2号では異なることや、橋脚配置の柱穴が無いことが判明した。そのため、戦国期の防御性の高い施設とは断定できない。池状遺構の形状からは開口部縁辺の溝に仕切り板等の何らかの区画の意図が読み取れる。また、石組が階段状施設であったか、もしくは水を堰き止める役割を果たしていたと考えられる。そして、桃・カポチャ仲間・ハクウンボクの炭化種子や昆虫化石の存在から、水流は急でなく緩やかな流れであつただろう。食糧残滓の捨て場としても利用されたであろう。

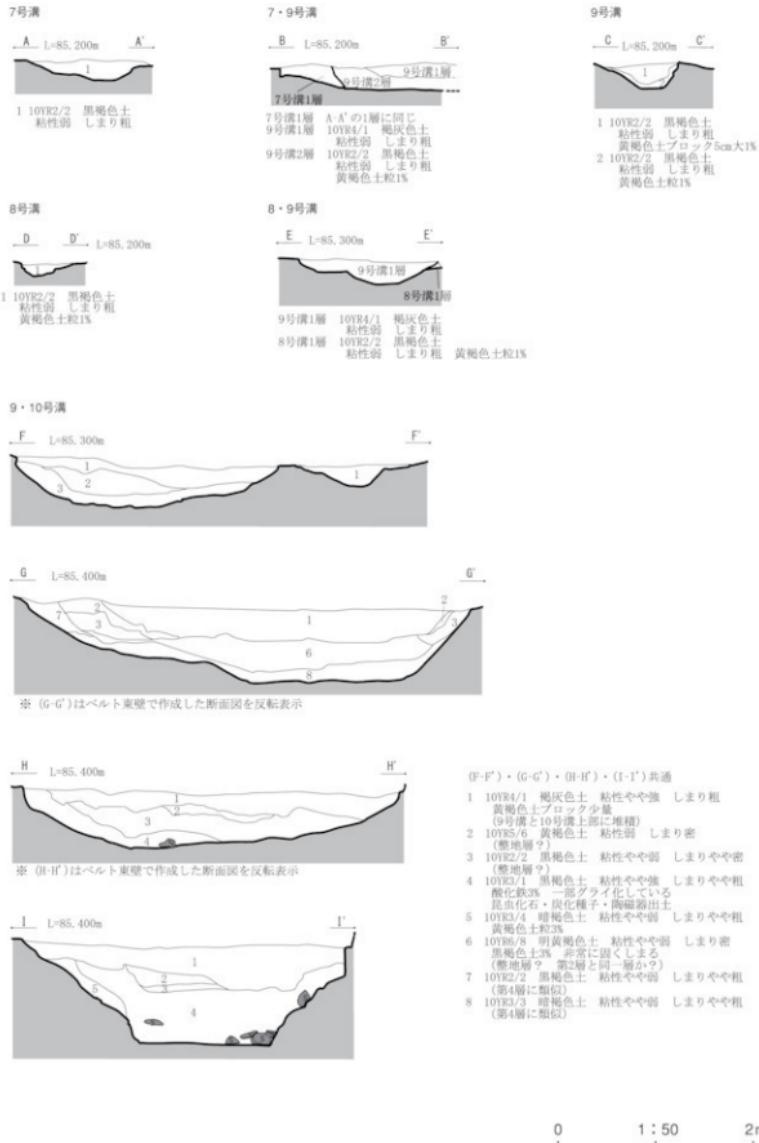
【2号池状遺構】規模は（北西-南東）3.00m、（南西-北東）3.20m、検出面からの深さ75cmである。形状は平面形が不整形で、断面形が皿形である。底面は平坦である。西側に石組跡と思われる礫が散



第26図 1～6号溝



第27図 7～10号溝、1・2号池状遺構(1)



第28図 7～10号溝、1・2号池状遺構(2)

在している。9号溝中場の平坦面から2号池状遺構に向かって、浅いピットが複数あり、階段状に配置され、2号池状遺構に降りられるようになっている。性格は不明であるが、1号池状遺構と類似の施設で、庭園池、生糞などの可能性が考えられる。

【11号土坑】形状は、本節第3項に記載した。本遺構は9号溝を切り、10号溝に接する。1・2号池状施設と異なり浅い。性格は不明だが、10号溝から取水する施設もしくは、洗い場のような施設が想定される。

<遺物>陶磁器、石器、炭化種子、昆虫化石が出土している。

【陶磁器】36~55が出土している。36は瀬戸天目茶碗、37は瀬戸大窯産陶器皿、38~41・43~46・48~50は唐津産陶器皿、42は美濃産陶器皿、47は遺構検出面出土の東北産皿、51は瀬戸・美濃産陶器椀、52は須恵器系陶器、53~55は肥前産染付で、53が鉢、54が碗、55が皿である。16世紀後半~17世紀初頭初頭のほか、17世紀代の磁器碗が堆積土から、19世紀代が遺構検出面から出土している。

【石器】76は砥石で1号池状遺構出土、83~85は写真掲載資料で、83は火打ち石片で1号池状遺構底面出土、84・85は石鎌で、堆積土出土資料である。

【その他】主に1・2号池状遺構から炭化種子と昆虫化石が出土している。種子・昆虫同定結果は第VI章を参照されたい。

11号溝（第29図、写真図版16）

<位置・検出状況> E区中央の座標値（X=- 96782、Y=22188m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で褐灰色土プランを検出した。

<規模・形状> 調査区内規模は（北-南）2.95m、幅1.32m、深さは36cmである。

<堆積土> 上部に水田床土の褐灰色土がその下部に黒褐色土、底部に黄褐色土が堆積する。

<遺物>なし。

<時期>上部堆積が水田床土であることから、近代~現代と考えられる。

12号溝（第29図、写真図版16）

<位置・検出状況> E区中央の座標値（X=- 96778、Y=22208m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 調査区内規模は（北-南）2.80m、幅0.70m、深さは40cmである。

<堆積土> 黒褐色土が堆積し、下部層は人為堆積である。

<遺物> 近世陶磁器が出土している。56は東北産陶器椀、57は肥前産皿である。19世紀以降の製作であろう。

<時期> 遺物から19世紀以降である。

13号溝（第29図、写真図版17）

<位置・検出状況> E区西端の座標値（X=- 96782、Y=22068m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 調査区内規模は（北-南）7.40m、幅0.92m、深さは8cmである。

<堆積土> 黒褐色土が堆積しているが、水田床土である褐灰色土が、若干混入している。

<遺物>なし。

<時期> 堆積土から、圃場整備以前に使用していた溝の可能性があり、現代と考えられる。

14号溝（第29図、写真図版17）

- <位置・検出状況> E区西端の座標値（X=- 96782、Y=22068m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色土プランを検出した。
- <規模・形状> 調査区内規模は（北- 南）6.30m、幅0.24m、深さは12cmである。
- <堆積土> 黒褐色土が堆積しているが、水田床土である褐灰色土が、若干混入している。
- <遺物> なし。
- <時期> 堆積土から、圃場整備以前に使用していた溝の可能性があり、現代と考えられる。

15号溝（第29図、写真図版17）

- <位置・検出状況> E区東側の座標値（X=- 96775、Y=22242m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色土プランを検出した。
- <規模・形状> 調査区内規模は（北- 南）2.90 m、幅0.72 m、深さは10cmである。
- <堆積土> 黒褐色土が堆積しているが、水田床土である褐灰色土が、若干混入している。
- <遺物> なし。
- <時期> 時期不明である。

16号溝（第29図、写真図版17）

- <位置・検出状況> E区東側の座標値（X=- 96776、Y=22250m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色土プランを検出した。
- <規模・形状> 調査区内規模は（北- 南）2.70 m、幅1.80 m、深さは15cmである。
- <堆積土> 上部に黒褐色土、下部に黄褐色土が堆積している。人為堆積である。
- <遺物> 堆積土から陶器鉢類、59は陶器壺類である。19世紀代の製作であろう。
- <時期> 出土遺物から19世紀代である。

17号溝（第29図、写真図版17）

- <位置・検出状況> E区東側の座標値（X=- 96776、Y=22254m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色土プランを検出した。
- <規模・形状> 調査区内規模は（北- 南）2.80 m、幅0.74 m、深さは13cmである。
- <堆積土> 黒褐色土が堆積している。人為堆積である。
- <遺物> なし。
- <時期> 時期不明であるが、堆積土から近代以降の可能性がある。

18号溝（第30図、写真図版25）

- <位置・検出状況> E区西端の座標値（X=- 96776～- 96774、Y=22259～22278m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色土プランを検出した。湧水が著しいために、別遺構との切り合いが不鮮明であった。
- <規模・形状> 調査区内規模は（北- 南）21.50m、幅0.96m、深さは24cmである。東側は暗渠廐水施設となっており、遺構内に礫の密集部がある。暗渠部の幅は1.22m、深さは32cmである。本遺構のうち、東側を遺構上場のみ図化し、一部堆積状況をトレンチ（第30図A-A'）で確認した。

<配置>本遺構と並行する暗渠と20号溝に切られる。19号溝と連結する。18号土坑との切り合いを堆積土上では確認できなかったが、出土遺物の年代差から18号土坑が本遺構より古いと考えられる。

<堆積土>黒褐色土が堆積している。人為堆積である。現代陶磁器やガラス片が上部層から出土している。

<遺物>近世末～現代の陶磁器、木製品が検出面から出土している。また、暗渠部では現代陶磁器とガラス片が出土した。

【陶磁器】暗渠部から出土している。65・66・68～71は19世紀の陶磁器で65・69・71は東北産、66・68は大堀相馬産、70は肥前産である。

【木製品】97は暗渠部検出面から出土した漆器茶筒である。内外面黒漆塗である。

<時期>遺物と配置から、近世末～現代である。

19号溝（第30図、写真図版25）

<位置・検出状況>E区西端の座標値（X=- 96776、Y=22264m）付近に位置する。現況は水田である。Ⅲ層面で黒褐色土プランを検出した。湧水が著しいために、別遺構との切り合いが不鮮明であった。

<規模・形状>調査区内規模は（北-南）2.00m、幅0.64m、深さは10cmである。北側が18号溝と連結する。

<堆積土>黒褐色土が堆積している。人為堆積である。

<遺物>なし。

<時期>18号溝と連結することから、近世末～現代である。

20号溝（第30図、写真図版25）

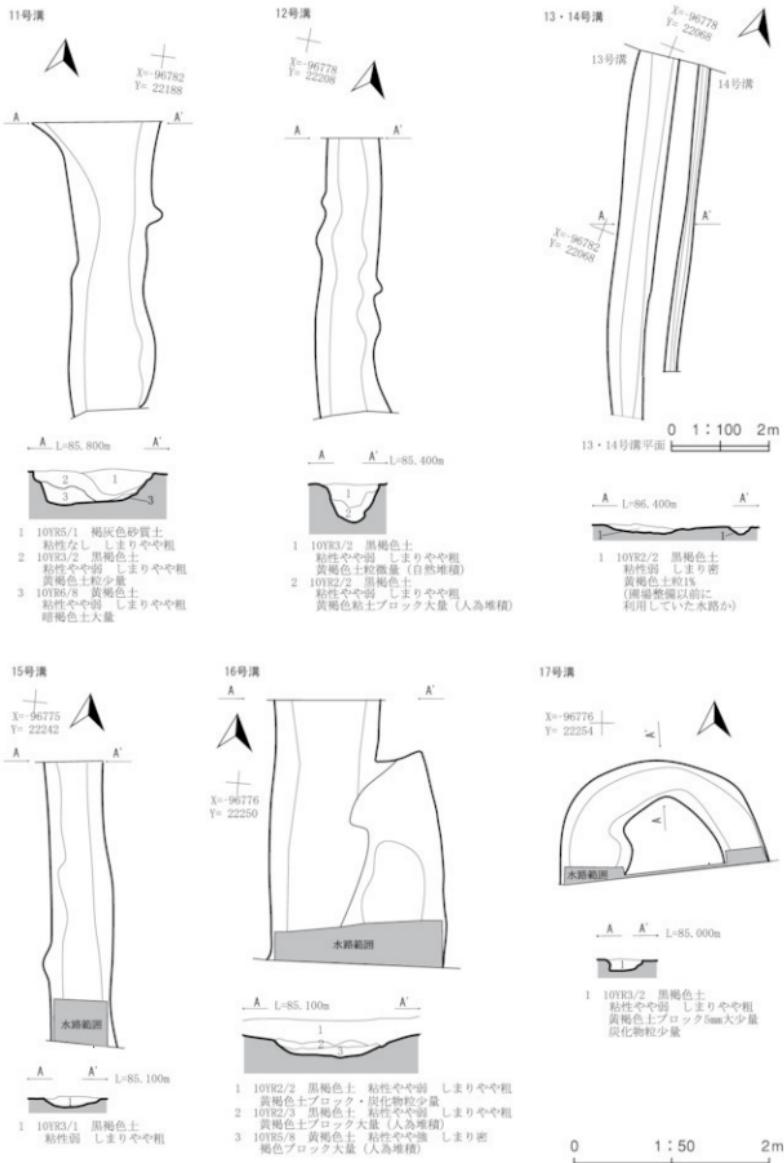
<位置・検出状況>E区西端の座標値（X=- 96776、Y=22265m）付近に位置する。現況は水田である。Ⅲ層面で黒褐色土プランを検出した。湧水が著しいために、別遺構との切り合いが不鮮明であった。

<規模・形状>調査区内規模は（北-南）2.80m、幅0.72m、深さは44cmである。北側が18号溝を切る。

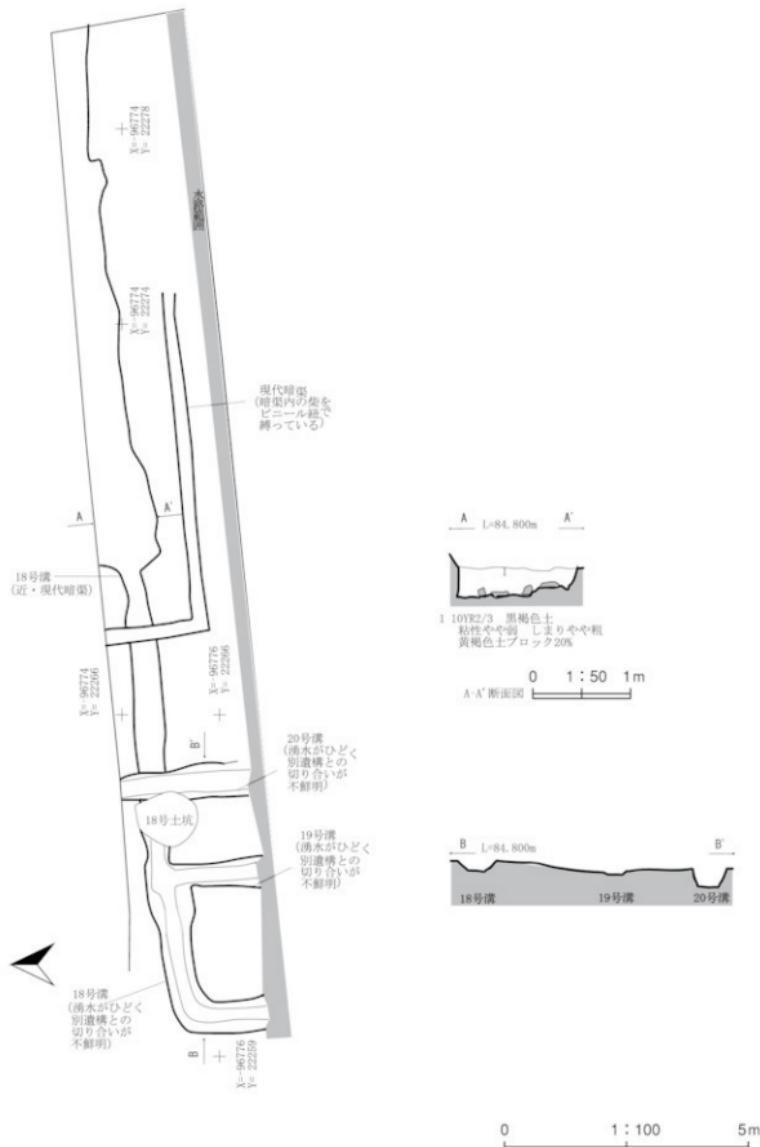
<堆積土>黒褐色土が堆積している。人為堆積である。

<遺物>なし。

<時期>18号溝を切ることから、近世末～現代である。



第29図 11～17号溝



第30図 18~20号溝

第2表 柱穴観察表(1)

()内は検出部分のみの数値を示す

No.	地区	長×幅(cm)	深(cm)	底面標高(m)	構成要素	出土遺物	備考
P1	B	(28 × 14)	26	83.36			
P2	B	(32 × 12)	28	83.36			
P3	B	44 × 38	26	83.40			
P4	B	(40 × 32)	28	83.38			
P5	B	24 × 22	36	83.40			
P6	B	34 × 30	28	83.48			
P7	B	34 × 28	32	83.44			
P8	B	26 × 35	22	83.54			
P9	B	28 × 22	12	83.64			
P10	B	(38 × 34)	40	83.34			
P11	B	44 × 34	46	83.26			
P12	B	32 × 30	28	83.48			
P13	B	(46 × 38)	40	83.36			
P14	B	24 × 22	20	83.56			
P15	B	36 × 24	36	83.40			
P16	B	(18 × 14)	24	83.52			
P17	B	48 × 38	38	83.34			
P18	B	(50 × 32)	42	82.82			
P19	B	(34 × 36)	76	83.02			
P20	B	42 × 38	60	83.12			
P21	B	34 × 24	-	-			
P22	B	44 × 32	24	83.46			
P23	B	20 × 18	14	83.58			
P24	B	40 × 32	32	83.34			
P25	B	(26 × 24)	22	83.44			
P26	B	30 × 24	46	83.18			
P27	B	(34 × 38)	46	83.22			
P28	B	(34 × 22)	36	83.34			
P29	B	26 × 24	26	83.58			
P30	B	(26 × 24)	16	83.48			
P31	B	(26 × 16)	80	83.56			
P32	B	34 × 30	24	83.42			
P33	B	30 × 26	24	83.40			
P34	B	22 × 20	16	83.48			
P35	B	36 × 38	12	83.54			
P36	B	42 × 38	14	83.52			
P37	B	30 × 24	22	83.42			
P38	B	40 × 20	36	83.36			
P39	B	(78 × 32)	38	83.36			
P40	B	(28 × 22)	14	83.58			
P41	B	30 × 20	38	83.58			
P42	B	(30 × 15)	32	83.44			
P43	B	40 × 38	56	83.16			
P44	B	22 × 15	20	83.56			
P45	B	34 × 32	36	83.36			
P46	B	(48 × 22)	52	83.30			
P47	B	(30 × 26)	-	-		106	
P48	B	38 × 32	14	83.56			
P49	B	26 × 25	20	83.44			
P50	B	(26 × 24)	28	83.40			
P51	B	32 × 21	36	83.40			
P52	B	24 × 15	60	83.18			
P53	B	22 × 16	56	83.14			
P54	B	(26 × 13)	34	83.48			
P55	B	24 × 16	34	83.42			
P56	D	36 × 35	16	84.90			
P57	D	40 × 38	20	84.92			
P58	D	46 × 38	12	84.98			

第2表 柱穴観察表(2)

No.	地区	長×幅(cm)	深(cm)	底面標高(m)	構成要素	出土遺物	備考
P59	D	30 × 24	22	84.86			
P60	D	26 × 18	24	84.90			
P61	D	22 × 30	28	84.80			
P62	D	52 × 38	22	84.68			
P63	D	26 × 20	10	85.08			
P64	D	(26 × 14)	32	84.86			
P65	D	(26 × 24)	32	84.82			
P66	D	26 × 24	12	85.04			
P67	D	28 × 28	42	84.80			
P68	D	22 × 18	18	84.98			
P69	D	34 × 24	18	84.78			
P70	E	40 × 36	54	85.62	1号倒立柱建物	3	
P71	E	39 × 34	62	85.52	1号倒立柱建物	4	
P72	E	36 × 36	50	85.62	1号倒立柱建物	2	
P73	E	27 × 25	12	85.58			1号倒立?
P74	E	30 × 22	16	86.02			
P75	E	40 × 32	46	85.76	2号倒立柱建物		
P76	E	34 × 26	58	85.58	2号倒立柱建物		
P77	E	35 × 35	60	85.50	2号倒立柱建物		
P78	E	34 × 38	50	85.58	2号倒立柱建物		
P79	E	60 × 48	64	85.46	5号倒立柱建物		
P80	E	32 × 36	28	85.92	1号倒立柱建物		
P81	E	(30 × 22)	24	85.98			
P82	E	52 × 38	52	85.70	2号倒立柱建物		
P83	E	66 × 43	54	85.62	2号倒立柱建物		
P84	E	74 × 54	66	85.46	2号倒立柱建物		
P85	E	42 × 36	36	85.74	2号倒立柱建物		
P86	E	68 × 40	64	85.46	2号倒立柱建物		
P87	E	(44 × 38)	40	85.70	4号倒立柱建物		
P88	E	40 × 30	34	85.86	1号倒立柱建物	5	
P89	E	42 × 35	40	85.74	2号倒立柱建物		
P90	E	28 × 12	24	85.80			
P91	E	90 × 62	52	85.56	4号倒立柱建物		
P92	E	(52 × 34)	49	85.60	5号倒立柱建物		
P93	E	50 × 42	34	85.96			6
P94	E	45 × 45	46	85.64	2号倒立柱建物		
P95	E	28 × 34	48	85.62	2号倒立柱建物		
P96	E	42 × 39	32	85.92	1号倒立柱建物		
P97	E	50 × 46	48	85.70	1号倒立柱建物		
P98	E	40 × 38	44	85.72	1号倒立柱建物		
P99	E	(32 × 18)	20	85.94	2号倒立柱建物		
P100	E	52 × 42	56	85.56	1号倒立柱建物		
P101	E	44 × 42	48	85.64	1号倒立柱建物		
P102	E	64 × 59	46	85.60			
P103	E	57 × 46	44	85.60	4号倒立柱建物		
P104	E	52 × 40	40	85.66	5号倒立柱建物		
P105	E	19 × 16	10	86.08	1号倒立柱建物		
P106	E	35 × 30	18	85.98	1号倒立柱建物		
P107	E	19 × 17	20	85.92	1号倒立柱建物		
P108	E	32 × 25	38	85.74			
P109	E	13 × 12	12	85.98	1号倒立柱建物		
P110	E	32 × 28	48	85.62	1号倒立柱建物		
P111	E	65 × 36	70	85.36			
P112	E	65 × 46	38	85.80	2号倒立柱建物		
P113	E	40 × 30	72	85.40			
P114	E	50 × 44	50	85.66	2号倒立柱建物		
P115	E	48 × 35	78	85.32			炭化種子
P116	E	54 × 40	50	85.62	2号倒立柱建物		

第2表 柱穴観察表(3)

No.	地区	長×幅(cm)	深(cm)	底面標高(m)	()内は検出部分のみの数値を示す	
					構成要素	出土遺物
P117	E	43 × 34	104	85.08		
P118	E	54 × 42	48	85.62	2号掘立柱建物	
P119	E	50 × 33	54	85.56	2号掘立柱建物	
P120	E	52 × 48	24	85.66		
P121	E	46 × 44	72	85.44	2号掘立柱建物	
P122	E	44 × 36	58	85.58	2号掘立柱建物	
P123	E	40 × 38	52	85.64	2号掘立柱建物	
P124	E	40 × 34	60	85.50	2号掘立柱建物	
P125	E	41 × 47	38	85.72		
P126-a	E	64 × 58	62	85.48	4号掘立柱建物	
P126-b	E	42 × 36	60	85.48	5号掘立柱建物	
P126-c	E	45 × 28	18	85.92		
P127	E	32 × 30	38	85.84	2号掘立柱建物	
P128	E	46 × 42	62	85.60	3号掘立柱建物	
P129	E	36 × 32	78	85.42	3号掘立柱建物	
P130	E	32 × 27	65	85.52		
P131	E	38 × 32	24	85.86	3号掘立柱建物	
P132	E	36 × 32	18	85.88	3号掘立柱建物	
P133	E	44 × 36	88	85.20	4号掘立柱建物	
P134	E	37 × 34	68	85.60		
P135	E	38 × 32	24	85.92		
P136	E	46 × 40	22	86.00		
P137	E	36 × 28	14	86.10		
P138	E	36 × 30	42	85.86	3号掘立柱建物	
P139	E	40 × 33	32	85.88	3号掘立柱建物	
P140	E	40 × 32	30	85.86	3号掘立柱建物	
P141	E	35 × 30	34	85.82	3号掘立柱建物	
P142	E	(44 × 28)	22	85.94		
P143	E	52 × 38	22	85.94		
P144	E	48 × 40	80	85.32	4号掘立柱建物	187
P145	E	48 × 44	82	85.32	4号掘立柱建物	
P146	E	40 × 38	76	85.30		
P147	E	34 × 25	30	85.76		
P148	E	28 × 27	28	85.78		
P149	E	28 × 22	22	85.84		
P150	E	50 × 34	44	85.62	5号掘立柱建物	
P151	E	48 × 30	36	85.68	5号掘立柱建物	
P152	E	40 × 33	62	85.46	5号掘立柱建物	
P153	E	20 × 18	10	86.04	1号掘立柱建物	
P154	E	(36 × 28)	46	85.68	1号掘立柱建物	
P155	E	28 × 24	22	85.94		
P156	E	(35 × 28)	48	85.70	2号掘立柱建物	
P157	E	42 × 38	22	85.84	4号掘立柱建物	
P158	E	26 × 19	64	84.82		
P159	E	32 × 28	34	84.42		
P160	E	48 × 25	20	84.36		
P161	E	欠番	-	-		
P162	E	46 × 28	72	85.50	2号掘立柱建物	
P163	E	32 × 26	12	86.06		
P164	E	22 × 16	32	85.86		
P165	E	22 × 19	16	86.02	1号掘立柱建物	1
P166	E	25 × 18	18	85.96	1号掘立柱建物	
P167	E	30 × 24	20	85.96	1号掘立柱建物	
P168	E	23 × 20	12	85.98	1号掘立柱建物	
P169	E	28 × 23	22	85.86		
P170	E	37 × 36	54	85.62	1号掘立柱建物	

5 出土遺物

(1) 陶磁器 (第31~33図、写真図版26~29)

中世末~近世初頭 (16世紀末~17世紀初頭)

中国大陸産磁器： 1は皿で、1号掘立柱建物跡を構成するP165から出土した。

唐津産陶器： D区の7号土坑、8~10号溝や検出面から、絵唐津折縁皿 (10~12、35、38~40、64) が出土している。これらは草花文を描き、胎土目がみられる。数枚セットで、遺跡内搬入→使用→廃棄に至ったものと考えられる。ほかに、数枚セットとみられる資料は43~45があり、10号溝から出土している。透明釉の椀・皿類 (2、3、23、62) があり、志野風の色調である。

瀬戸大窯産陶器： D区の10号溝出土の37は緑釉の小皿で、外底面に輪ドチがみられる。同じく10号溝から出土した36は天目茶碗で鉄釉が剥落している。4は1号掘立柱建物を構成するP71から出土した天目茶碗である。31・42は長石釉の志野皿である。7は皿破断面に漆継ぎ痕跡がある。漆継ぎ技術は、近世以降の資料によく見られるとされている。中世に製作され、近世期に破損後し廃棄されたと推定される。

近世前半 (17世紀~18世紀後半)

唐津産陶器： 13は13号土坑出土の皿である。

肥前産磁器： P88 (1号掘立柱建物跡) から5が、P93から6の碗が出土している。14はE区力ケラン内から出土した皿である。15は16号土坑出土の碗、53・55は10号溝出土の染付碗である。

近世後半 (18世紀末~19世紀前半)

瀬戸・美濃系磁器： 30は3号溝出土の碗である。

大堀相馬産陶器： 9はE区西端部出土の椀、18・19は15号土坑出土の小椀、21は15号土坑出土の仏飯器である。E区東側の暗渠検出面から66の仏飯器、68の椀が出土している。

東北産陶器： 在地系と考えられる資料を一括して東北産とした。56は12号溝出土の椀、65・67は暗渠検出面から出土した。

近世末~近・現代 (19世紀後半以降)

肥前産磁器： 33は型紙摺りの染付碗で、9号溝堆積土上部から出土した。

(2) 石器 (第34~36図、写真図版30・31)

72~77は砥石、78は磨石、79・80は金床石、81・82は石核、83~85は写真掲載資料で、83は火打石片、84・85は石鎧である。81・82の石核は火打石素材である。砥石は井戸状遺構や溝から出土している。

(3) 土製品 (第36~38図、写真図版31・32)

土人形： 86~90である。近世前半の15・16号土坑から出土した。86は僧侶の顔部である。87・88と、89・90はそれぞれ同一個体と考えられる。

灯籠

<器種>いわゆる草屋型灯籠である。蓮屋型、葛谷屋型とも呼ばれる。粗末な家を模したもので、石製が一般的である。本遺跡出土資料は、笠部 (92) が、入母屋造の屋根形で、火袋部 (93) が直方体を呈する。本資料が出土した15号土坑からは、中台や基壇等の灯籠の別部位は出土していない。

<器種名根拠>本資料は、祠と香炉の可能性も想定してみたが、祠とは用途が異なり、香炉とは使用痕跡が異なる。火袋内面上部と笠部内面（屋根天井部）に多量のススと若干のタール状付着物があり、その分布は火所近くの高温部にスス・タール状付着物がなく、比較的低温になる火所からやや離れた場所に残存する。このことから、香炉から出す煙によるスス・タール状付着物の分布ではなく、油脂分を含んだ燃料の点火後に、炎によって生じた分布と考えられる。

<特徴>笠部は入母屋造の屋根形である。天井に煙出部があり、屋根には櫛歯状文が上方から下方に向かって描かれる。火袋部は正面に長方形の戸口と凸レンズ形容、右側面は三日月形の窓、左側面は唐草文の一部を模したハート形の窓が配置される。戸と窓のある面には、屋根の藁葺き・茅葺き表現と同じく、櫛歯状文が縦方向に施されている。正面の左右端部には柱が表現されており、刺突痕、指成形痕、指紋が残る。火袋は型枠に土を流し込み、直方体を作つて、さらに柱表現のために粘土紐を貼付けている。

<文様関連>灯籠に描かれる文様としては、三日月文も唐草文を模したハート形文様も珍しくはない。ハート形については、京都市善導寺にある茶道具（茶碗、火箸、茶釜、柄杓、茶碗、火鉢、炭斗、五徳）を火袋に描く善導寺型灯籠の中台に描かれていることで有名である。三日月形は灯籠の種類にかかわらず良く描かれる。なお、火鉢から炭をとる際に柄杓で「月を切る」茶椀に湯を入れたあとに茶釜に柄杓を置く切り柄杓のことを「半月切」というらしく、茶道には月に間わる表現がいくつかあるようである。この2つの文様と茶人に好まれる粗末な草屋の表現から、本資料は茶道との関連性が若干あるのではないかと想定される。草屋型は、寺社参道・門前・堂前等に設置されるものではなく、池を伴う庭園内や数寄屋の庭などに置かれる傾向がある。このことから、本資料が出土した15号土坑は、庭園をもつ屋敷地内にあった可能性が考えられる。

(4) 木 製 品 (第39・40図、写真図版33・34)

鍋蓋：94は近世初頭の陶磁器が出土している井戸状遺構の13号土坑から出土した。ナラ材を使用している。

漆器：近世後半の遺物が出土した18号土坑から95の椀蓋、96の椀、暗渠から茶筒が出土している。すべて漆塗製品で使用材はケヤキである。

木札：100は18号土坑から出土した。破損品のため、形状や墨書き内容は不明である。わずかに「廿四日」「付」？が読める。上部に記号のような墨書きがあることから、祈祷札や呪札の可能性もある。

板材・板状製品：98は曲物底板であろう。99はヒバ材、101・102はスギ材である。103は筋交の破損品である。いずれも18号土坑から出土した。

杭・柱材：104は18号土坑出土の杭、105・106・108は13号土坑出土の柱材、107はP144の柱材ですべてクリ材である。

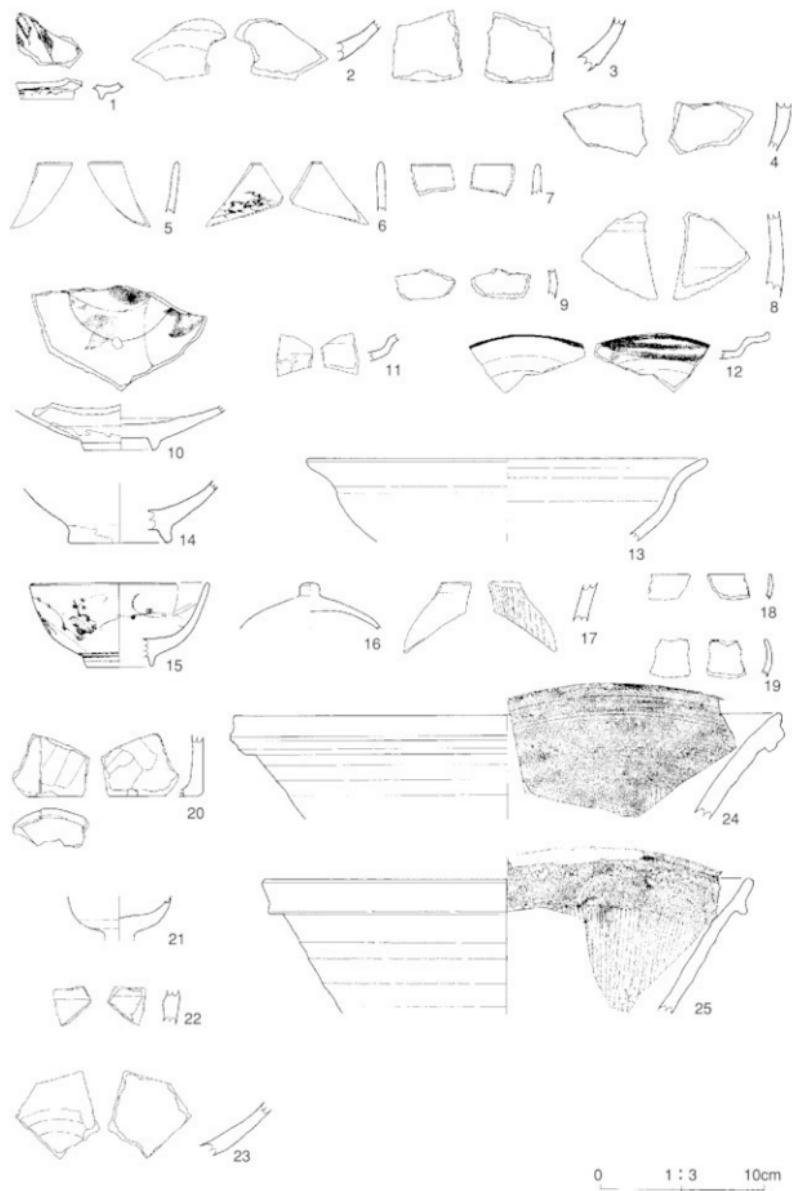
(5) 鉄 製 品 (第40図、写真図版34)

刀子：109はP47出土、110は18号土坑出土である。

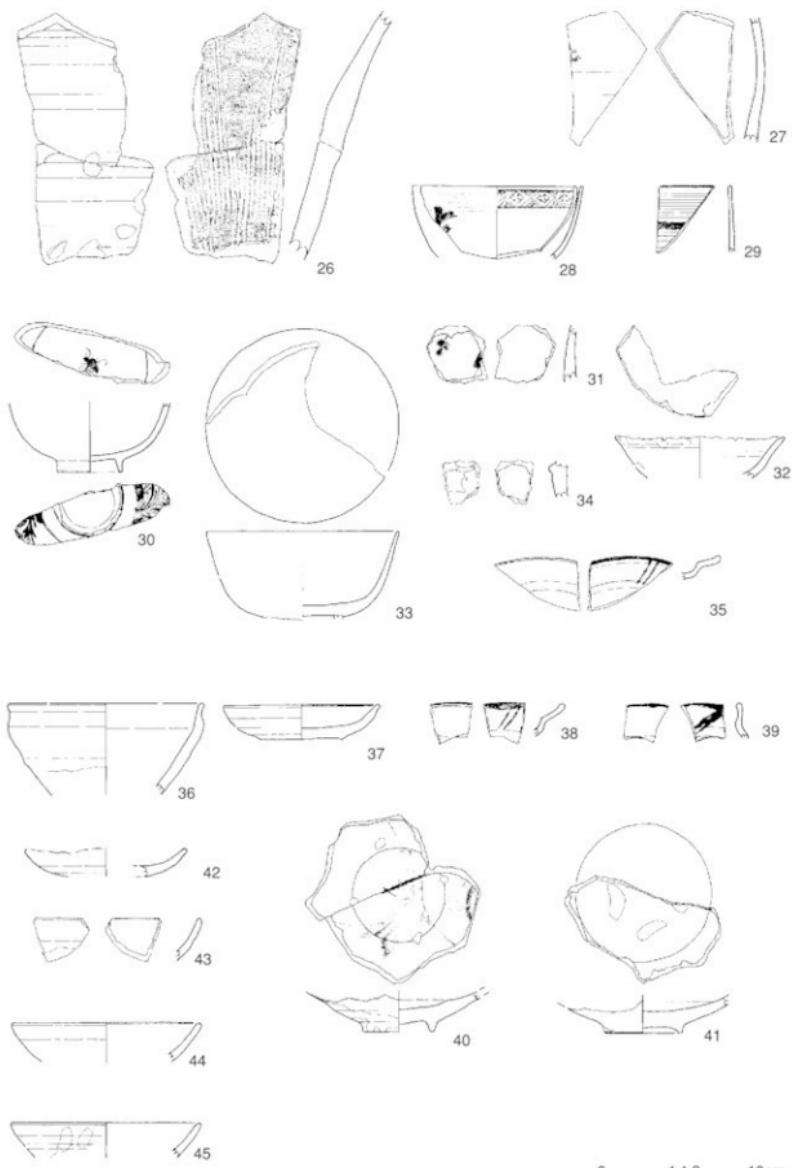
火打金：112は平面形が台形で、9号溝から出土した。

(6) ガ ラ ス 製 品 (第40図、写真図版34)

玉：113は9号溝出土でいびつに歪んだ球体である。深緑色で気泡が多い。114はC区検出面出土で113と同じくいびつに歪んでいる。紫色で気泡が見られる。

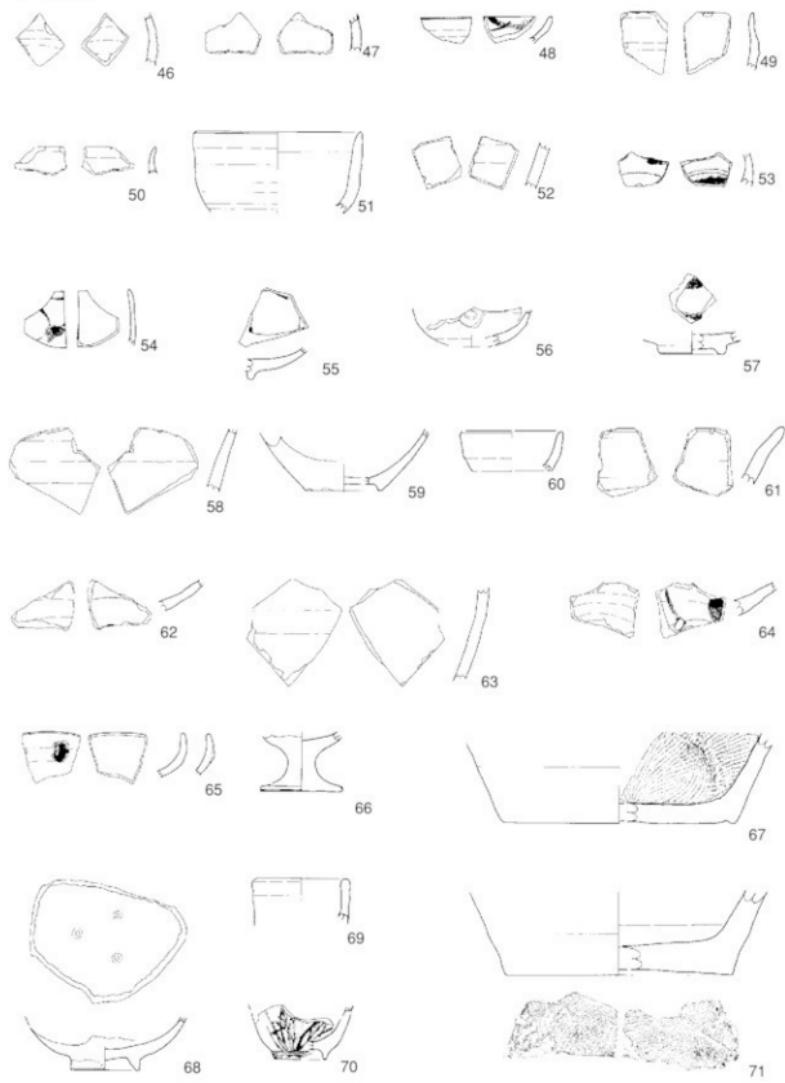


第31図 出土遺物(1)



第32図 出土遺物(2)

5 出土遺物

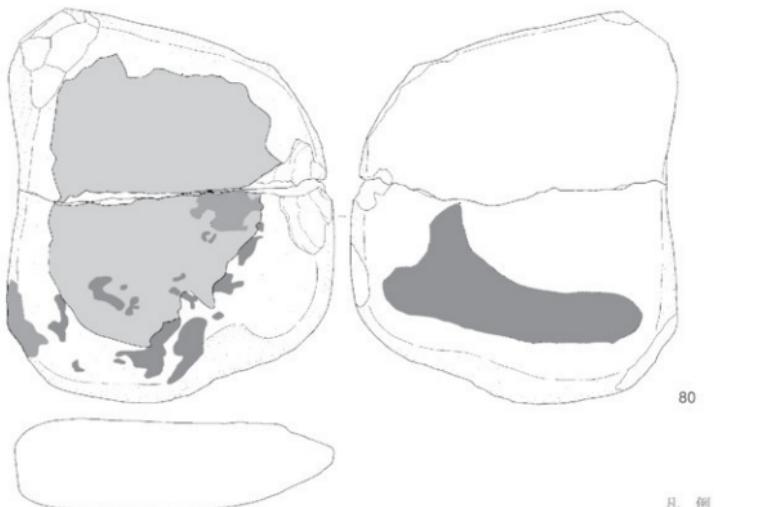
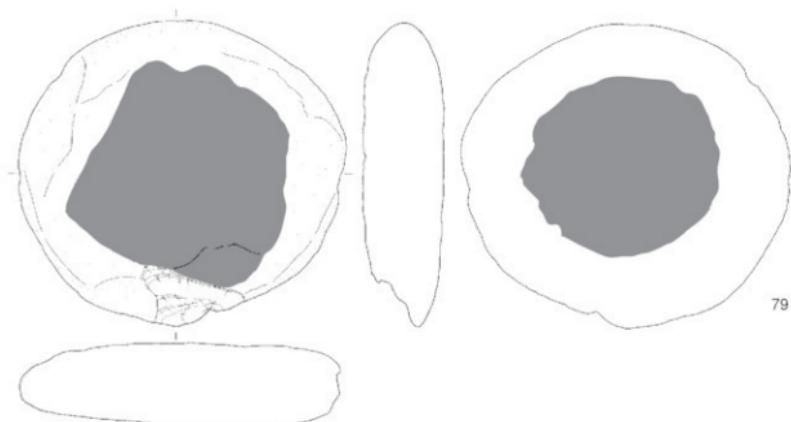


0 1 : 3 10cm

第33図 出土遺物(3)



第34図 出土遺物(4)

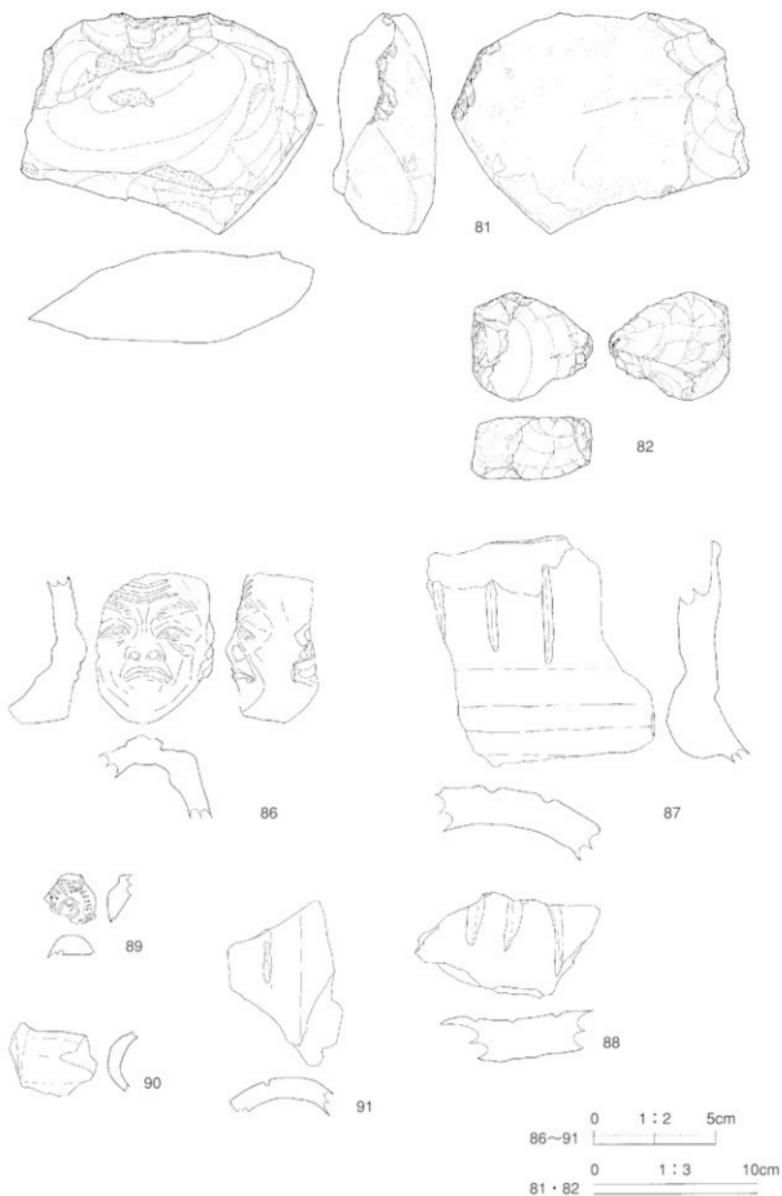


凡例

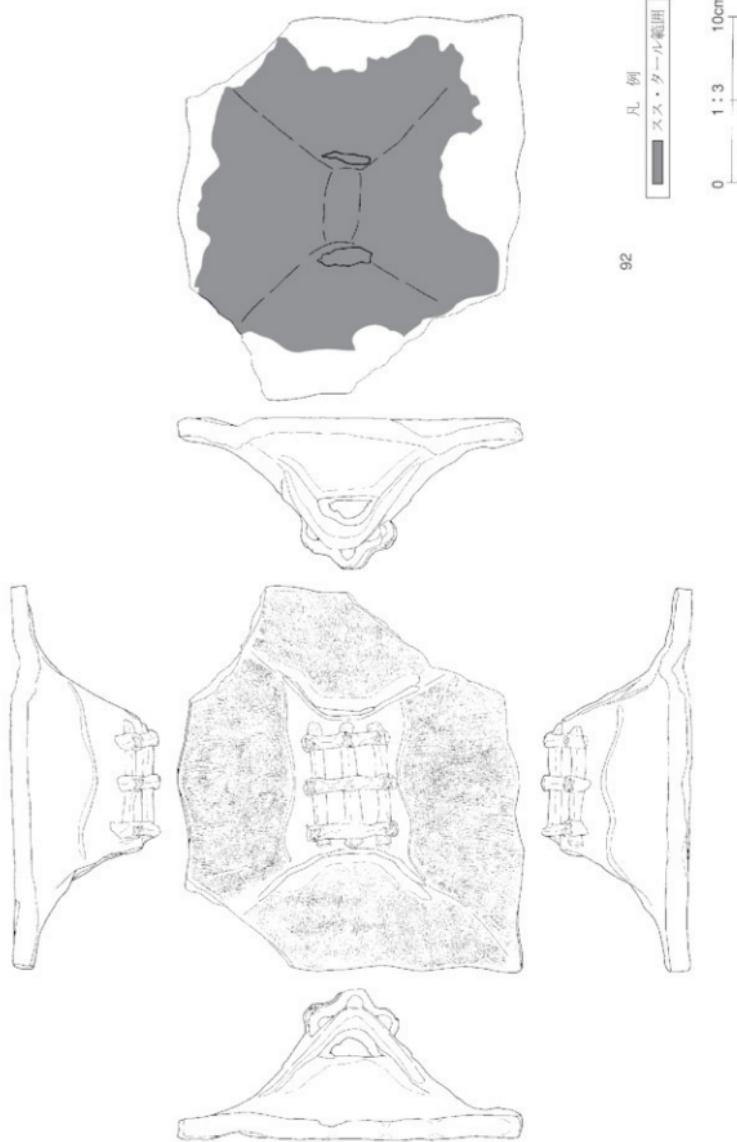
[スス]	スス
[磨面]	磨面
[黒色付着物]	黒色付着物

0 1 : 3 10cm

第35図 出土遺物(5)



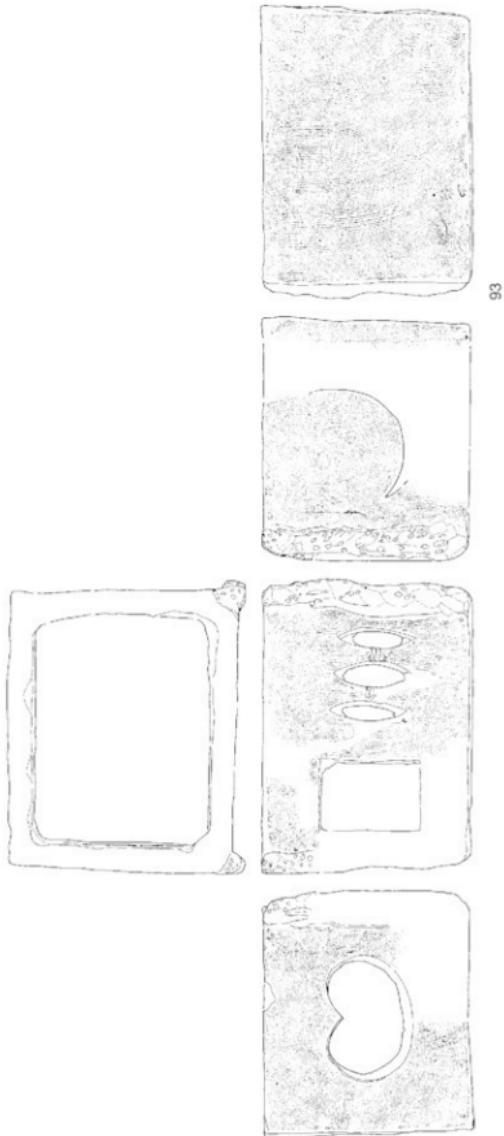
第36図 出土遺物(6)

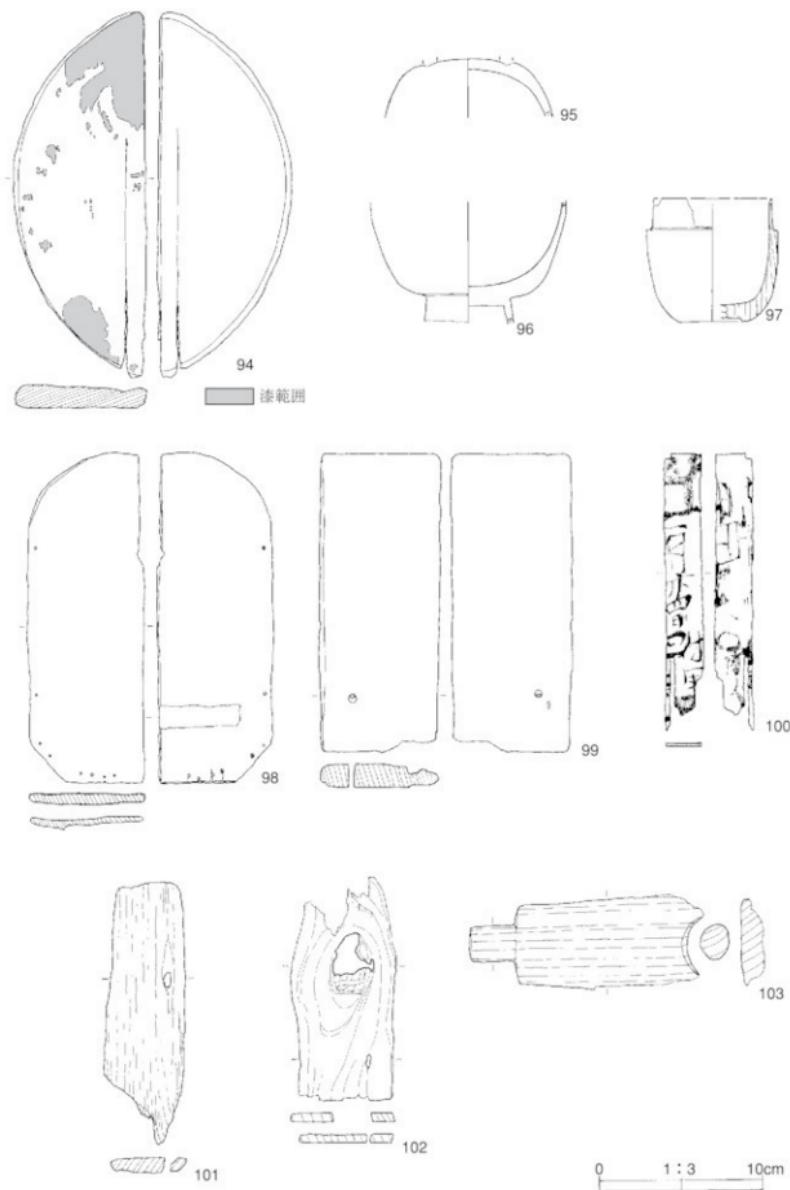


第37図 出土遺物(7)

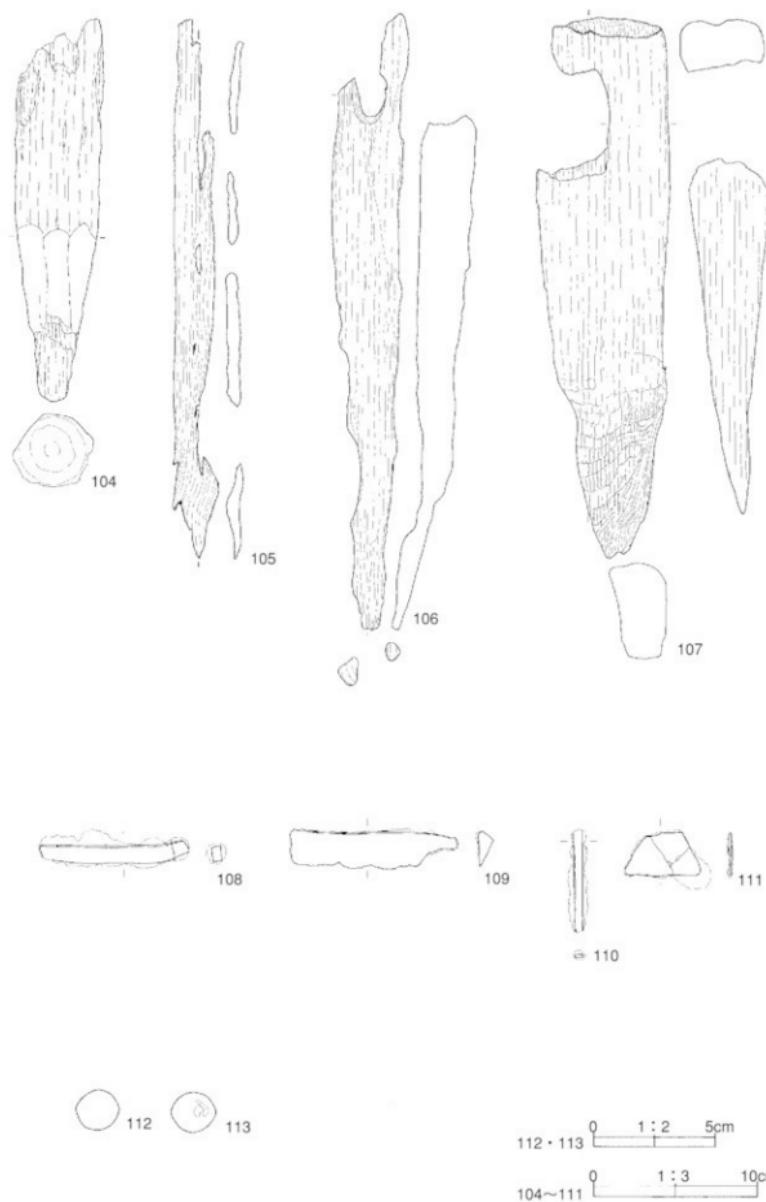
0 1 : 3 10cm

第38図 出土遺物(8)





第39図 出土遺物(9)



第40図 出土遺物(10)

第3表 圖出器體原表(1)

編號	地名	出土地點・層位	橫切・縱剖		腐殖土・枯枝	特徵	形狀	時期	法量(cm)		重量(g)	高さ	備考	
			橫切	縱剖					口徑	底徑				
1	E	P7651・海綿土	磁器皿	盤	~10%	灰白・褐色	瓷片	中國 大陸	16.4cm~17.6cm	~	~	6.92	砂質壤土	
2	E	P7231・海綿土	陶器皿	盤	~10%	灰白・黃褐色	瓷片	日本	16.4cm~17.6cm	~	~	13.02	肥前1期、2・20世紀・樹林	
3	E	P7019・海綿土	陶器皿	杯	~10%	灰白・黃褐色・細紋	透明白	日本	16.4cm~17.6cm	~	~	8.88	肥前1期	
4	E	P7119・海綿土	陶器皿	杯	~10%	灰白・黃褐色・細紋	透明白	日本・美國	16.4cm~17.6cm	~	~	6.37		
5	E	P58819・海綿土	磁器皿	口沿・杯底	~10%	灰白・褐色	瓷片	肥前	15.9	~	~	13.34	口沿部堅硬	
6	E	P53	磁器皿	口沿・杯底	~10%	灰白・褐色	瓷片	肥前	15.9	~	~	7.89		
7	E	赤堀原社・群 柏原山	陶器皿	口盤	~10%	灰白・黃褐色・細紋	透明白	美國	17.6cm半	~	~	3.43	志野燒、薄鹽瓦	
8	E	赤堀原社・群 柏原山	陶器皿	杯	~10%	灰白・黃褐色・細紋	透明白	東北	16cm以降	~	~	21.40		
9	E	赤堀原社・群 柏原山	陶器皿	杯	~10%	灰褐色	透明白	大同	15cm半	~	~			
10	D	7号土下部	陶器皿・碗	口沿・底面	20%	灰白・黃褐色	透明白・軟 粘質瓦灰	日本	16.6cm~17.6cm半	~	4.2	(2.6)	肥前1~2期、始土日	
11	D	7号土下部	陶器皿・碗	口沿・杯底	~10%	灰灰・褐色	透明白	日本	16.4cm~17.6cm半	~	~			
12	D	11号土下部	陶器皿・碗	口沿	10%	灰灰・褐色	透明白	日本	16.4cm~17.6cm半	~	~			
13	E	海綿土下部	陶器皿	口沿・杯底	10%	灰灰・褐色	透明白	日本	17.6cm半	~	~			
14	E	赤堀原社・群 柏原山	陶器皿	盤	~10%	灰白・褐色	瓷片	肥前	15.9	~	~	20.30	肥前1期	
15	E	15号土・海綿土	磁器皿	口沿・底面	40%	灰白・褐色	瓷片 五代文	肥前	1690~1780年左右	11.0	4.0	5.1	肥前1期、沙田積	
16	E	海綿土下部	陶器皿	杯	~10%	灰白・褐色	透明白	肥前	18~19c.	~	~	(2.3)	輪葉輪1.2m	
17	E	15号土・海綿土	陶器皿	杯	~10%	灰・褐色	燒目	東北	15c.	15.0	(8.0)	5.0		
18	E	15号土・海綿土	陶器皿	口盤	~10%	灰白・褐色	透明白	大同 粗目	15cm半	~	~			
19	E	15号土・海綿土	陶器皿	口沿・杯底	~10%	灰白・褐色	透明白	大同 粗目	15cm半	~	~			
20	E	15号土・海綿土	陶器皿・碗	盤	~10%	灰褐色	透明白	東北	18c.	~	~		底部發乳	
21	E	15号土・海綿土	陶器皿	碗	10%	灰白・褐色	燒目	東北 粗目	15cm半	~	~	4.0	(2.5)	41.4
22	E	13号土下部	陶器皿・碗	陶器皿	~10%	灰白・黃褐色	透明白	日本・美國	16.4cm~17.6cm	~	~			
23	E	13号土下部	陶器皿	杯	~10%	灰白・黃褐色・細紋	透明白	日本	16.4cm~17.6cm	~	~			
24	E	15号土・海綿土	陶器皿	口沿・杯底	~10%	灰白・褐色	燒目	東北	18c.	33.6	~	(6.2)	26七開・樹林	
25	E	15号土・海綿土	陶器皿	口沿・杯底	~10%	灰白・褐色	透明白	東北	18c.	30	~	(6.1)		

第3表 遺出器類原表(2)

編 號	地 名	出土點・層位	種別・器形	剖面位置	風化率	胎土・粒度	特徵	時期	底盤		高 度 (cm)	高 度 (cm)
									口徑	底盤		
26	E	18号土・堆積土	陶器底盤	底盤	~10%	高燒一燒灰・粗粒	燒結	東北	18e	~	~	34±10・側斜
27	E	18号土・堆積土	陶器底盤	底盤	~10%	高燒一燒灰・粗粒	燒結	東北	18e	~	~	34±10・側斜
28	E	18号土・堆積土	陶器底盤	口緣～底盤	~10%	灰白・微細	透明白	東北	17d-17b01	10.4	~	44.0
29	E	18号土・樹山田	陶器底盤	口緣～底盤	~10%	灰白・微細	透明白	19c514	7.0	~	44.0	肥前方言
30	C	3号窯・堆積土	磁器碗	底盤・底面	10%	灰白・粗粒	瓷片 青白 長石粒、 鐵結	1790-1860年代	~	4.0	44.2	肥前方言
31	D	8号窯・堆積土	陶器皿	底盤	~10%	灰白・黃燒	透明白	16c-17c切削面	~	~	~	志野瓦
32	D	9号窯・堆積土	陶器底盤	口緣～底盤	~10%	灰白・燒灰・粗粒	透明白	16c-17c切削面	10.4	~	34.5	肥前方言
33	D	9号窯・堆積土	陶器皿	口緣～底盤	50%	灰白・微細	瓷片	15c液半	11.8	4.8	53.3	128.64 青紙割合
34	D	9号窯中央	陶器皿	底盤	~10%	灰白・燒灰・粗粒	透明白	16c-17c切削面	~	~	3.13	肥前方言
35	D	9号窯・堆積土	陶器底盤	口緣	~10%	灰白・燒灰・粗粒	透明白、 鉛斑草花文	16c-17c切削面	~	~	~	肥前1-2日曆
36	D	10号窯・堆積土	陶器底盤	口緣～底盤	10%	灰白・燒灰・粗粒	透明白	16c液半	12.0	~	44.0	外底面に輪斗子
37	D	10号窯・堆積土	陶器皿	口緣～底盤	70%	灰白・燒灰	透明白	16c-17c 燒灰	9.6	5.0	2.1	肥前1-2日曆
38	D	10号窯・堆積土	陶器底盤	口緣	~10%	灰白・燒灰・粗灰・ 鐵結	透明白、 鉛斑草花文	16c-17c切削面	~	~	~	志野瓦
39	D	10号窯・堆積土	陶器底盤	口緣	~10%	灰白・燒灰	透明白	16c-17c切削面	~	~	~	肥前1-2日曆
40	D	10号窯底・底面	陶器底盤	底盤	50%	灰白・燒灰・粗粒	透明白	16c-17c切削面	~	4.4	24.4	肥前1-2日曆、 燒土14.4
41	D	10号窯底・底面	陶器皿	底盤	60%	灰白・燒灰	透明白	17c液半	~	44.8	23.5	68.98 肥前1-2日曆、 燒土14.4
42	D	10号窯・堆積土	陶器皿	口緣	~10%	浅黃燒・粗粒	長石粒	16c-17c切削面	~	~	~	志野瓦
43	D	10号窯・堆積土上部	陶器皿	口緣	~10%	灰白・燒灰・粗粒	透明白	16c-17c切削面	~	~	~	肥前1-2日曆、 43-61セット
44	D	10号窯底・堆積土	陶器皿	口緣	~10%	灰白・燒灰・粗粒	透明白	16c-17c切削面	11.4	~	44.0	肥前1-2日曆、 43-61セット
45	D	10号窯底・堆積土	陶器皿	口緣	~10%	灰白・燒灰・粗粒	透明白	16c-17c切削面	11.4	~	44.1	肥前1-2日曆、 43-61セット
46	D	10号窯内側	陶器皿	底盤	~10%	灰白・燒灰・粗灰	透明白	16c-17c切削面	~	~	~	志野瓦
47	D	10号窯底・樹山田	底?	底盤	~10%	灰白・燒灰	燒結	15c液半	~	~	~	肥前1-2日曆
48	D	10号窯	陶器皿	口緣	~10%	灰白・黃燒・粗粒	透明白、 鐵結	16c-17c切削面	~	~	~	肥前1-2日曆
49	D	1號	陶器皿	口緣	~10%	灰白・燒灰	透明白	16c-17c切削面	~	~	6.90	肥前1-2日曆

第3表 圖出器體積表(3)

編號	地名	出土地點・層位	編號・器種	殘存部位	胎土・顏色	特徵	形制	時期	口徑		底徑		直徑 (cm)	高 (cm)	直徑 (cm)	高 (cm)	備註
									口徑	底徑	口徑	底徑					
50	D	10号窯所附 海綿土	陶器皿	口沿	~10%	灰・相變	透孔格	唇形	16.5	~17.5	16.5	~17.5	(11.3)	-	-	-	中世後?
51	D	10号窯所附 4層上面	陶器皿	口沿~底部	10%	灰白・相變	透孔格	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
52	D	10号窯所附 底面	陶器皿	体部	~10%	灰・相變	透孔格	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	8.87
53	D	10号窯中央	泥瓦	陶器皿	体部	~10%	灰白・相變	穿孔	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	中世後?
54	D	10号窯所附 海綿土	陶器皿	口沿~底部	~10%	灰白・相變	穿孔	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
55	D	10号窯西側	陶器皿	底部	~10%	灰白・相變	穿孔	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
56	E	12号窯~堆積土	陶器皿	体部~底部	~10%	灰黑・相變	透孔格	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
57	E	12号窯~堆積土	陶器皿	底部	~10%	灰白・相變	透孔格	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
58	E	16号窯~堆積土	陶器皿	体部	~10%	灰・相變	穿孔	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
59	E	16号窯~堆積土	陶器皿	底部	~10%	灰白・相變	穿孔	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
60	D	1層	陶器皿	口沿~底部	10%	灰白・相變	穿孔	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
61	D	1層	陶器皿	口沿~底部	~10%	灰白・相變	透孔格	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
62	D	標出面	陶器皿	体部	~10%	灰白・相變	透孔格	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
63	D	標出面	陶器皿	体部	~10%	灰白・相變	透孔格	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
64	D	表歲	陶器皿	底部	~10%	灰白~灰灰・相變	透孔格	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
65	E	東端燒山面	陶器皿	口沿~底部	~10%	灰・相變	穿孔	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
66	E	東端燒山面	陶器皿	底部	20%	灰白・相變	穿孔	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
67	E	東端燒山面	陶器皿	体部~底部	~10%	灰白~灰灰~相變	穿孔	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
68	E	東端燒山面	陶器皿	体部~底部	50%	灰・相變	穿孔	大圓柱形	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
69	E	東端燒山面	陶器皿	口沿	10%	灰・相變	穿孔	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
70	E	東端燒山面	陶器皿	体部~底部	~10%	灰白~灰灰	穿孔	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3
71	E	東端燒山面	陶器皿	底部	~10%	灰白~灰灰	穿孔	直口	16.5	16.5	16.5	16.5	(11.3)	-	-	-	11.3

第4表 石器観察表

用紙 地名	出土地名・層位	形種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	備 考
72 D	7号坑・堆積土下部	砾石	9.25	5.65	5.65	406.30	兔山岩	
73 D	7号坑・堆積土上部	砾石	8.40	6.20	3.80	260.20	兔山岩	四面打削
74 D	7号坑・堆積土下部	砾石	16.85	7.75	7.65	1100.30	安達岩	
75 D	7号坑・堆積土下部	砾石	10.20	7.65	3.80	206.70	砂岩	一面削化、火入付留
76 D	10号坑・4層上面	砾石	4.85	6.10	4.15	184.70	兔山岩	直方形
77 D	9号坑・堆積土	砾石	8.70	5.25	3.65	159.20	燧石	
78 D	9号坑・堆積土	断面	13.75	12.80	6.05	1811.20	安達岩	
79 E	12号坑・堆積土上	金木石	20.10	18.40	5.80	2803.00	安達岩	スズ・ターナー全面
80 D	7号坑・堆積土下部	金木石	23.75	20.00	6.80	4500.00	安達岩	
81 D	7号坑・堆積土下部	石核	9.00	12.10	4.15	456.30	真谷	火行石素材
82 D	7号坑・堆積土下部	石核	4.35	4.95	2.35	57.00	真谷	火行石素材
783 D	10号坑側・底面	火行石片	2.50	2.10	0.70	4.25	石英	
784 D	10号坑側・堆積土	石塊	3.30	1.80	0.65	2.12	真谷	無茎芋形、火燒内凹?
785 D	10号坑側・堆積土	石塊	2.10	1.10	0.35	0.72	真谷	有茎芋形、火燒内凹?

第5表 土器品種観察表

用紙 地名	出土地名・層位	形種	底径(cm)	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	時間	備 考
86 E	16号土坑・堆積土	土人毛	6.10	(5.85)		50.10	18~1Be	無凹形	
87 E	16号土坑・堆積土	土人毛	(9.35)	(9.35)		174.50	18~1Be		
88 E	16号土坑・堆積土	土人毛	(4.30)	(7.35)		68.75	18~1Be		
89 E	16号土坑・堆積土	土人毛	(2.05)	(2.80)		2.00	1Be-K~2Be-C		
90 E	16号土坑・堆積土	土人毛	(2.85)	(2.85)		5.22	1Be-K~2Be-C		
91 E	16号土坑・堆積土	不明	(6.70)	(4.85)		21.20	1Be-C	五?	
92 E	15号土坑・堆積土下部	火鑿	21.25	23.15	9.15	919.68	1Be-K~2Be-C	野原型打窓、人頭形器、蓋ないし手括きを確認後工具による圧縮で直規。	
93 E	15号土坑・堆積土下部	火鑿	17.80	14.70	13.85	1192.22	1Be-K~2Be-C	野原型打窓、柱頭形、右側面に三日表裏、左側面に火事文模様のハーフ状	

第6表 木製品類別表

規範	地区	出土地名・部位	形態	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	種類	時期	備 考
94	E	13号土坑・棺槨下部	圓筒	(22.2)	(8.2)	1.0	115.00	7才	16g・17g鉤頭	漆竹管
95	E	18号土坑・棺槨上	漆器盒蓋				18.90	ヶヶ子	18g・漆平	内外墨黑漆、内面赤漆、底16.5cm、高13.5cm
96	E	18号土坑・棺槨上	漆器碗				84.00	ヶヶ子	18g・漆平	内外墨黑漆、底17.4cm、高14.0cm、高17.5cm
97	E	東端部・棺槨面	漆器盒				43.00	ヶヶ子	18g・漆平～20g	漆漆に打穴
98	E	18号土坑・棺槨上	漆器底板	19.9	7.1	0.70	28.80	ヒ・ツ	18g・漆平	
99	E	18号土坑・棺槨上	板材	18.10	7.5	1.4	103.00	ヒ・ツ	18g・漆平	射孔1個
100	E	18号土坑・棺槨上	木丸	(16.8)	(2.4)	0.20	1.70		18g・漆平	表面磨擦
101	E	18号土坑・棺槨上	板材	15.90	5.0	0.80	14.15	ス・ツ	18g・漆平	射孔1個
102	E	18号土坑・棺槨上	柱材	(13.70)	6.5	0.60	10.45	?	18g・漆平	射孔1個
103	E	18号土坑・棺槨上	板・木造材	14.4	5.7	1.70	27.09	ス・ツ	18g・漆平	
104	E	18号土坑・棺槨上	紙	(22.8)	(3.4)	4.40	170.00	ク	18g・漆平	先端部破り
105	E	13号土坑・棺槨上	柱材	(6.1)	(3.70)	1.30	68.00	カリ	17g・漆平	ホゾ孔
106	E	13号土坑・棺槨上	柱材	(6.5)	(6.40)	4.40	201.40	カリ	17g・漆平	ホゾ孔
107	E	17号44・棺槨上	柱材	43.2	10.9	7.80	1020.00	?	16g・17g鉤頭	ホゾ孔

第7表 鉄製品・ガラス製品類別表

規範	地区	出土地名・部位	形態	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	時期	備 考
108	B	四7・棺槨上	釘	(9.20)	(2.40)	0.60	36.70		近世初期
109	E	18号1・棺槨上	刀子	(10.30)	(2.50)	0.90	66.72	18g・漆平	
110	E	15号土坑・棺槨上	縄?	(6.20)	(1.25)	0.15	6.92	18g・漆鉤頭	鉤?、打?
111	D	9号4・棺槨上	火打金	(3.60)	(5.30)	0.20	11.97	16g・漆鉤頭	半圓台形
112	D	9号4・棺槨上	牙?	1.60	1.75	1.60	5.77	16g・漆鉤頭	ハサウエー出土漆鉤頭、深褐色
113	C	棺出田	ガラス瓶	1.60	1.65	1.50	13.69		14g・漆鉤頭、黃色

IV 川 端 遺 跡

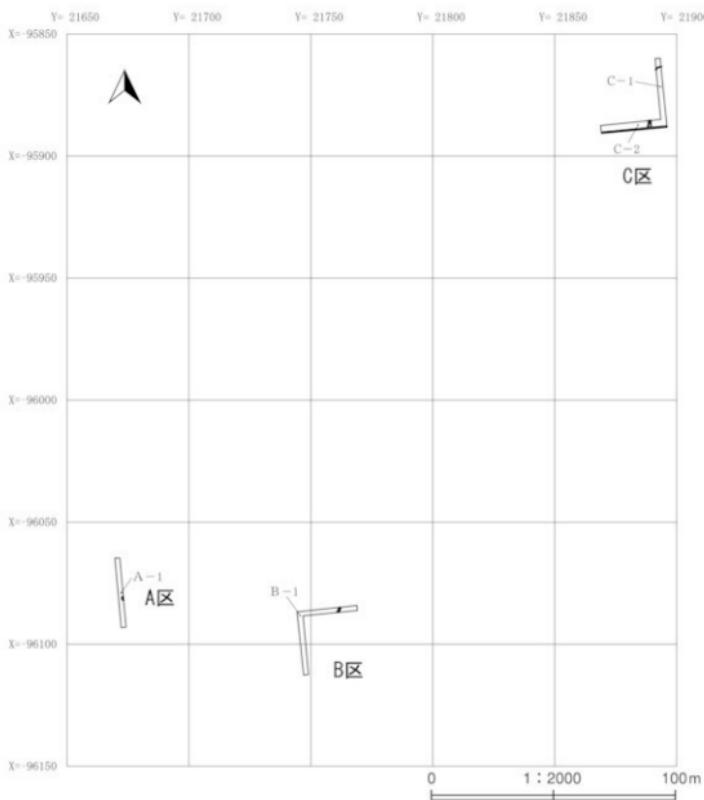
1 概 要

遺跡範囲は南都田字大道219番地を中心に広がっている。調査前現況は水田、畑地であった。遺跡は水沢高位段丘面上に位置する。調査面積は300m²である。

調査区は3カ所に分かれ、西からA区（現況畑地）、B区（現況畑地）、C区（現況水田）と呼称し調査を行った（第41・42図）。

検出遺構は、土坑1基、溝3条である。遺構の構築年代は不明である。

遺物は、弥生土器1点、土師器片2点、石匙1点、剥片1点が遺構検出から出土した。



※座標値は世界測地系

第41図 川端遺跡調査区全体図

遺物は、弥生土器 1 点、土師器片 2 点、石匙 1 点、剥片 1 点が遺構検出から出土した。

(1) A 区 概 要

A 区は現況が畑地である。土坑 1 基が確認された。水田範囲で削平されれば残存していない第 II 層が畑地範囲で見られた。遺構検出面からは土師器片 2 点が出土した。

(2) B 区 概 要

B 区は現況が畑地である。溝 1 条を検出した。遺構検出面からは弥生土器 1 点、石匙 1 点、剥片 1 点である。

(3) C 区 概 要

C 区は現況が水田である。溝 2 条を検出した。出土遺物はない。

2 調査・整理の方法

国分遺跡と同一方法によって調査・整理を行っている。川端遺跡は圃場整備事業で舗装道路上に設置された 3 級基準点を基点として、以下の基準点を各調査区内に設置した。

A 区

A- 1 :	X=- 96078.843m	Y=21672.265m	H=84.599m
--------	----------------	--------------	-----------

B 区

B- 1 :	X=- 96088.266m	Y=21745.657m	H=84.382m
--------	----------------	--------------	-----------

C 区

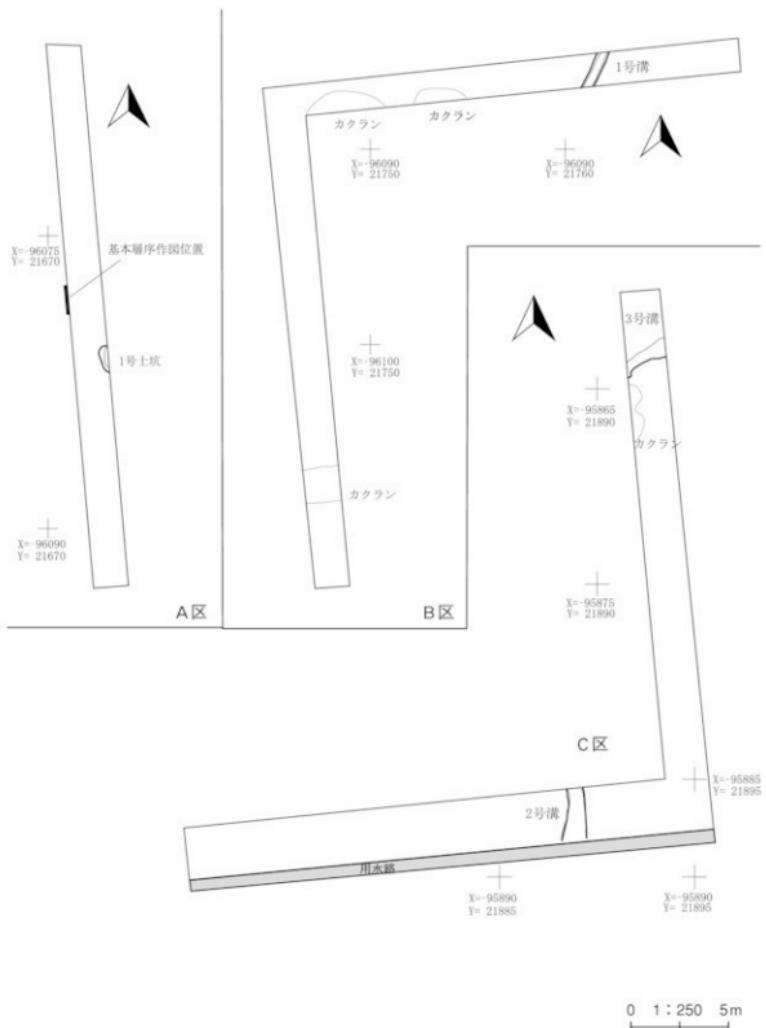
C- 1 :	X=- 95872.264m	Y=21893.186m	H=82.150m
--------	----------------	--------------	-----------

C- 2 :	X=- 95887.464m	Y=21882.007m	H=82.293m
--------	----------------	--------------	-----------

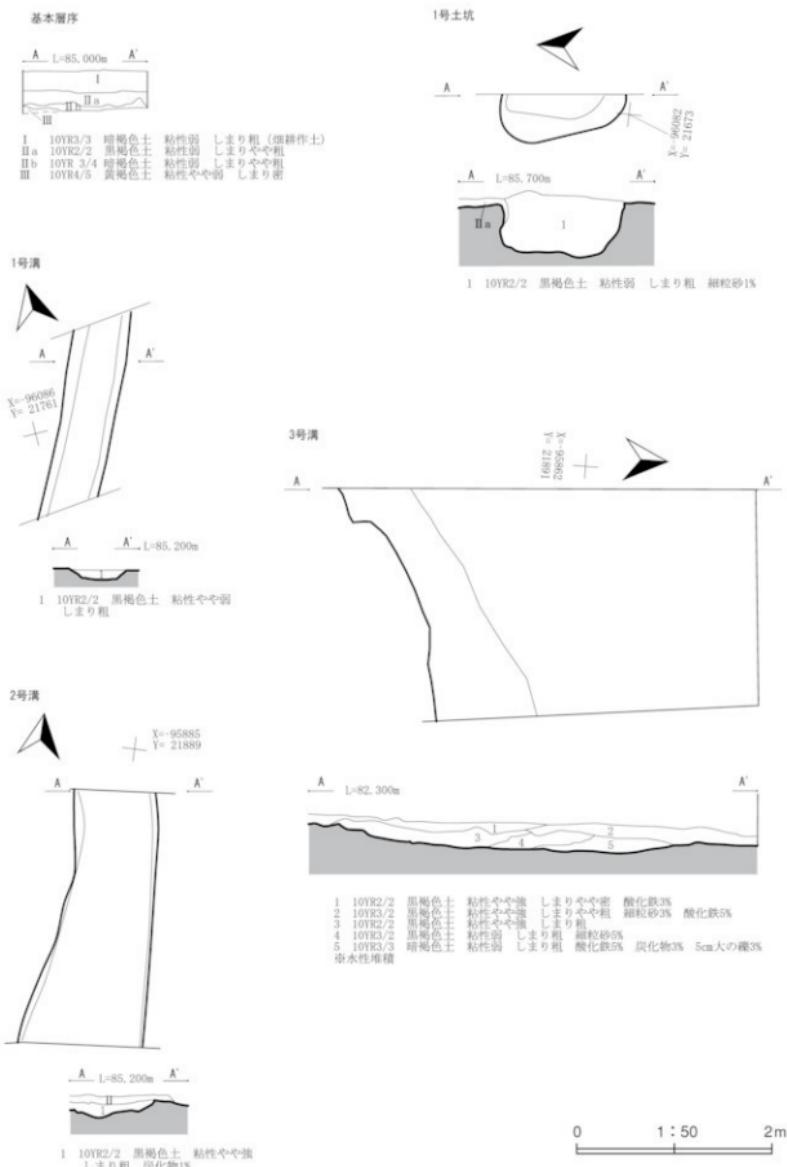
3 基 本 層 序

本遺跡は第 2 章で紹介したとおり、胆沢扇状地の低位段丘に属する水沢段丘面にある。水沢段丘はさらに細分され、水沢高位段丘と水沢低位段丘面に分けられるが、このうち本遺跡は水沢高位段丘面にある。基盤となる層は、水沢高位段丘面を構成する礫層で、約 3 万年前に形成された。その上位に黄褐色土（Ⅲ層）が厚く堆積する。さらにその上位は黒～暗褐色土（Ⅱ層）で、圃場整備以前の旧表土層である。さらにその上には現代の圃場整備後の耕作土・盛土（Ⅰ層）が堆積する。

遺跡範囲内は、圃場整備や長年の耕作によって削平と盛土が繰り返されている。そのため、Ⅱ層の堆積が確認できるのは、一部の畠や畑地、農道直下に限られる。遺構堆積土のベースはこのⅡ層と考えられるが、Ⅱ層はさらにⅡa層とⅡb層に細部した。Ⅱa層が圃場整備以前の表土で中・近世以降の堆積土のベースとなっている。Ⅱb層は、若干であるがⅡa層より明るく、陥穴状土坑など古代以前の遺構の堆積土のベースとなっている（第43図）。Ⅰ～Ⅱ層の堆積は国分遺跡と同じである。



第42図 川端遺跡遺構配置図



第43図 基本層序、遺構図

4 検出遺構

(1) 土 坑

1号土坑（第43図、写真図版35）

<位置・検出状況> A区の座標値（X=- 96082、Y=21673m）付近に位置する。現況は畠地である。
III層面で黒褐色の不整形プランを検出した。

<規模・形状> 東側が調査区外であるため、平面形は不明である。断面形は楕円形である。調査区内規模は（西-東）1.28m、（北-南）0.52mで、最深部63cmである。底面は凹凸がある。

<堆積土> 黒褐色土である。若干の細粒砂が混入している。

<遺物> なし。

<時期> 時期不明である。

(2) 溝

1号溝（第43図、写真図版35）

<位置・検出状況> B区の座標値（X=- 96086、Y=21761m）付近に位置する。現況は畠地である。
III層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 調査区内規模は（北-南）2.00m、幅0.60mで、深さは10cmである。

<堆積土> 黒褐色土である。

<遺物> なし。

<時期> 時期不明である。

2号溝（第43図、写真図版35）

<位置・検出状況> C区の座標値（X=- 95885、Y=21889m）付近に位置する。現況は水田である。
III層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 調査区内規模は（北-南）2.60m、幅1.30m、深さは17cmである。

<堆積土> 黒褐色土で、微量の炭化物を含む。

<遺物> なし。

<時期> 時期不明である。

3号溝（第43図、写真図版36）

<位置・検出状況> C区の座標値（X=- 95862、Y=21891m）付近に位置する。現況は水田である。
III層面で黒褐色土プランを検出した。

<規模・形状> 調査区内規模は（西-東）2.40m、幅4.28m、深さは30cmである。遺構の性格は水路、もしくは河川跡であるが、調査範囲が狭く限定できない。

<堆積土> 上部が黒褐色土、下部が暗褐色土である。水性堆積である。

<遺物> なし。

<時期> 時期不明である。

5 出 土 遺 物

(1) 弥 生 土 器 (写真図版36)

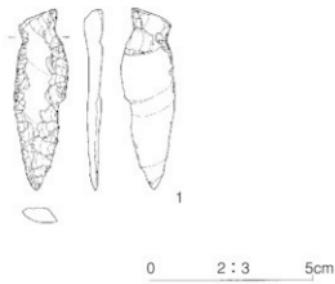
2は撚糸文を施文する。B区遺構検出面から出土した。摩耗が著しい。写真掲載である。

(2) 石 器 (第44図、写真図版36)

1はB区遺構検出面出土の頁岩製石匙である。縦型で、裏面の調整は少ない。他に頁岩製剥片が出土している。

(3) 土 師 器

B区遺構検出面から摩耗した土師器片が出土している。部位不明である



第44図 出土遺物

第8表 遺物観察表

掲載	出土地点・層位	種別	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	特徴	備考
1	B区 検出面	石器	石匙	5.54	1.68	0.55	3.67	裏面加工微細	頁岩製
掲載	出土地点・層位	種類	器種	残存部位	残存率	色調	文様	備考	
2	B区 検出面	弥生土器	甕類?	肩部	10%以下	橙	撚糸r	写真掲載	

V 堤 遺 跡

1 概 要

遺跡範囲は南都田字四ツ柱109番地ほかである。調査前現況は水田であった。遺跡は水沢高位段丘面上に位置する。調査面積は360m²である。

調査区は1カ所である。検出遺構は、竪穴住居2棟、竪穴住居状遺構1基、土坑3基、溝4条、柱穴32個である。主に奈良～平安時代前半の遺構である。調査区西側には河川跡がある(第45図)。

出土遺物は、土師器・須恵器中コンテナ1箱(8.1kg)、削器1点(44.72g)、土製紡錘車1点(59.43g)、鉄製品2点(70.4g)、粘土塊2点(21.2g)、炭化材である。

2 調査・整理の方法

国分遺跡と同一方法によって調査・整理を行っている。堤遺跡は圃場整備事業で舗装道路上に設置された3級基準点を基点として、以下の基準点を各調査区内に設置した。

A-1: X=- 95806.818m Y=22197.026m H=80.455m

A-2: X=- 95835.948m Y=22201.334m H=80.620m

3 基 本 層 序

本遺跡は第2章で紹介したとおり、胆沢扇状地の低位段丘に属する水沢段丘面にある。水沢段丘はさらに細分され、水沢高位段丘と水沢低位段丘面に分けられるが、このうち本遺跡は水沢高位段丘面にある。基本層序は川端遺跡と同じである。IV章3節を参照されたい。

4 検 出 遺 構

(1) 竪 穴 住 居

1号竪穴住居(第46図、写真図版37)

<位置・検出状況>座標値(X=- 95819, Y=22196m)付近に位置する。現況は水田である。Ⅲ層面で黒褐色の三角形プランを検出した。検出面は、黒褐色土(第1層)が中央に、第2層がその周囲に堆積していた。

<規模・形状>西側が調査区外であるため、全体形は不明であるが、方形もしくは長方形と考えられる。調査区内規模は(北西-南東)5.33m、(南西-北東)3.85m、検出面から床面までの深さ22cmである。建物軸方向はN-41°-Wである。明確な掘り方は確認できなかったが、本遺構の床面は段丘疊層を掘り込んで構築されていたと考えられる。南東壁と北東壁の一部に周溝が残る。支柱は1住-P1の1個を検出している。

<堆積土>上部層が黒褐色土で、下部層が暗褐色土の人為層である。上部層の遺物含量は少ない。下部層は炭化物や炭化材を多く含む。底面付近の堆積土からは炭化材が多く検出されたことから、火災住居の可能性が考えられる。

<柱穴>4個検出し、1個が支柱穴である。

<遺物分布>床面付近では南東側に炭化材、北東側に土師器、1号住居-P1から土製品が出土している。

< 遺物 > 奈良時代の土師器 (1.71kg)、須恵器 (10g)、土製品 (59.43g) 炭化材が出土している。

【环】1は丸底で有段の土師器環で、2は回転ナデで底面回転ヘラナデの須恵器環である。

【椀・鉢類】3は内面にコゲが付着する。口縁部がヨコナデで、その下部の調整は摩耗で不明である。

【壺・甕類】4～8が出土している。4・5a・5bは同一個体の壺である。口縁部ヨコナデ、頸部有段、胴部ヘラナデで、球胴形である。6～8は甕である。6a・6bはハケ調整で、外底面の中心が窪み、周縁に摩耗がみられる。7は底部片で、外底面の中心が窪み、周縁に摩耗がみられる。8は口縁～胴部片で、内外面ハケ調整である。

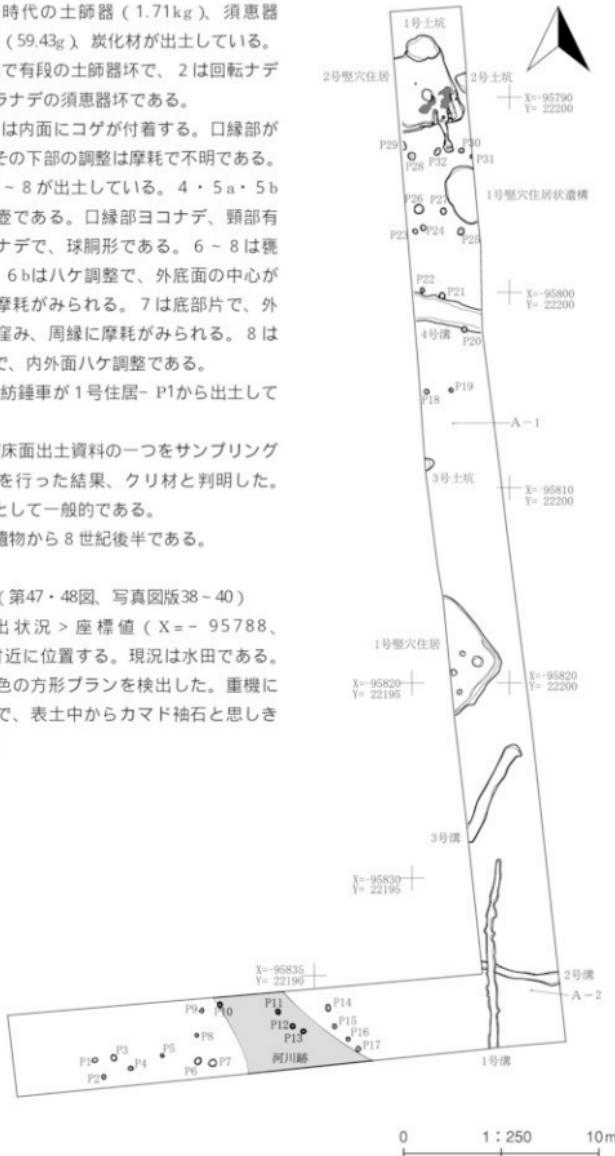
【土製品】30の紡錘車が1号住居-P1から出土している。

【炭化材】住居床面出土資料の一つをサンプリングし、樹種同定を行った結果、クリ材と判明した。柱材や屋根材として一般的である。

< 時期 > 出土遺物から8世紀後半である。

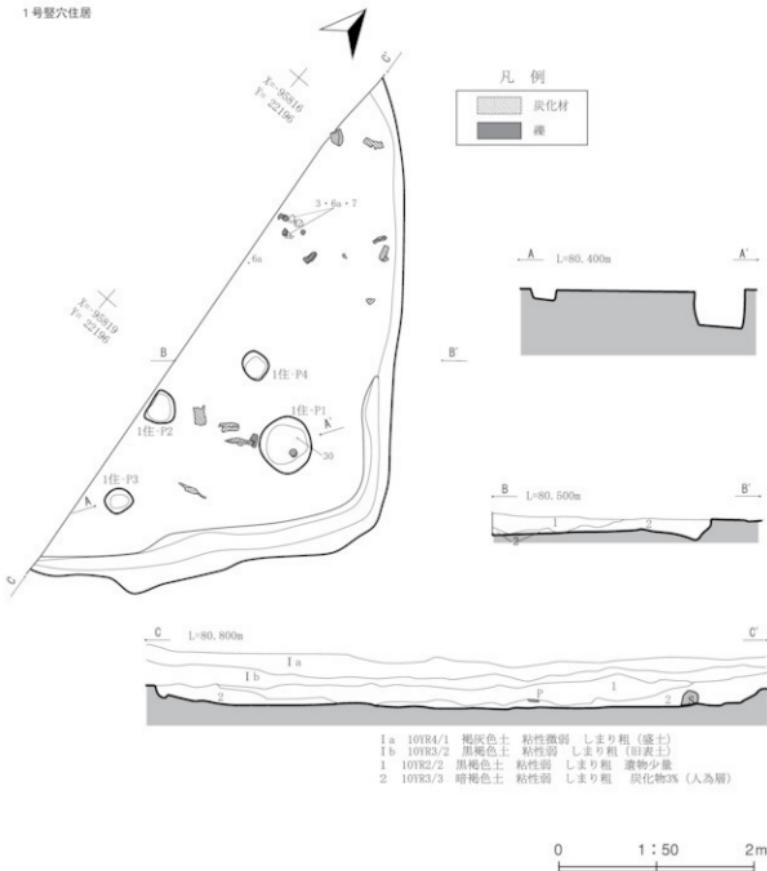
2号竪穴住居 (第47・48図、写真図版38～40)

< 位置・検出状況 > 座標値 (X=-95788、Y=22197m) 付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色の方形プランを検出した。重機による表土掘削で、表土中からカマド袖石と思しき礫が出土した。



第45図 堤遺跡遺構配置図

1号竪穴住居

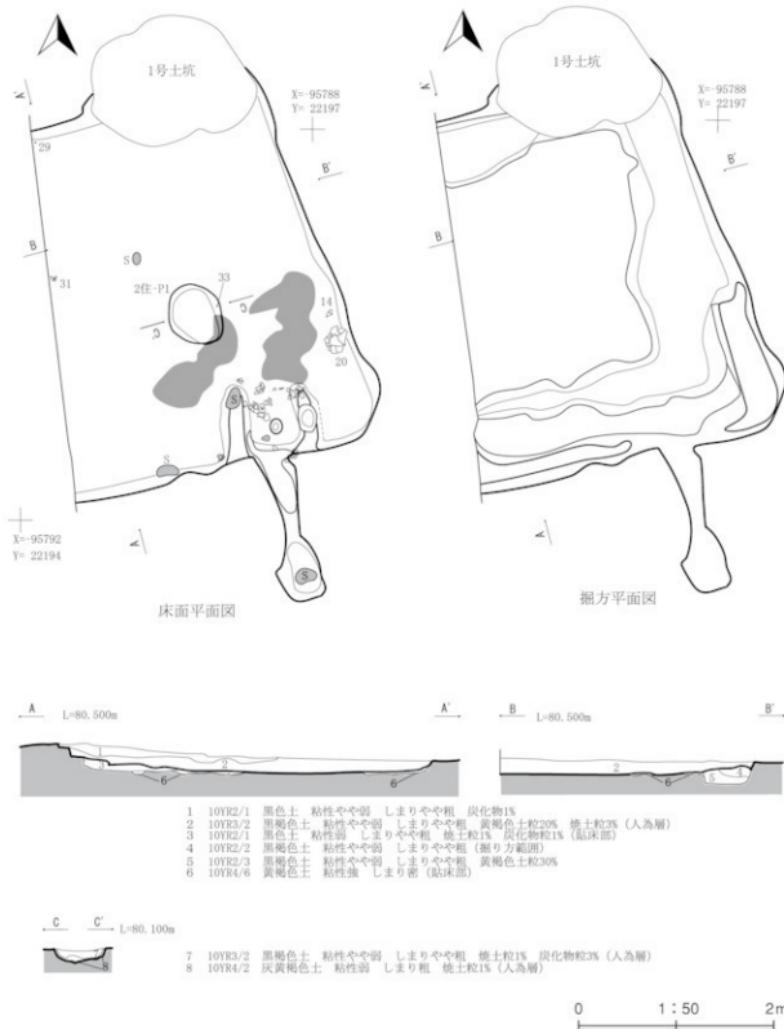


第46図 1号竪穴住居

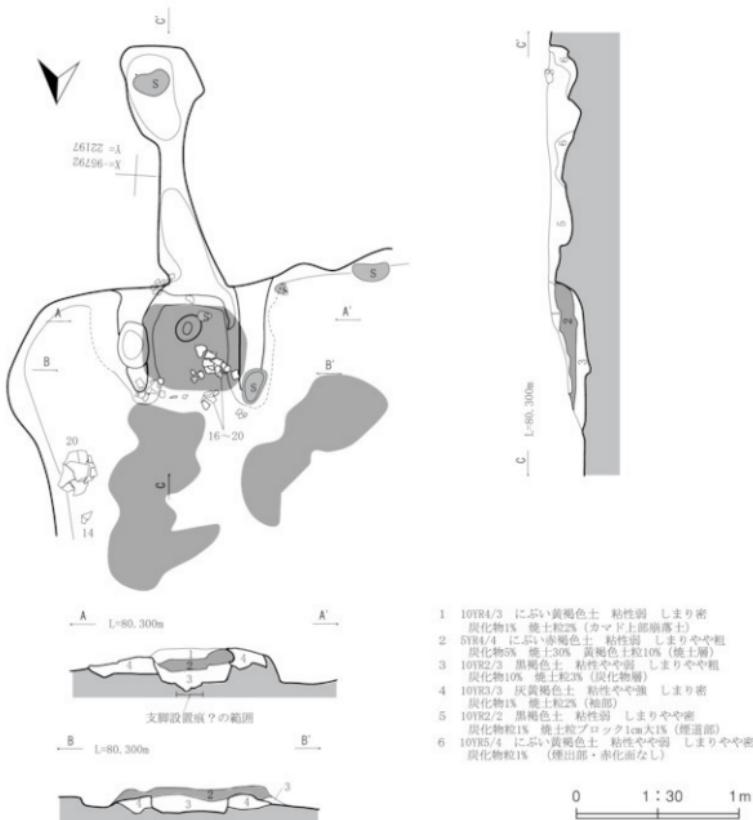
出土位置と碟サイズから判断するに、第48図のカマド左袖部Pit範囲と合致すると推定される。検出作業段階で、この碟が表土中から出土したことから、水田造成による削平によってカマド上部構造は消失しているものと考えられた。

<規模・形状>西側が調査区外であるため、全体形は不明であるが、方形もしくは長方形と考えられる。調査区内（北-南）は3.8m、（西-東）3.45m、検出面から床面までの深さ20cm、掘り方までの深さ30cmである。建物軸方向はN-13°-Wである。カマドが南壁に設置されている。

<配置>1号土坑に切られる。



第47図 2号竪穴住居 (1)



第48図 2号竪穴住居(2)

<堆積土> 黒色土と黒褐色土が主体で、貼床部には黄褐色土が混入している。調査中は、床面までの堆積土を1~3層と捉えていた。堆積土のしまりが少なかったことによる。また、カマドから流出した焼土が3層面上に分布していたことから、第3層は貼床部構築土であり、床面は第2層直下となる。写真図版において、南壁が棚状施設様、もしくは住居拡張に伴う段形成のように見えるのは、貼床部を先行して掘削したためと考えられる。

<付属施設> カマドが南壁東側に設置される。カマド総延長2.25m、燃焼部長0.70m 袖部を含む燃焼部幅1.10m、煙道長1.55m 煙道幅0.32m、カマド軸方向S- 11.5° - Eである。カマド内堆積土第2層が焼土層である。その下に炭化物層が堆積している。燃焼部底面には支脚設置痕跡と思しき小ビッ

トが1個ある。右袖部には構築材の礫が配置されている。

<遺物分布>カマド周辺に土師器・須恵器片が密集し、西側調査区壁際に鉄製品2点と削器1点が点在する。2号住- P1から土師器・須恵器が出土している。

<遺物>平安時代の土師器(2.2kg)・須恵器(3.4kg)・石器(44.7g)・鉄製品(70.4g)・粘土塊(21.2g)が出土している。

【环】环は須恵器主体である。土師器は9、須恵器は10~15である。9は内面黒色処理されている。14は底面糸切後にケズリ調整される。概ね口縁部が直線的に開く形態で占められる。

【甕】16~19が土師器、20~22が須恵器である。16・17は6と類似形態の甕で、カマド燃焼部から出土している。19は胴部片で回転ナデ後にヘラナデ調整を施す。20は歪みがある資料の為、図面上で合成せずに20aと20bとして2点とも図化掲載した。色調はオレンジ色で、還元焼成後に酸化したと考えられる。これらは器面が発泡しており、粗悪品の部類に入る可能性がある。窯元と近距離の遺跡に搬入される事例が多い。21・22は20とは別個体の須恵器甕である。

【石器】29の削器が床面から出土している。裏面右側縁に使用痕と考えられる微小剥離痕が見られる。

【鉄製品】2点出土した。31は棒状で、何らかの道具の軸部と考えられる。32は刀子である。

<時期>出土遺物から9世紀前半である。

(2) 穴住居状遺構

1号穴住居状遺構(第49図、写真図版40)

<位置・検出状況>座標値(X=-95796、Y=22197m)付近に位置する。現況は水田である。III層面で黒褐色の半楕円形プランを検出した。

<規模・形状>東側が調査区外であるため、平面形は不明である。断面形は皿形である。調査区内規模は(北-南)3.00m、(西-東)1.50mで、最深部16cmである。底面は平坦である。

<堆積土>黒褐色土である。砂粒が他の遺構に比べて多く混入している。

<遺物>土師器(79.8g)・須恵器(29.2g)が出土しており、24の土師器甕底部片がある。1号住居出土土師器甕底部と同様に外底面中心が窪み、周縁が摩耗している。

<時期>出土遺物から奈良~平安時代である。

(3) 土 坑

1号土坑((第49図、写真図版40))

<位置・検出状況>座標値(X=-95786、Y=22196m)付近に位置する。現況は水田である。III層面で2号穴住居と接する黒褐色の不整形プランを検出した。

<規模・形状>平面形は不整形、断面形は椀形に近いが底面の凹凸が著しい。調査区内規模は(西-東)1.73m、(北-南)1.36mで、最深部32cmである。底面は段丘礫が露出し、凹凸がある。

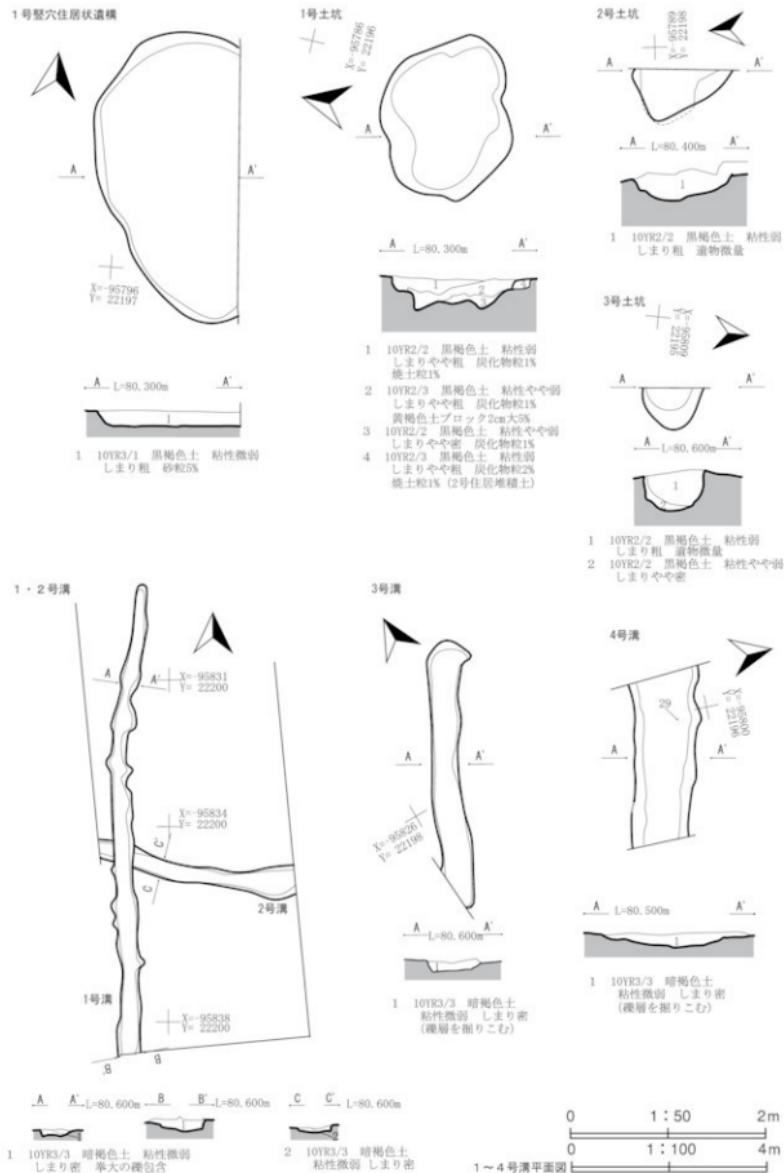
<配置>2号穴住居を切る。<堆積土>黒褐色土である。人為堆積である。

<遺物>23は堆積土から出土した須恵器甕片である。2号穴住居出土の21・22と同一個体の可能性がある。

<時期>出土遺物から2号穴住居と同時期の9世紀前半である。

2号土坑(第49図、写真図版41)

<位置・検出状況>座標値(X=-95789、Y=22198m)付近に位置する。現況は水田である。III層面



第49図 1号竖穴住居状遺構、1～3号土坑、1～4号溝

で2号竪穴住居の東側の調査区壁際で黒褐色の不整形プランを検出した。

<規模・形状>東側が調査区外のため、平面形は不明である。断面形は楕円形である。調査区内規模は（北西-南東）0.98m、（南西-北東）0.60mで、最深部30cmである。

<堆積土>黒褐色土で、遺物を微量包含する。<遺物>土師器（54.7g）が出土しており、25・26は内面黒色処理の土師器壺で、底部を欠損する。<時期>出土遺物から平安時代である。

3号土坑（第49図、写真図版41）

<位置・検出状況>座標値（X=- 95809、Y=22195m）付近に位置する。現況は水田である。III層面の調査区壁際で黒褐色の半梢円プランを検出した。

<規模・形状>西側が調査区外のため、平面形は不明である。断面形は楕円形である。調査区内規模は（北-南）0.63m、（西-東）0.43mで、最深部42cmである。

<堆積土>黒褐色土である。<遺物>なし。<時期>堆積土から古代である。

（4）溝

1号溝（第49図、写真図版41）

<位置・検出状況>座標値（X=- 95834、Y=22200m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で暗褐色プランを検出した。

<規模・形状>調査区内規模は（北-南）9.70m、幅0.55mで、深さは13cmである。

<配置>2号溝を切る。<堆積土>暗褐色土である。<遺物>なし。<時期>時期不明である。

2号溝（第49図、写真図版41）

<位置・検出状況>座標値（X=- 95834、Y=22200m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で暗褐色のプランを検出した。

<規模・形状>調査区内規模は（西-東）4.20m、幅0.65mで、深さは6cmである。

<配置>1号溝に切られる。<堆積土>暗褐色土である。<遺物>なし。<時期>時期不明である。

3号溝（第49図、写真図版41・42）

<位置・検出状況>座標値（X=- 95826、Y=22198m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で暗褐色のプランを検出した。

<規模・形状>調査区内規模は（北東-南西）5.60m、幅0.90mで、深さは11cmである。

<堆積土>暗褐色土である。<遺物>なし。<時期>時期不明である。

4号溝（第49図、写真図版42）

<位置・検出状況>座標値（X=- 95800、Y=22196m）付近に位置する。現況は水田である。III層面で暗褐色のプランを検出した。

<規模・形状>調査区内規模は（西-東）3.50m、幅1.40mで、深さは16cmである。

<配置>P20に切られる。<堆積土>暗褐色土である。

<遺物>土師器（121.9g）、須恵器（184.7g）が出土しており、27の須恵器甕底部片が底面から、28の須恵器大甕胴部片が堆積土から出土している。<時期>出土遺物から平安時代前半である。

第9表 柱穴観察表

() 内は株出分のみの数値を示す			
No.	長×幅(cm)	深(cm)	底面標高(m)
P1	27×26	12	80.25
P2	26×22	10	80.28
P3	34×29	19	80.16
P4	27×21	14	80.22
P5	20×17	17	80.18
P6	40×32	24	80.08
P7	40×37	12	80.22
P8	21×17	12	80.04
P9	29×25	7	80.08
P10	30×24	12	80.04
P11	30×22	10	80.06
P12	27×23	12	80.07
P13	25×23	8	80.10
P14	38×25	13	80.11
P15	26×22	11	80.13
P16	23×22	17	80.07
P17	28×27	13	80.12
P18	27×26	16	80.11
P19	23×22	24	80.04
P20	33×30	7	80.22
P21	35×30	7	80.18
P22	28×21	12	80.10
P23	27×26	25	79.93
P24	31×29	37	79.80
P25	40×35	42	79.76
P26	52×49	26	79.89
P27	35×32	31	79.86
P28	41×39	28	79.84
P29	(45×18)	46	79.68
P30	30×28	23	79.92
P31	(21×13)	26	79.76
P32	41×29	37	79.82

(5) 柱 穴

第45図堤遺跡遺構配置図に柱穴の分布を示した。調査区南部の河川跡付近にP1~17、2号竪穴住居付近にP18~32が分布する。調査区幅が狭く断定に至らなかったが、P26~28・P32は掘立柱建物を構成する可能性がある。各柱穴規模は第9表に示した。

5 出 土 遺 物

(1) 土師器・須恵器(第50~52図、写真図版43~45)

1~8は奈良時代の1号竪穴住居出土である。9~22は平安時代の2号竪穴住居出土である。23は1号竪穴住居状遺構、24は1号土坑、25・26は2号土坑、27・28は4号溝出土である。

【壺】土師器壺、須恵器壺がある。

奈良時代：1の土師器壺、2の須恵器壺がある。1は丸底で、体部中央に段を有する。下半部は良く磨かれている。2は底面回転ヘラ切りである。

平安時代：9・13・25・26の土師器壺のうち9・25・26は内面黒色処理されている。10~15は須恵器壺である。形状が判明している14は外底面が回転糸切後にヘラケズリ調整される。

【椀・鉢類】土師器である。

奈良時代：3は形態上、やや大型の椀か鉢と考えらえる。口縁部ヨコナデで、下部は摩耗で調整不明である。

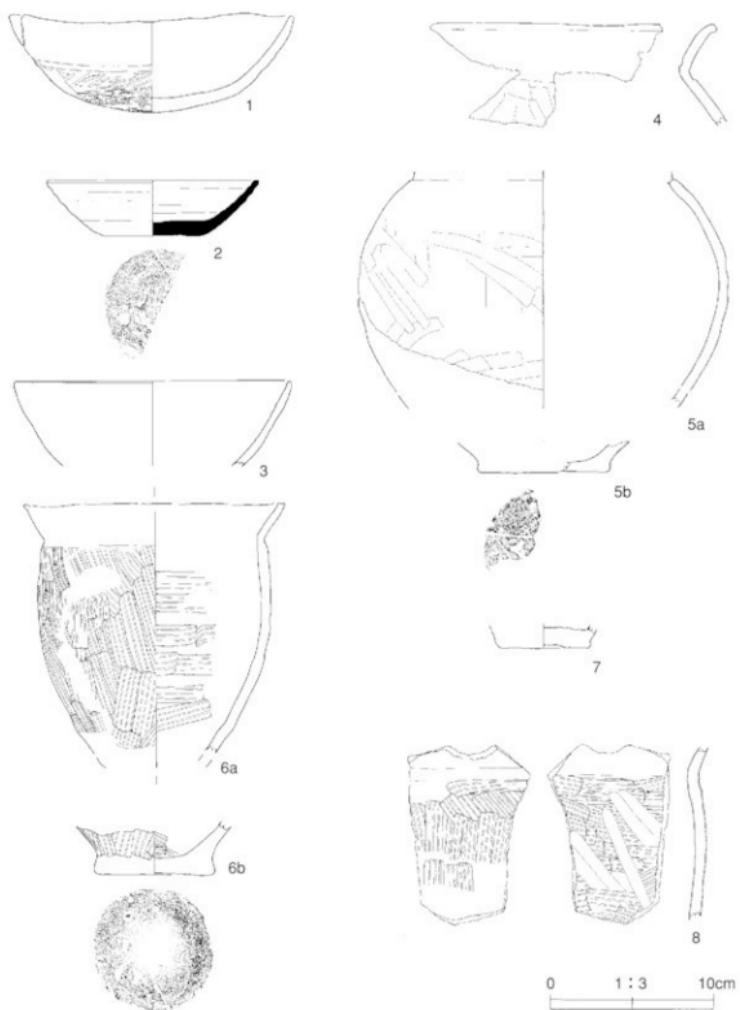
【壺】土師器である。

奈良時代：4・5の土師器壺がある。4・5は球胴形で、頸部の屈曲が強く、段を有する。

【甕】土師器甕、須恵器甕がある。

奈良時代：6~8の土師器甕である。

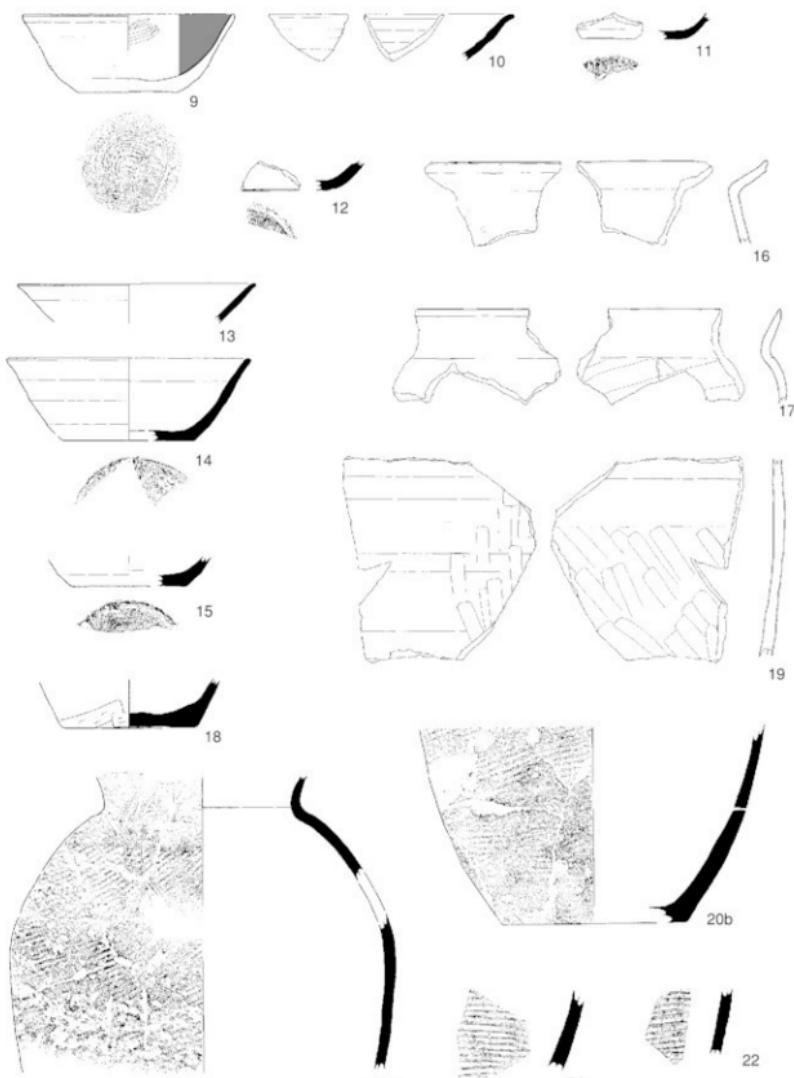
平安時代：16~19・24が土師器甕、20~22・23・27・28が須恵器甕である。奈良時代の特徴である頸部有段の痕跡が17に僅かに残る。20a・20bは同一個体で、色調はオレンジ色で、還元焼成後に酸化したと考えられる。



第50図 出土遺物(1)

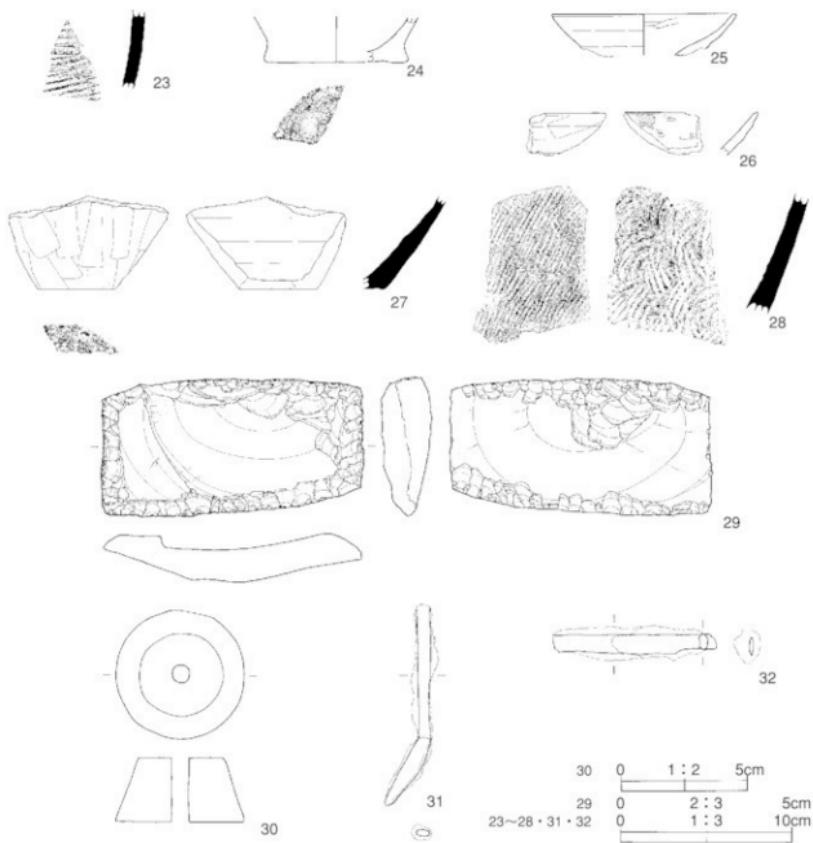
(2) 石 器 (第52図、写真図版45)

29は2号住居床面出土の頁岩製削器である。裏面右側縁に使用痕と考えられる微小剥離痕が見られる。素材頭部と先端部を調整し、正面左側縁部を刃部としたスクレイパーで、使用痕は押引き運動に



0 1 : 3 10cm

第51図 出土遺物(2)



第52図 出土遺物(3)

よる痕跡と考えられる。

(3) 土 製 品 (第52図、写真図版45)

30は1号竪穴住居支柱穴から出土した紡錘車である。黒斑が見られる。

(4) 鉄 製 品 (第52図、写真図版45)

31・32は2号竪穴住居床面出土である。31は棒状、32は刀子である。

(5) 粘 土 塊 (写真図版45)

33・34は写真掲載資料である。2号竪穴住居床面出土で、纖維質が微量含まれている。

第10表 土器・須恵器調査表(1)

編號	出土地点・地名	種別	器種	残存部位	残存率	色調	主な外表面質	底面	法面(cm)		高さ	幅員	面積	面積
									口径	底径				
1	1号櫛穴山房 1・2層	土器	环	口縁～底部	90%	に古い赤褐色	コマカナ ナデ	カガキ	17.4	10.0	5.9			
2	1号櫛穴山房 1・2層	須恵器	环	口縁～底部	30%	に古い黒褐色	回転ナデ	回転ナデ	(13.0)	(6.0)	3.4			
3	1号櫛穴山房 2層	土器	碗	口縁～全体	10%以下	に古い黄褐色	ヨコナデ ナデ?	ヨコナデ	(17.0)	—	(3.2)	底面擦耗、内面コゲ		
4	1号櫛穴山房 1・2層	土器	碗	口縁～全体	10%以下	黒褐色	ヨコナデ ナデ?	ヨコナデ	—	—	—			
5a	1号櫛穴山房 1・2層	土器	直	全体	20%	に古い黒褐色	ナデ	摩耗	—	—	—			
5b	1号櫛穴山房 1層	土器	直	底部	10%	に古い黒褐色	ナデ	摩耗	—	—	(7.8)	(1.9)		
6a	1号櫛穴山房 1・2層	土器	直	口縁～全体	40%	に古い黄褐色	ハケ ヨコナデ?	ハケ	—	(16.0)	—	(16.0)		
6b	1号櫛穴山房 2層	土器	直	全体	10%以下	に古い黄褐色	ハケ	摩耗	—	—	7.0	(3.3)	外底面擦耗	
7	1号櫛穴山房 2層	土器	直	全体	10%	に古い黒褐色	摩耗	摩耗	—	—	5.4	—	底面擦耗	
8	1号櫛穴山房 2層	土器	直	口縁～全体	10%以下	に古い黒褐色	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ	—	—	—	—	内面コゲ	
9	2号櫛穴山房 深井土	土器	环	口縁～底部	50%	に古い黒褐色	回転ナデ	黒色處理 カガキ	回転ナデ	(13.0)	6.0	4.7	外底面擦耗	
10	2号櫛穴山房 深井土	須恵器	环	口縁	10%以下	灰	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—			
11	2号櫛穴山房 底部	須恵器	环	全体	10%以下	灰	回転ナデ	回転ナデ	カズリ	—	—			
12	2号櫛穴山房 深井土	須恵器	环	全体	10%以下	灰	回転ナデ	回転ナデ	カズリ	—	—			
13	2号櫛穴山房 底部土	須恵器	环	口縁	10%	灰白	回転ナデ	回転ナデ	(15.6)	—	(2.4)			
14	2号櫛穴山房 底部	須恵器	环	口縁～底部	60%	灰	回転ナデ	回転ナデ	カズリ	15.0	(8.0)	5.0		
15	2号櫛穴山房 カマド3箇	須恵器	环	全体	10%以下	灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	—	(3.5)	(1.8)		
16	2号櫛穴山房 カマド3箇	土器	直	口縁	10%以下	褐	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—	—	外底スズ	
17	2号櫛穴山房 底部	土器	直	口縁～全体	10%以下	に古い黒褐色	摩耗	ヨコナデ	ナデ	—	—	—	底面有隙	
18	2号櫛穴山房 底部	土器	直	全体	10%以下	灰褐色	カズリ	回転ナデ	カズリ	—	(8.0)	(1.0)		
19	2号櫛穴山房 カマド1箇	土器	直	全体	10%以下	浅黄褐色	回転ナデ	ナデ	—	—	—	—		

第10表 土器・須恵器調査表(2)

施設	出土地点・場所	種別	基盤	保存状況	保存率	色調	主な外見特徴	底面	口径	底径	高さ	備考
2号櫛穴柱洞 风洞	須恵器	壺	壺～体部	30%	壺	褐色	口縁ナメ タタキ	白陶ナメ タタキ	—	—	—	
2号櫛穴柱洞 风洞	須恵器	壺	体～底部	10%	壺	褐色	口縁ナメ タタキ	白陶ナメ タタキ	—	—	(15.9)	
2号櫛穴柱洞 风洞	須恵器	壺	体～底部	44.3%	壺	褐色	口縁ナメ タタキ	白陶ナメ タタキ	—	—	—	
2号櫛穴柱洞 埴輪土	須恵器	壺	108cm以下	灰	壺	褐色	口縁ナメ タタキ	白陶ナメ タタキ	—	—	—	
2号櫛穴柱洞 埴輪土	須恵器	壺	108cm以下	灰	壺	褐色	口縁ナメ タタキ	白陶ナメ タタキ	—	—	—	
2号櫛穴柱洞 埴輪土	須恵器	壺	108cm以下	灰	壺	褐色	口縁ナメ タタキ	白陶ナメ タタキ	—	—	—	
1号櫛穴柱洞 埴輪土	須恵器	壺	体部	10%	壺	褐色	口縁ナメ タタキ	白陶ナメ タタキ	—	—	—	3号住資料に類似
1号土坑 埴輪土	土陶器	壺	底部	108cm以下	淡黄	ナメ?	摩耗	—	(8.4)	(2.6)	1号住資料に類似	
2号土坑 埴輪土	土陶器	壺	口縁～体部	10%	淡黄	白陶ナメ タタキ	黑色處理 ミガキ	—	(10.6)	—	(2.4)	
2号土坑 埴輪土	土陶器	壺	口縁～体部	108cm以下	に赤い赤陶	白陶ナメ タタキ	黑色處理 ミガキ	—	—	—	—	
4号窓・床面 須恵器	須恵器	壺	底部	108cm以下	灰	ナメ	白陶ナメ タタキ	—	—	—	—	
4号窓・床面 須恵器	須恵器	壺	体部	108cm以下	に赤い赤陶	タタキ	タタキ	—	—	—	—	内面ヨウ

第11表 石器・土製品・鉄製品・粘土塊調査表

施設	出土地点・場所	種別	基盤	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	特徴	備考
29	2号櫛穴柱洞 床面	滑石器	骨器	4.00	7.80	1.50	44.72	表面有微縫と下端部に伴う鋸切跡	直立質
30	1号櫛穴柱洞 床面	土製品	粘土塊	5.00	5.00	2.50	39.43	穿穴部6mm	
31	2号櫛穴柱洞 床面	土製品	輪?	(31.7)	(3.0)	(0.40)	29.54	粘土輪の輪か?	
32	1号櫛穴柱洞 床面	土製品	刀子	9.6	2.0	(0.50)	40.48		
33	2号櫛穴柱洞 床面	粘土塊	粘土塊	2.50	2.20	1.10	5.68	写真撮影	
34	2号櫛穴柱洞 床面	粘土塊	粘土塊	3.60	2.50	2.40	16.17	写真撮影	

() は残存量

VI 自然科学分析

1 国分遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

国分遺跡は、岩手県奥州市胆沢区南都田字上広岡445他に所在する。測定対象試料は、P145 (4号掘立柱建物構成要素) 出土の柱材と考えられる木片 (No.1: IAAA- 102959)、井戸跡と考えられる13号土坑出土木片 (No.2: IAAA- 102960) の合計2点である (表1)。試料はいずれも木片の最外年輪側から採取された。

(2) 測定の意義

試料が出土した遺構の年代を把握し、別遺構との関係性を検討する。

(3) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(4) 測定方法

3 MVタンデム加速器 (NEC Pelletron 9SDH-2) をベースとした¹⁴C-AMS専用装置を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

- 1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- 2) ¹⁴C年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の¹⁴C年代がその誤差

範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- 3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい (14Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も¹⁴Cによって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- 4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、δ¹⁴C補正を行い、下一行を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によって結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

(6) 測 定 結 果

試料の¹⁴C年代は、P145出土木片No.1が 310 ± 30 yrBP、13号土坑出土木片No.2が 400 ± 30 yrBPである。历年較正年代 (1σ) は、No.1が1521~1641cal AD、No.2が1446~1610cal ADの間に各々2つの範囲で示される。

試料の炭素含有率は、いずれも50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

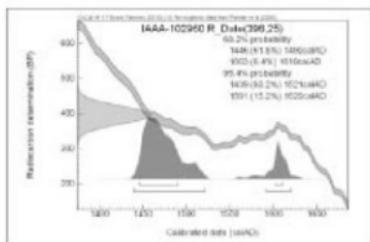
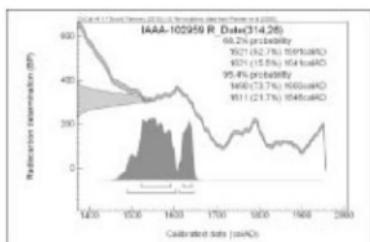
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, Radiocarbon 19 (3), 355- 363
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337- 360
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0- 50,000 years cal BP,
Radiocarbon 51 (4), 1111- 1150

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-102959	No.1	P145 (4号掘立柱建物構成要素) 堆積土	木片	AAA	-26.13 ± 0.55	310 ± 30	96.16 ± 0.31
IAAA-102960	No.2	13号土坑堆積土	木片	AAA	-25.28 ± 0.58	400 ± 30	95.18 ± 0.31

[#4140]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年 校正用 (yrBP)	1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-102959	330 ± 30	95.94 ± 0.29	314 ± 26	1521calAD - 1591calAD (52.7%) 1621calAD - 1641calAD (15.5%)	1490calAD - 1603calAD (73.7%) 1611calAD - 1646calAD (21.7%)
IAAA-102960	400 ± 20	95.12 ± 0.28	396 ± 25	1446calAD - 1490calAD (61.8%) 1603calAD - 1610calAD (6.4%)	1439calAD - 1521calAD (80.2%) 1591calAD - 1620calAD (15.2%)

[参考値]



吉川純子（古代の森研究会）

国分遺跡は奥州市胆沢区にあり、江戸時代初頭の10号溝内1号池状遺構および江戸時代の建物跡を構成するP115から種実が出土したため、当時の植物資源利用状況を把握するためこれら種実の同定をおこなった。種実は実体顕微鏡で観察・同定し同定結果を表1に示した。

10号溝内1号池状遺構からはモモ、ハクウンボク、カボチャ仲間を出土した。P115からは炭化したオオムギ、イネ、マメ科を出土した。溝から出土した種実のうちモモとカボチャは利用後の残渣と考えられる。ハクウンボクはあまり利用しないと考えられるため、溝の周囲に生育していたものが落下または流れ込みにより堆積したと考えられる。また、モモ核のサイズは高さ28.3mm、幅17.5mmで縦に長い紡錘形で比較的大きいことから、觀賞用のハナモモではなく主に果肉を食用とするモモであったと考えられる。P115は建物の種類は不明であるが、炭化したオオムギがほとんどを占めることから、オオムギを食料とする馬牛などの飼料関連施設であったと推測される。

表1 国分遺跡の江戸時代の遺構から出土した種実

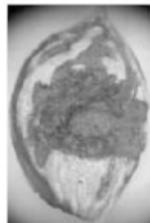
分類群名	出土部位／遺構	10号溝内	P115
モモ	核完形食痕	1	
	核半分	2	
	核破片	5	
ハクウンボク	内果皮	21	
イネ	炭化胚乳		1
オオムギ	炭化種子		15
カボチャ仲間	種子	7	
マメ科	炭化種子		1
不明	根茎	1	



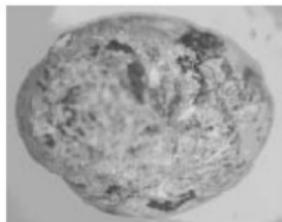
ハクウンボク（10号溝）



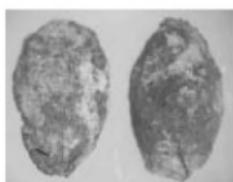
カボチャ仲間（10号溝）



モモ核（10号溝）



マメ科炭化種子（P115）



マメ科炭化種子（P115）



マメ科炭化種子（P115）

3 堤遺跡から出土した炭化物

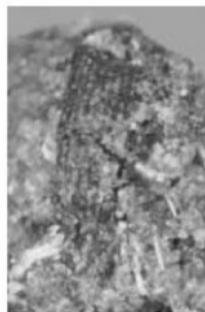
吉川純子（古代の森研究会）

堤遺跡は奥州市胆沢区にある平安時代の竪穴住居跡である。当時の食料や燃料材の利用状況を調査するため2号竪穴住居の竈内に堆積した土壌を採取し、試料約5kgを0.5mm目の篩で水洗し、残渣から同定可能な種実などを選別した。

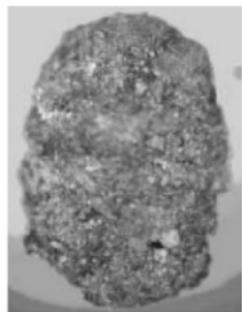
2号竪穴住居の竈3層からはイネの炭化胚乳3個およびイネの炭化穎破片1個を出土した。またやや大きな炭化材破片があり、2点を反射光型顕微鏡で観察したところ、コナラ属コナラ節であった。

本遺跡の竪穴住居から出土した炭化物はイネとコナラ属コナラ節材であり、これらは住居廃絶時に堆積したものと考えられることから、イネを食料とし、竈ではコナラ節材を燃料材として用いていたと考えられる。東北の山地から平野部にかけて分布している落葉広葉樹林にはコナラ節が多く生育しており入手しやすいことから、燃料材として用いていたと考えられる。

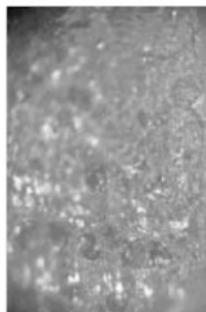
分類群	出土部位	竈3層
イネ	炭化穎破片	1
	炭化胚乳	3
コナラ属コナラ節	核破片	2



イネ穎片



イネ炭化胚乳



コナラ節横断面

4 昆虫同定（国分遺跡）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本分析調査では、国分遺跡（岩手県奥州市）の江戸時代の溝を対象として、土壤試料の洗い出しおよび昆虫遺体の抽出同定を実施し、当時の環境に関する資料を得る。

(1) 試 料

試料は、10号溝の底面より採取された土壤試料1点（1024.86g）と、選別済み昆虫遺体30片である。

(2) 分析方法

土壤試料からは、昆虫遺体をできる限り壊さずに抽出するため、試料を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して静かに水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体や昆虫遺体などを抽出し、個数を集計して一覧表で示す。

選別済み昆虫遺体および土壤試料から抽出した昆虫遺体の中から状態が良好な20片を対象とし、形態的特徴より同定を実施する。分析後は、乾燥を防ぐために昆虫遺体を水入りの管瓶で保管する。なお、同定・解析については、松本浩一氏（東京農業大学）の協力を得ている。

(3) 結 果

確認された昆虫遺体の分類群一覧を表1、土壤試料洗い出しおよび昆虫遺体の同定結果を表2に示す。選別済み昆虫試料30片は、昆虫遺体が18片と、植物の地下茎が12片である。昆虫遺体18片は、いずれも破片であり、特徴を有する形質をとどめていなかったため、種類判定が不可能であった。

一方、土壤試料1kgを洗い出した結果、昆虫遺体が143個検出された。この内、同定を実施した20片の昆虫遺体は、18片がコウチュウ目で占められ、ハチ目、ハエ目が1片ずつであった。

コウチュウ目では、セアカヒラタゴミムシの右上翅基部、ツヤヒラタゴミムシ属の左上翅基部、コモクムシ属の頭部、クワガタムシ科の左上翅、ヒメコガネの右上翅基半・前胸背板、スジコガネ属の上翅の一部・中胸腹板・後胸腹板、コガネムシ科の上翅、コシコメツキ属の右上翅基部、カツオブシムシ科の左上翅、カミキリムシ科の小楯板、ルリハムシ属の右上翅、カミナリハムシ属の左上翅、クチブトゾウムシ属の頭部、コウチュウ目の上翅、ハエ目の蛹、カリバチ類の頭部が検出される。

表1 昆虫遺体分類群一覧

コウチュウ目 Coleoptera
オサムシ科 Carabidae
ナガゴミムシ亞科 Pterostichinae
Dolichus属
セアカヒラタゴミムシ Dolichus halensis
ツヤヒラタゴミムシ属 Synuchus
ゴモクムシ亞科 Platynini
ゴモクムシ属 Harpalus
クワガタムシ科 Lucanidae
コガネムシ科 Scarabaeidae
スジコガネ亞科 Rutelinae
スジコガネ属 Anomala
ヒメコガネ Anomala rufocuprea
コメッキムシ科 Elateridae
クシコメツキ亞科 Melanotinae
クシコメツキ属 Melanotus
カツオブシムシ科 Dermestidae
カミキリムシ科 Cerambycidae
ハムシ科 Chrysomelidae
ハムシ亞科 Chrysomelinae
ルリハムシ属 Linaeidea
ノミハムシ亞科 Halticinae
カミナリハムシ属 Altica
ゾウムシ科 Curculionidae
ハナゾウムシ亞科 Anthomomus
クチブトゾウムシ属
ハエ目 Diptera
ハチ目 Hymenoptera
カリバチ類

(4) 考察

試料は、江戸時代初頭の溝埋積物から採取されている。土壤 1kg洗い出したところ、143片の昆虫遺体が含まれていた。溝埋積物であり、湿潤な環境であったこと、また静かに堆積したことなどが背景にあり、そのため堆積物中に昆虫片が多く含まれる結果となったと推定される。

検出された昆虫片の内、多くはコウチュウ目であった。コウチュウ目の内、7片がコガネムシ科であり、そのほとんどがスジコガネ類のものと思われる。中には、3片はスジコガネ属・ヒメコガネと同定されるものが認められる。これらの種類は、草地・耕作地の各種草本植物の根を幼虫が、葉を成虫が摂食し、農業害虫としても知られている。また、ハムシ科ルリハムシ属の一種およびカミナリハムシ属の一種も、草本植物の害虫として知られており、前者はヨモギ・イタドリ類を、後者はマツヨイグサ・タデ類の葉を摂食し、人為的環境に多くみられるものである。さらに、コメツキムシ科クシコメツキ属の一種は、草本植物の根を食害する。カツオブシムシ科の一種は、上翅の一部のみが検出された程度で確定できなかったが、貯穀害虫として知られる種である可能性が高い。これらの農作物や草本植物を食害するもの、貯穀害虫と思われるものなどが多い頻度で見出された。

一方、これら以外には、乾燥した草地環境に生息するオサムシ科のセアカヒラタゴミムシおよびゴモケムシ属の一種、林縁部などに生息するオサムシ科のツヤヒラタゴミムシ属の一種、クヌギ・ミズナラなどの優占する雑木林に生息するクチブトゾウムシ属の一種、クワガタムシ科の一種、カミキリムシ科の一種などが見出された。

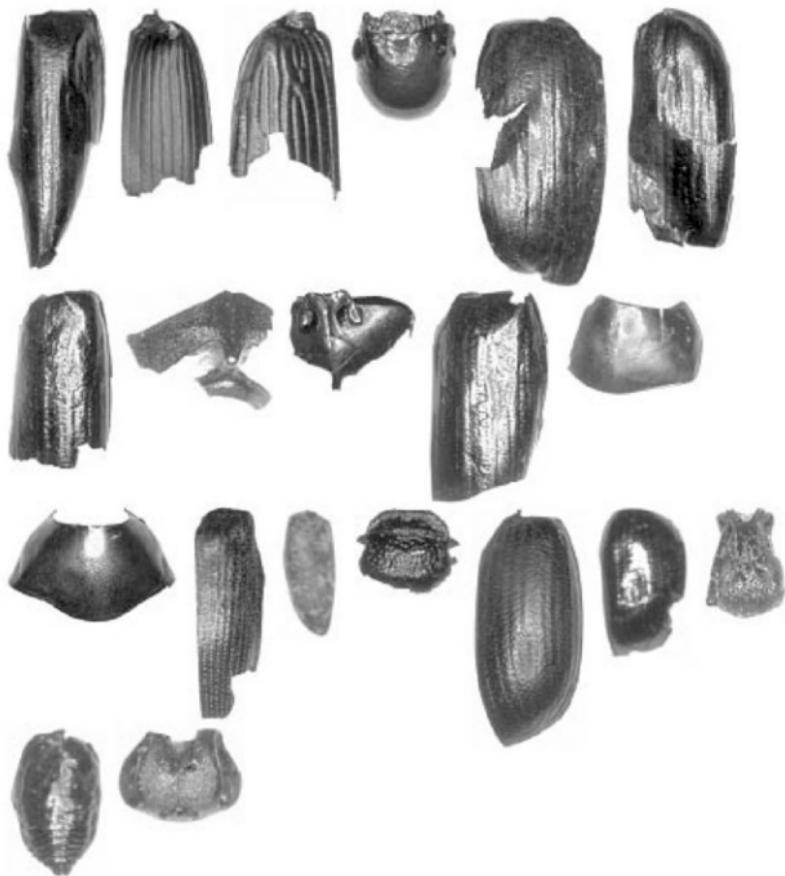
以上の結果、江戸時代初頭の頃、国分遺跡10号溝周辺域は、耕作地などの人為的な環境が広い面積を占めていたと推定される。出土昆虫には、双子葉草本類を食する種類が多く見いだされ、イネ科を摂食するものが見られなかった。したがって、水田地帯が広がっていたのではなく、畠地・草地・人里周辺のような開けた環境を反映している可能性がある。これは、通常多く出土する水生昆虫類が見られなかつたことからも示唆される。また、周囲には、ある程度の面積を持つ雑木林が存在していたものと思われ、コナラもしくはミズナラが優占していたものと推定される。

以上、昆虫の産状から遺跡周辺の環境について検討を行った。その結果、畠地・草地・人里周辺のような開けた環境であったことを示唆する結果が得られた。この点については、花粉分析、植物珪酸体分析、さらには種実遺体の産状を明らかにすることで、より詳細な検討が可能となるであろう。また、溝の埋積過程についても珪藻分析等によって検証する必要があると思われる。

表2 昆虫同定結果

試 料	検出物	検出個数	尾 虫 同 定 結 果					
			No.	目 名	科 名	分類群	部 位	備 考
土壤1024.86g	尾虫類	143片	1	コウチュウ目	カラガタムシ科	カラガタムシ科の一種	左上翅	
			2	コウチュウ目	不明	コウチュウ目の一種	上翅の一部	
			3	コウチュウ目	コガネムシ科	コガネムシ科の一種	上翅の一部	
			4	コウチュウ目	コガネムシ科	スジコガネ属の一種	上翅の一部	
			5	コウチュウ目	コメツキムシ科	クシコメツキ属の一種	右上翅基部	
			6	コウチュウ目	オサムシ科	セアカヒラタゴミムシ	右上翅基部	
			7	コウチュウ目	コガネムシ科	ヒメコガネ	右上翅基半	No.9と同一個体か?
			8	コウチュウ目	コガネムシ科	ヒメコガネ	前胸背板の一部	
			9	コウチュウ目	コガネムシ科	スジコガネ属の一種	後胸腹板	この部位での種同定は不能であるが、大きさからNo.7,8と同一個体の可能性が高い
			10	コウチュウ目	コガネムシ科	ヒメコガネ	前胸背板	
			11	コウチュウ目	オサムシ科	ツヤヒラタゴミムシ属の一種	左上翅基部	
			12	コウチュウ目	ハムシ科	ルリハムシ属の一種	右上翅	この属は食性でヨセギ・イタドリ類を摂食する
			13	コウチュウ目	コガネムシ科	スジコガネ属の一種	中胸腹板	
			14	コウチュウ目	オサムシ科	ゴモクムシ属の一種	頭部	
			15	コウチュウ目	カミキリムシ科	カミキリムシ科の一種	小顎板	
			16	ハチ目	不明	カリバチ鄭の一種	頭部	
			17	ハエ目	不明	ハエ目の一種	蛹	
			18	コウチュウ目	ハムシ科	カミナリハムシ属の一種	左上翅	マツヨイグサ類、タテ類を摂食する
			19	コウチュウ目	カブオブシムシ科	カブオブシムシ科の一種	左上翅	本科は狩獲害虫として知られる
			20	コウチュウ目	ソウムシ科	クチブトゾウムシ属の一種	頭部	コナラ・ミズナラなどを摂食
選別済尾虫	尾虫類	18片	不明	不明	不明	不明	破片	
	植物地下茎	12片						

図版 1



1. コウチュウ目の一一種 上翅の一部 (10号溝)
2. セアカヒラタゴミムシ 右上翅基部 (10号溝)
3. ツヤヒラタゴミムシ属の一種 左上翅基部 (10号溝)
4. ゴモクムシ科の一種 頭部 (10号溝)
5. クワガタムシ科の一一種 左上翅 (10号溝)
6. コガネムシ科の一一種 上翅の一部 (10号溝)
7. スジコガネ属の一一種 上翅の一部 (10号溝)
8. スジコガネ属の一一種 中胸腹板 (10号溝)
9. スジコガネ属の一一種 後胸腹板 (10号溝)
10. ヒメコガネ 右上翅基半 (10号溝)

11. ヒメコガネ 前胸背板の一部 (10号溝)
12. ヒメコガネ 前胸背板 (10号溝)
13. クシコメツキ属の一種 右上翅基部 (10号溝)
14. カツオブシムシ科の一種 左上翅 (10号溝)
15. カミキリムシ科の一一種 小橋板 (10号溝)
16. ルリハムシ属の一一種 右上翅 (10号溝)
17. カミナリハムシ属の一一種 左上翅 (10号溝)
18. クチブトゾウムシ属の一一種 頭部 (10号溝)
19. ハエ目の一一種 脚 (10号溝)
20. カリバチ類の一一種 頭部 (10号溝)

5 分析結果所見

(1) 炭素年代測定について

4号掘立柱建物と13号土坑出土資料の計2点依頼した。委託目的は近世屋敷地構築物の年代の把握である。E区西端部は中世末～近世初頭の遺物が出土しており、遺物が出土しなかった遺構について、同時性の検討を行うためである。結果は、遺物の出土していない4号掘立柱建物の年代が中世後半(1σで西暦1521～1591年)、また、近世前半の唐津産陶器が出土した13号土坑も中世～近世初頭の年代が得られた。

中世後半から近世初頭は年代測定較正曲線がほぼフラットに近い状態となり、範囲の広い確率論値が示されるが、国分遺跡試料も同様であった。

本書では建物型式、配置、出土遺物から、2・4号掘立柱建物と12号土坑が同時期、1・3・5号掘立と13号土坑が同時期と捉えた。2号掘立は南北朝以後に多い建物型式で、1号掘立柱建物は近世前半に多いようである。4号掘立柱構成のP145出土柱材の数値は、1σで西暦1521～1591年と1621～1641年が示された。可能性としてはどちらの数値も有り得るが、前者の年代のほうが、想定される建物配置の同時性を支持する結果である。一方、13号土坑は配置と出土遺物から近世前半と考えられるが、測定値は1σで西暦1446～14904年と1603～1610年が示された。13号土坑は井戸状土坑であるが、井戸廐絶時に人頭大礫、廐材、近世陶器が投げ込まれて埋没したと考えられる。測定試料の木片は建物廐材と考えられるため、13号土坑と同時期の1・3・5号掘立柱建物の部材と考えるのが妥当である。ただし、これが2・4号掘立柱建物の部材を再利用して近世期にも使用していたとすれば15世紀後半の年代も無視できない。13号土坑出土の測定試料は板材と考えられ外皮近くではないため、15世紀の年代が得られても不思議ではない。いずれ近世陶磁器の存在から13号土坑の廐絶は近世期と考えられる。

(2) 炭化種子同定の結果について

国分遺跡の炭化種子は、中世末～近世初頭の10号溝底面に構築された1号池状遺構の土壤から採取された。種別では食用果実の種子としてモモ、カボチャ仲間が検出された。また、ハクウンボクも検出され、溝周辺に自生したものではないかとの考察をいただいた。10号溝は水路、10号溝内1号池状遺構は生糞と考えられるため、ここが食物残渣の捨て場であったばかりでなく、食物種子を養魚用餌として使用したと想定される。ハクウンボクは自生の可能性もあるが、10号溝付近に中世末～近世初頭の屋敷の存在が想定されることから、庭木として觀賞用に植えられた可能性も考慮したい。現在では少ないものの、ハクウンボクの実から採取される油脂分で蠟燭造りが行われている。蠟燭原料としてはハゼの実が有名であり、ウルシも利用される。仮に蠟燭作りが行われていたとすれば、中世末から庶民にも浸透し始めた市での売買か、国分遺跡隣接の中世後半開基の宝寿寺への納品も想定される。

P115採取土壤からはイネ、オオムギ、マメ科等の穀物種子が検出された。その評価としてオオムギを食料とする馬牛などの飼料関連施設の可能性を指摘していただいた。P115を構成要素とする建物は確認できなかった。柱穴の年代は不明であるが、屋敷地内の牛馬の存在については再検討を必要とする。

堤遺跡2号竪穴住居カマド内堆積の土壤サンプルからは、燃料材としてのコナラ属コナラ節と、穀物としてのイネが検出された。平安時代初頭の胆沢郡内集落における一般的傾向と言える。

(3) 昆虫化石同定分析について

国分遺跡D区の10号溝底面の土壤と選別済の昆虫遺体30片について同定を行っていた。室内整理作業において選別作業を行った資料については、コガネムシの羽根と思われる資料が多数存在した。しかし、今回それらの資料は同定不可能との報告であり、資料の取り扱いについて採取・保管方法の再検討を要する結果となった。今後の調査では安易に土壤洗浄せず、土壤サンプルでの同定委託を徹底したい。

土壤サンプルについては、多量の昆虫類が検出され、コウチュウ目が主体でハエ目、ハチ目も見つかった。パリノ・サーヴェイ株式会社による考察では、検出された昆虫類の検討から、10号溝付近が水田ではなく、畑地・草地・人里周辺などの環境と想定されている。また、雑木林の存在についても周辺に存在する可能性を指摘された。

今回の発掘調査で、近世屋敷が複数存在することが判明した。昆虫同定結果の考察による「人里周辺」との想定は、屋敷地や屋敷地内の庭園の存在が想定される調査結果と調和的である。また、「雑木林」は、現在でも遺跡周辺に点在しており、圃場整備事業以外の極端な大規模開発が行われていない本遺跡周辺では、近世期にも雑木林の点在する状況であったとの想定は的外れではあるまい。なお、地元の農業従事者の方々の話では、宅地開発を行う際に、かつては水田を宅地に変えることは稀で、雑木林（地元では「ヤマ」と呼ぶ）を切り開いていたとのことである。生業と直結する水田耕作地を大切にしていた証拠でもあろうし、雑木林を宅地に変えた方が、水田の軟弱地盤の改良よりも作業効率が良かったのかもしれない。また、冬季に奥羽山脈から吹き下ろす強風の対策として、雑木林を取り込む形で居宅を構えることは合理的でもある。したがって、雑木林の存在は否定されるものではなく、当地域の生活に密接不可分の存在と考えられる。また、10号溝から検出された炭化種子のなかに、カボチャ仲間、マメ科種子が含まれていたことから、周辺に畑地・草地の存在についても肯定的である。

さて、今回の調査では多数の溝が検出された。野外調査時は、9・10号溝が水路、10号溝内の1・2号池状遺構が庭園池か生糞ではないかと考えていた。そして、9号溝は屋敷地を廻り、10号溝から引水していると考えていた。池状遺構を生糞と想定することと、本遺跡周辺が水量の豊富な場所であることを根拠として、付近に水田耕作地が展開し、中山間地に見られる水田内でのコイ科養殖の実施、すなわち、蛋白源獲得としての養魚をこの地域で行っている可能性について検討することが、野外調査段階での課題であった。しかし、今回の昆虫分析の結果からは、明確な証拠を見出せない。水田環境でないことが判明したことと、少なくとも水田養殖方式（生糞で育てる→水田に放す→秋に水田の水を抜くときに捕獲のサイクル）の養魚については否定される。今回の分析結果からは、例え1・2号池状遺構で魚類を飼育していたとしても、小規模であるか、庭園池での觀賞用の可能性が高い。

VII 調査のまとめ

1 国分遺跡の調査成果

検出遺構は、第Ⅲ章第1節の記載に同じく、陥穴状土坑13基、掘立柱建物跡5棟、土坑18基（内7基が井戸状土坑）、溝20条、柱穴170個である。遺構は、陥穴状土坑が構築された縄文時代～古代以前と、掘立柱建物、溝、井戸状土坑が構築された中世末以降に大別される。

出土遺物は、土器・陶磁器215点、金床石2点、磨石3点、砥石10点、火打石1点、石鐵2点、剥片16点、石核2点、土製品8点、金属背製品12点、木製品20点、ガラス製品2点、炭化種子、昆虫化石である。

(1) 陥穴状土坑

遺構の構築年代

13基調査した。1・3～6号の隅丸長方形、2号：円形、7～13号：溝状の3種に分類される。遺物は伴わない。本邦のこれまでの調査成果では、円形は旧石器時代から存在しており、縄文時代前期までは確実に存在している。奥州市胆沢区宮沢原下遺跡では、この形態の堆積土にTo-aと考えられる黄褐色火山灰のほか、数は少ないがTo-aも確認されたことから、円形が特定の時期に限定されているわけではなく、罠獵を行う上で普遍的な形態であったと考えられる。溝状は縄文後期～晩期によく見られ稀に縄文土器が伴い、大規模な狩場では複数の列状配置となることもある。また、本遺跡では確認されなかつたが、奥州市胆沢区宮沢原下遺跡で、堆積土内にTo-aを含む底面長方形で底面隅に逆茂木痕をもつ陥穴状土坑が多数調査されている。これらの構築時期はTo-a降下前の平安時代前半頃と考えられている。では、本遺跡の隅丸長方形の主体時期はどうであろうか。別形態の陥穴状土坑の時期を除いた弥生～奈良時代の可能性が考えられるが、宮沢原下遺跡でIVB1b類と分類されたこの形態は、年代測定成果を踏まえて縄文時代～平安時代とされている。本遺跡は、宮沢原下遺跡よりも集落跡遺跡に近く、平安時代の須恵器も表探されている。遺跡内に獸道が存在しなかつたとは言い難いが、宮沢原下遺跡で確認されたTo-aを包含する陥穴状土坑はなかつた。To-a包含の陥穴状土坑の調査区外での存在を否定できないが、平安時代後半以降の本遺跡周辺は、すでに集落が形成され、大規模な罠獵を行っていなかつたと考えられる。したがって、隅丸長方形の陥穴状土坑は本遺跡においては、平安時代前半以前の構築と考えてもよいだろう。

隅丸長方形の陥穴状土坑底面の副穴

隅丸長方形の陥穴状土坑は、底面中央の長軸線上に径10cm程の副穴が2個一対設置されている。なかには径10cmの設置個所に径5cm程度の3～4個の副穴が設置されているものもある。これらの穴は底面とほぼ垂直に作られているが、底面に杭數本を立て、その上に台を設置するための施設である。鹿・イノシシなど4足動物が陥穴に落ちた時、足が底面に着かず体を浮いた状態にするための仕掛けと考えられている。

陥穴状土坑の配置

調査区の範囲内ではあるが、7～10号（溝状）、11～13号（溝状）、3～6号（隅丸長方形）が列状配置と考えられる。これらの配列は崖線と並行しており、崖線上を移動する狩猟対象獣を狙って設置されたと考えらえる。

(2) 掘立柱建物

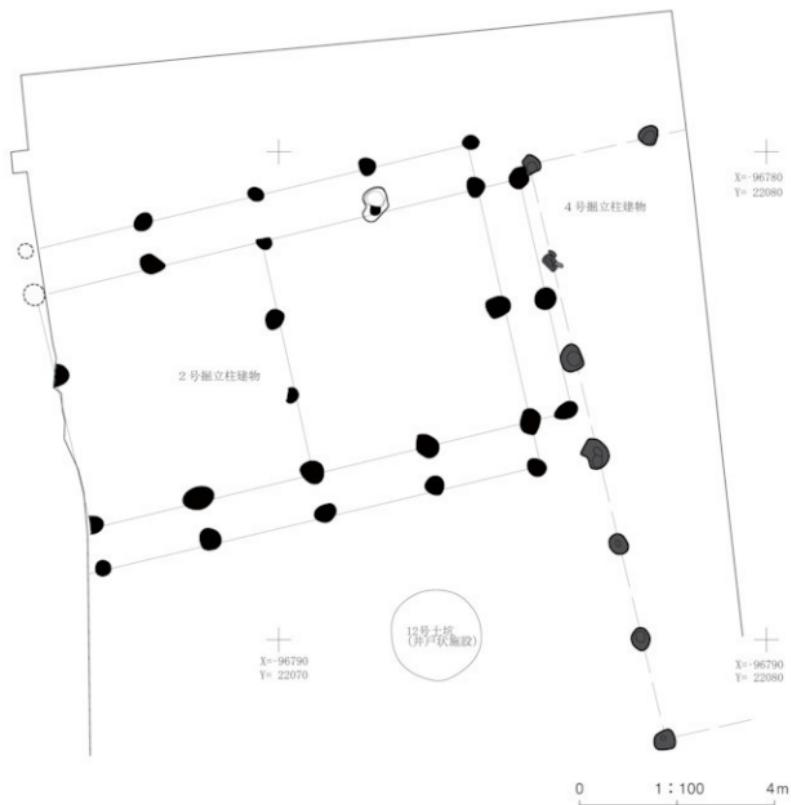
掘立柱建物は5棟検出した。全て中世後半～近世初頭と考えられる。調査区外にまで遺構範囲が及ぶものが多く、全体形状の判明した建物は3号掘立柱建物のみである。各建物跡の構造、時期、主な出土遺物については以下の表のとおりである。

掘立柱建物名	構造	時期	主な出土遺物	備考
1号掘立柱建物	4以上×2間の側柱建物に二面庇が付く主屋で、切妻造。	中世末～近世初頭	唐津産陶器皿、瀬戸産天目碗、中国産磁器皿	2号掘立柱建物を切る。 部屋数 2部屋以上。
2号掘立柱建物	4以上×2間の側柱建物に三面庇が付く主屋で、切妻造。	中世後半		1号掘立柱建物に切られる。 部屋規模15×16尺が2部屋か。
3号掘立柱建物	3×2間の小屋で切妻造。	中世末～近世初頭		配置から1号掘立柱建物に付属する。
4号掘立柱建物	6×2間以上の小屋で、切妻造。	中世後半	柱材	配置から2号掘立柱建物に付属する。柱材でAMS年代測定実施。
5号掘立柱建物	3×2間以上の建物に一面以上の庇が付く小屋で切妻造。	中世末～近世初頭		配置から1号掘立柱建物に付属する。

検出された5棟は、配置から2グループに分けられる。①主屋（2号掘立柱建物）+小屋（4号掘立柱建物（第53図）②主屋（1号掘立柱建物）+小屋（3・5号掘立柱建物）（第54図）である。①の建て替えが②と考えられる。これに井戸状土坑が付属する。配置から②+13・14号土坑、①+12号土坑である。また、VI章で指摘されたE区西端部範囲での牛馬飼育の痕跡は、掘立柱建物群の曲屋風配置案を支持するものである。3～5号のいずれかは家畜小屋であった可能性も考えられる。これらのセット関係から、E区西端部は屋敷地であったと考えられる。また、これらが広岡街道（旧仙北街道）沿いに位置することから、屋敷地への入口は街道側、すなわち南側にあったと推定される。なお、現街道までの距離はE区から50mほど南にある。

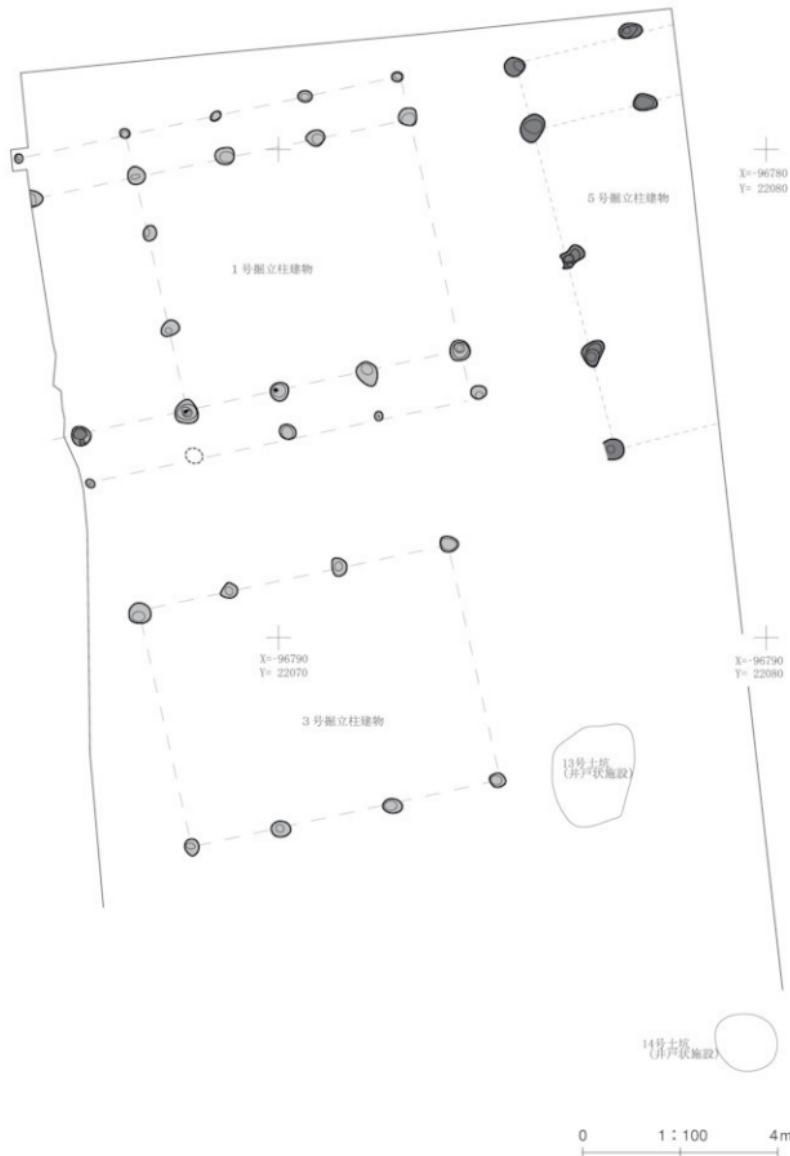
遺物を伴わない建物もあるが、主屋+小屋のセット関係の根拠は、柱穴の切り合い関係のほか、建物軸、柱間寸法（本書は1尺=30.3cm換算）にある。5棟全ての梁間の柱間寸法は8尺を基準とする。①を構成する主屋（2号掘立柱建物）は、庇幅3尺、桁7.5尺、間仕切5.25・5.5、10.5尺を使う。5寸単位である。同じく①を構成する小屋（4号掘立柱建物）は6.5尺を使い、やはり5寸単位である。一方、②を構成する主屋（1号掘立柱建物）は庇幅3尺、桁6.3・7.5尺、間仕切4・6.5尺を使う。5寸単位のほかに桁に新たに6.3尺が使われている。また、②を構成する小屋（3・5号掘立柱建物）では庇幅4.5尺、桁6.5・7.5・9尺をつかう。①に比べて基準尺が増加している。最初に建てられた①は、基準尺を順守した規格性の高い建物である。桁の柱間寸法は主屋が一貫して7.5尺、小屋が6.5尺である。仕切られた部屋も2部屋とも15×16尺が想定される。一方、①の建て替えと考えられる②の主屋では、間仕切を挟んで、6.3尺と7.5尺が使われる。①の主屋よりも部屋規模が大きくなり、基準尺も増えている。規格性の強い①→規格に柔軟な②への移行といえる。中世後半に規格性の高い建物群に住んでいた屋敷居住者が、中世末以降に多種の基準尺を柔軟に選択して立替えた結果が②建物群との想定も可能であろう。

さて、1号掘立柱建物から天目茶碗が出土しており、居住者による茶の嗜みが想定されることから、

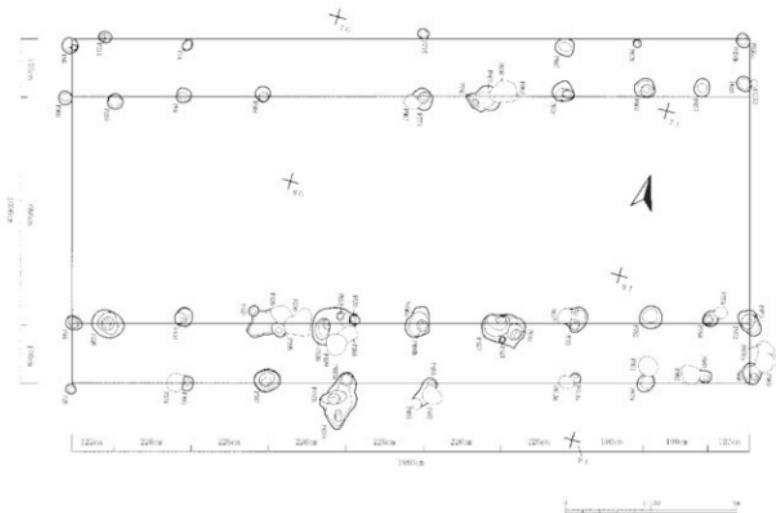


第53図 国分遺跡2・4号堀立柱建物配置案

建物内外に喫茶空間が存在した可能性がある。喫茶空間、すなわち茶室の可能性について、一応1号掘立柱建物東側部屋で検討してみる。1号掘立は柱間寸法6.3尺が建物東側で使用されている。6.3尺 ≈ 約191cmは太閤検地において1間とされ、江戸時代に入ると諸藩がこれを廢して1間 = 6尺としたが、仙台藩は6.3尺を検地に使用しつづけ、建築にも「間延び尺」と称して利用されることがあった（前沢町史1974）。現在でも建築や畠サイズにおいて1尺 = 30.3cm換算で中京間を6尺畠割り、京間を1間6.5尺（畠サイズは6.3×3.15尺）、江戸間を6尺柱割り（畠サイズは5.8×2.9尺）とされている。江戸時代に入ると京都を中心に畠枚数を先に決め後から柱配置を考える畠割りの建物が流行する。これを単純に1号掘立柱建物東側部屋に当てはめてみると、京間畠15畠分敷き詰められるものの、建物桁方向に柱分の隙間がないので実際の畠敷きは困難である。また江戸間畠でも端数が大きい。さらに、間仕切り北側の柱間寸法4尺範囲を床間と仮定しても京間畠敷きでは端数が大きい。したがって1号



第54図 国分遺跡1・3・5号堀立柱建物配置案



第55図 北上市田代遺跡 2号掘立柱建物

掘立柱建物が豊割り間取りとは断定しがたく、取りあえず前沢町史記載の「間延び尺」使用の建物と捉えることはできる。結論として、今回の調査データからは1号掘立柱建物内に豊敷きの茶室を想定できない。調査区外に別の建物が存在する可能性もあり、さらなる検討が必要である。

北上市田代遺跡の掘立柱建物

岩手県内の中世末～近世初頭の民家調査事例は増加している。仙台伊達藩領の中世末～近世初頭掘立柱民家主屋に絞っても北上市田代遺跡、西和賀町白木野Ⅰ遺跡、北上市岩崎台地遺跡群、一関市千厩町要害館跡、奥州市東館Ⅱ遺跡、平泉町下構遺跡、同泉屋遺跡などがある。このうち、本遺跡と類似する建物が田代遺跡で見つかっている。

田代遺跡は秋田県～北上市を結ぶ東北横断自動車道秋田線沿いの北上市江釣子に所在する。中・近世屋敷跡で、掘立柱建物が16棟見つかっている。このうち、西側建物群として報告された1～4号掘立柱建物が主屋と想定される。出土遺物から3・4号掘立柱建物（15～16世紀）、1・2号掘立柱建物（16世紀～17世紀初頭）である。遺物の年代と建物型式からは4→3→2→1号掘立柱建物で、2・3号掘立柱が中世建物によく見られる二面庇建物、1号掘立柱が近世的な間仕切りのある建物で17世紀後半以降に出現する型式である。中世後半の3号掘立柱は桁行基準尺として、3.3・5.3～5.4・6.6・8.6～8.7尺を使っており3寸単位と考えられる。4号掘立柱の桁行基準尺として、7・8・10・14尺と1尺単位の規則性がある。

さて、16世紀後半～17世紀初頭の遺物が出土した2号掘立柱建物は、桁行基準尺として6.3・7.5尺が使用され、国分遺跡1号掘立柱建物と同基準である。梁間は、国分1号掘立柱が22尺（身舎16尺）、田代2号掘立柱が33尺（身舎22尺）である。なお、5.5尺は、国分1号掘立柱では間仕切りに、田代2号掘立柱では庇に使われている。建物規模こそ違うが、使用された柱間寸法や出土遺物の年代、二面庇建物で建物東側

に桁6.3尺が使用されることも一致している。注目したいのは、国分1号掘立の6.3尺を桁行に使う東側の部屋とほぼ同規模の範囲が、田代2号掘立東側に存在することである（第55図）。（6.3尺+6.3尺）×22尺で、京間疊14畳分で、国分と同じく柱幅を含めると範囲内に畳が納まらない。建物東端部の4尺幅は庇もしくは床間の可能性がある。

田代遺跡西側建物群に関しては、最初の建物が15世紀後半～末として、5棟分の建替えが確認できた。各建物の存続年代については不明だが、近世民家主屋を1棟30～40年の存続と仮定すると、この建物群範囲が200年近く利用されたと想定される。このなかで、間延び尺を使う田代2号掘立柱建物の構築時期を太閤検地以降と過程すると、4号掘立（15世紀末頃）→3号掘立（16世紀前半～後半）→2号掘立（16世紀末～17世紀前半）、1号掘立（17世紀後半）の変遷となる。以上のことから、田代遺跡2号掘立と国分遺跡1号掘立は、同一時期に同一基準で建てられた建物と考えられる。

（3）土 坑

時期不明の土坑、中世末～近世初頭の井戸状土坑、近世後半以降の井戸状土坑などの調査を行った。このうち、特徴のあるのは井戸状土坑である。7基調査した。周辺住民によれば、川端・堤遺跡のある水沢高位段丘面上では7m程度掘ることが多かったという。これに対し、現代との比較となってしまうが、本遺跡の井戸状土坑は、底面まで調査した土坑の場合、検出面からの深さが14号土坑：190cm、15号土坑：146cm、18号土坑：245cmでそれほど深くない。特に夏場には深さ1m程度で壁から激しく湧水した。一般に扇状地や台地では段丘崖で湧水がよくみられる。福原面と水沢高位段丘面との境界の崖線下である。国分遺跡周辺での水量の豊富さが窺える。

中世末～近世初頭の井戸状土坑の7・12～14号土坑には、大形礫や建物部材が投げ込まれ埋められている。これに対し、近世後半以降の15・18号土坑は礫が少ない。前者は井戸枠として石組がなされていたかもしれない。

（4）溝

溝は、7～10号溝（中世末～近世初頭）、2・3・12号溝（近世後半）、4～6・11・13・14・16～20号溝（近世末～現代）、1・15号溝（時期不明）の計20条の調査が行われた。

中世末～近世初頭

7～10号溝は、中世末～近世初頭の屋敷地北側に設置されたと考えらえる。10号溝の底面には1・2号池状遺構、東側隣接地に11号土坑が設置されていた。切り合い関係はIII章で解説したとおり、①7・8・10号溝と1・2号池状施設設置→②10号溝の再整備により1・2号池状遺構の埋没後に9号溝の設置→③9・10号溝の再整備時に11号土坑設置と考えられる。これらの溝の構築・埋没・再整備は、数枚セットで入手したと考えられる唐津産陶器折縁皿の破片が各遺構で出土していることから、短期間に行われた可能性がある。10号溝に付属する11号土坑は、後述の池状遺構と性格が異なり、10号溝より浅く底面が平坦である。洗場のような施設であったと想定される。

池状遺構の性格

1・2号池状施設は、III章で解説したとおり性格不明であるが、状況証拠から庭園池と養魚施設の可能性を検討した。1号池状遺構は底面が平坦で、平面形が隅丸長方形、開口部東側縁に幅の狭い周溝が廻る。明らかな人工構築物である。この周溝に網や板等の何らかの仕切りを設け、水流を完全には遮断しないように、設置されたのではないか。水流を完全に遮断するには10号溝の規模と1号池状

遺構の規模がミスマッチであるから、緩やかな水流が確保されていたと考えるほうが自然である。これを単なる引水施設とえることもできるが、池状遺構にカボチャ仲間の種子・モモ種子があったが、種子が単に食糧残渣として廃棄されたのではなく、飼育魚用の餌として使用されたと可能性はあるだろう。また、池状施設では多くの炭化種子・昆虫化石が出土したのに対し、9・10号溝からは微量の出土であったことは、水流を完全に遮断していないことによって生じた遺物分布と考えられる。VI章 昆虫同定分析によって、水田環境ではなく、畑地、草地、人里周辺で雜木林が存在する環境であった可能性が指摘された。遺構の分布からみても10号溝内池状遺構は、井戸に近接しており屋敷地内あるいはその周辺に設置された施設であることから、単なる引水施設ではないと考えられる。さて、内陸山間地農村において、蛋白質資源獲得手段のひとつとして、コイ科淡水魚の水田内の飼育は珍しくない。現代でも山間地での淡水魚飼育は、沢を堰き止めて水流を確保しながら、段々畑のように連続した生糞で区画するものがある。各生糞の下流側に網や板仕切りなどを設置して、養魚の行動範囲を制限しつつ水流を確保するスタイルである。コイ養殖は、ため池養殖、池中養殖、網いけす養殖、水田養殖などの形態がある。また、池中養殖では、給水状態によって、止水式、流水式、循環過式などの方法がある。10号溝及びその付属施設の1・2号池状遺構は、もし養魚施設であれば流水式の池中養殖方式の痕跡であろう。

埋没による廃棄と再整備

10号溝は1・2号池状遺構とともに、1度埋没している。その後、池状遺構は再整備されることなく溝だけ再整備され、継続使用されている。最初の埋没時に昆虫化石、炭化種子も混入している。このことから、水路（10号溝）と池状遺構は昆虫（コガネムシ科）が水辺で暮らせる環境の時期、夏～秋ごろに埋没したのではないだろうか。大雨・台風等による水害が原因であろうか。また、炭化種子についても、収穫期が夏から秋頃の植物種子である。この時期に池に蒔かれた餌の残存物が埋没したものと考えられる。

（5）掘立柱建物の年代と歴史的環境

掘立柱建物の年代

E区西端の遺構からは、16世紀末～17世紀前半の唐津産陶器、中国産磁器染目付皿が出土している。このうち、E区西端は5棟の掘立柱建物跡が重複しており、少なくとも2時期に分けられる。2・4号掘立柱建物→1・3・5号掘立柱建物である。1・2号掘立柱建物は南北朝期以降に多い底部に隅間を持たない形式であり、中世後半以降と捉えうる。2号掘立柱建物は、P81・82・83・84は、柱の抜き取りによる平面形状ではなく、立替えによるもの可能性がある。桁と同軸にP111・113・115・117が位置し、あたかもP111・112、P113・114、P115・116、P117・118のセット関係があるように見える。立替え時に補強のために設置された可能性も否定できない。仮にE区西端部建物の存続を1時期20年程度と少なく見積もっても、建て替えを考慮すれば、合計約60年程度存続していたことになる。これを出土遺物の年代の中世末～近世初頭にあてはめると1590年～1650年とすれば、戦国期から伊達藩臣飯坂家が前沢に退転するまでの期間にほぼ相当する。建物の構築と廃絶時期は、飯坂家家臣の居住と退去に求められると仮定すると、2号掘立柱建物が寛永11年（1634年）以前で、1号掘立柱建物が、それ以後と想定される。

国分遺跡付近の有力者

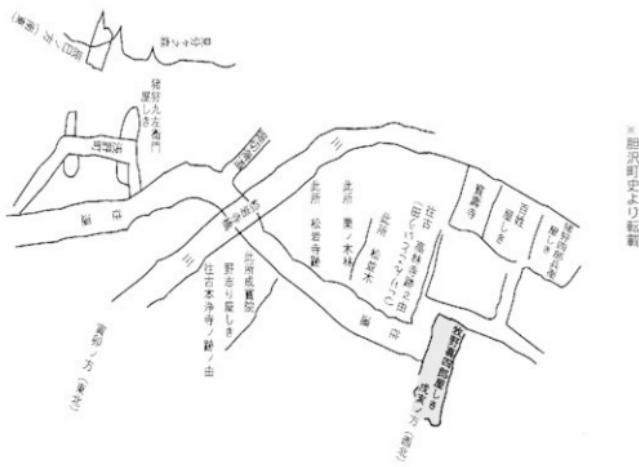
胆沢町史・前沢町史・水沢市史の記載を国分遺跡関連に絞って記しつつ私見を述べる。中世には金ヶ崎から胆沢・前沢一体を葛西家家臣の権山氏が治めていた。本遺跡には、掘立柱建物群から16世紀

末～17世紀初頭の陶磁器が出土していることから、中世末に櫻山氏系の有力者の居住が想定される。おそらく、有力者は中世城館として登録されている広岡城に居住していたのではないか。国分遺跡内の建物にはその家臣、もしくは隣接する宝寿寺関係者の居住が想定される。広岡城一帯は、伝承によると「城岡」であったものを伊達政宗巡察時（2代藩主忠宗との説もある）に広岡と改名したとされる。広岡城は近世期に伊達家家臣の飯坂氏が居住し、それ以後飯坂館として伝わっている。

天正19年（1591年）以降、胆沢郡は伊達氏の支配が及び、胆沢郡は水沢城に天正19年～慶長9年まで白石宗実・宗直、慶長12年～元和2年まで柴田宗朝、元和2年～寛永5年まで石主田宗頼が入り、寛永6年からは留守伊達家が知行することとなる。近世前期は群内での家臣配置換えが頻繁に行われている。水沢には、元和2年（1616年）飯坂家と関係が深い石主田宗頼が、国老（奉行）として入る。また、石主田家と姻戚関係となっている桑折家で嫡子のないことから、石主田宗頼が桑折家を継いだ。桑折家と姻戚関係の飯坂家は、伊達藩祖政宗の側室である飯坂局が、秀宗（宇和島藩祖）と宗清を生む家柄であったが、飯坂家を継いだ宗清に子がなく、桑折家から宗頼の甥にあたる定長（後に宗長）を迎えて飯坂家を継がせた。寛永11年（1634年）、飯坂定長（のちの出雲守宗長）は飯坂館（広岡城と同所とされる）に居住することとなる。飯坂家は前沢所替えになる万治2年（1659年）までに家臣300人、250貫文（2500石）賜っていた。飯坂家退転後の国分遺跡周辺は、延宝3年（1679年）頃まで成田氏が知行している。飯坂家は寛文11年（1671年）に起きた伊達騒動によって、原田甲斐斐翁輔（飯坂宗長の妻の弟）の反逆縁座を問われ、取り潰しなった。この歴史的背景と本遺跡の遺構群との関わりは判然としない。本遺跡範囲内にはE区西端屋敷地居住者とD区屋敷地居住者が中世末～近世初頭にいたことになるが、D・E区屋敷地はその継続性を考慮すると、飯坂家による広岡の知行以前から居住しており、飯坂家家臣とは異なる可能性がある。D区居住者については、飯坂家知行以後も居住したか現調査区範囲だけでは判断できない。

国分遺跡は、広岡街道（旧仙北街道）沿いに存在し、街道を挟んで南側に曹洞宗の宝蔵山宝寿寺（永徳寺末寺）がある。宝寿寺は幕末の広岡地区の領主国分氏の菩提寺であるが、開山は弘治元年（1555年）とされる。寛政2年（1790年）には本堂、庫裡、参門を建てたと胆沢町史にある。また、近世期の道路や寺領の正確な位置は定かでないが、胆沢町史掲載の都鳥村猪狩四郎兵衛屋敷位置図（第56図）（元文三年十一月六日記の岩谷堂町猪狩宇平氏蔵文書の模写図）によれば、宝寿（寶壽）寺の北西の国分遺跡範囲に「牧野喜四郎屋敷」が位置する。牧野家は牧野信濃を祖とし、伊達政宗代に召しだされ、中之間番士となる。信濃の嗣子景久は寛永十七年（1640年）に納戸役にあげられ、同年胆沢郡代官となる。景久の嫡子景任は貞享元年（1684年）江刺郡代官となる。牧野家は景任→景春→喜四郎行景→景秀→景位→景道と家督が移るが、天明の飢饉（1782～1788年）によって、広岡の中屋敷に移住している。以後、これが牧野屋敷として伝わる。原典に当たっていないので真偽はわからないが、第56図の牧野喜四郎屋敷位置は元文三年（1738年）の文書記載であるから、天明年間以前に牧野家知行地及び屋敷地が広岡にあった可能性も考えられる。都代官は、仙台藩の群行政をつかさどる職務のひとつで、ほぼ仙台に常駐していた群奉行の職務を代行する立場にあり、地元に居住することが多いようである。このため、牧野家も胆沢郡内に居を構えた名家であったと考えられる。広岡付近は、1640年の景久の胆沢郡代官職のころに取得したのであろうか。絵図面によれば、牧野屋敷は広岡街道（旧仙北街道）がクランク状に折れ曲がった場所に位置する。昭和23年の米軍撮影航空写真などを参考にすると、E区東側が牧野屋敷の一部にあたる可能性がある。18世紀末～19世紀前半の井戸状土坑出土資料は牧野家所有物だったかもしれない。

元禄十二年（1699年）国分館に住む源蔵重信が召出しの列に加えられたことが記録にある。国分重



第56図 近世前半の遺跡地周辺図

信は寛永20年（1643年）に知行地を召しあげられて仙台城下追放となつたが、延宝3年（1675年）には城下御免となつた。重信は、城下追放中に親戚の飯坂氏を頼つて広岡に移り、国分館に住んでいたのではないかと胆沢町史では推測している。なお、国分家は明治2年の廃藩置県まで広岡に住む。

以上のことから、国分遺跡周辺は、中世末から寺院と中世武士の居住地、近世期には伊達藩臣の知行地に、仙台藩の郡代官を務めた家柄の牧野家の屋敷地があつたと理解できる。そして、この地の藩臣は、16世紀末～17世紀前半には所替えによって何度か交替していたが、18世紀以降は国分氏が明治時代まで住み続けていた。

（6）出土陶磁器

中世末～近世初頭（16世紀末～17世紀初頭）

当該期は、磁器は中国産、陶器は唐津産・瀬戸大窯産の流通量が多い。磁器は明朝末期～清朝初頭の染付が主体で、1610年代以後、肥前の操業により国産の流通が増加する。唐津産陶器は、通説では文禄・慶長の役で朝鮮より連れてこられた陶工たちの技術とその技術の受容によって1594年以降にはじまつたとされているが、1580年代にはすでに窯元が成立していたらしい。美濃志野焼もほぼ同時期とされる。出土した建物を見ると、古い型式の2号掘立柱建物からは遺物が出土しなかつたが、その立替えと考えられる1号掘立柱建物から、中国産染付皿、肥前産磁器と瀬戸・美濃産陶器が出土している。建物の変遷は前記2・5項で解説したが、おそらく、2・4号掘立柱建物の時期に入手した陶磁器類は、廃棄されることなく1・3・5号掘立柱建物の時期にも利用されたと考えられる。そのため、古い2・4号掘立柱建物からは遺物が出土しなかつたのではないだろうか。

唐津産陶器は、D区の7号土坑、8～10号溝や検出面から、絵唐津折皿（10・12、35、38～40、64）が出土している。これらは草花文を描き、胎土目がみられる。数枚セットで遺跡内搬入され、使用、廃棄に至つたものと考えられる。ほかに、数枚セットとみられる資料は43～45があり、10号溝から出土している。胎土から判断したが、志野風の椀・皿類（2、3、7、23、31、42、62）があり、7は

破断面に漆接ぎ痕跡がある。漆接ぎ技術は、近世以降の資料によく見られる。入手時期が中世末で補修が近世期であろうか。

瀬戸大窯産陶器はD区の10号溝出土の37は綠釉の小皿で、外底面に砂目がみられる。同じく10号溝から出土した36は、器形は天目茶碗風だが白釉である。4は1号掘立柱建物を構成するP71から出土した天目茶碗である。

肥前産磁器は、P88（1号掘立柱建物跡）から5が、P93から6の碗が出土している。

近世前半（17世紀～18世紀前半）

瀬戸・美濃系陶器は2点ある。13は13号土坑出土の椀、14はE区カクラン内から出土した皿である。肥前産磁器の15は16号土坑出土の碗で、53・55は10号溝出土の染付碗である。

近世後半（18世紀後半～19世紀前半）

瀬戸・美濃系磁器の30は3号溝出土の碗である。大堀相馬産陶器の9はE区西端部出土の椀、18・19は15号土坑出土の皿、21は15号土坑出土の仏飯器、56は12号溝出土の椀である。E区東側の暗渠検出面から65の仏飯器、68の椀が出土している。

東北産陶器の65・67・69は暗渠検出面から出土した。

近世末～近・現代（19世紀後半以降）

肥前産磁器の33は型紙摺りの染付碗で、9号溝堆積土上部から出土した。

（7）鉄製品と使用石器

鉄製品は釘、刀子、火打金等、石器は砥石、磨石、金床石、石核、火打石片、石鎌が出土した。中世末～近世初頭の遺物としては釘、火打金、砥石、金床石、石核（火打石主材）、火打石片である。いずれも、鉄製品の製作に関わる道具類である。金床石の存在は、鍛冶作業場の存在が考えられる。

（8）土 製 品

土人形（86～91）と灯籠（92・93）がある。いずれも18～19世紀前半の遺物を伴う土坑から出土した。このうち、灯籠について取り上げる。いわゆる草屋型灯籠である。蓮屋型、葛谷屋型とも呼ばれる。粗末な家を模したもので、石製が一般的である。本遺跡出土資料は、笠部（92）が、入主屋造の屋根形で、火袋部（93）が直方体を呈する。本資料が出土した15号土坑からは、中台や基壇等の灯籠の別部位は出土していない。本資料は、祠と香炉の可能性も想定してみたが、祠とは用途が異なり、香炉とは使用痕跡が異なる。火袋内面上部と笠部内面（屋根天井部）に多量のススと若干のタール状付着物があり、その分布が火所の近くの高温部にはスス・タール状付着物がなく、比較的の低温になる火所からやや離れた場所には残存する。このことから、香炉から出す煙によるスス・タール状付着物の分布ではなく、油脂分を含んだ燃料の点火後に、炎によって生じた分布と考えられる。

笠部は入主屋造の屋根形である。天井に煙出部があり、屋根には櫛歯状文が上方から下方に向かって描かれる。火袋部は正面に長方形の戸口と凸レンズ形窓、右側面は三日月形の窓、左側面は唐草文の一部を模したハート形の窓が配置される。戸と窓のある面には、屋根の薺葺き・茅葺き表現と同じく、櫛歯状文が縦方向に施されているが、数寄屋造りの土壁に用いられる引き摺り仕上げを模したものかもしれない。正面の左右端部には柱が表現されており、刺突痕、指成形痕、指紋が残る。火袋は型枠造りと考えられ、直方体を作つて、さらに柱表現のために粘土紐を貼付けている。

灯籠に描かれる文様としては、三日月文も唐草文を模したハート形文様も珍しくはない。ハート形については、京都市善導寺にある茶道具（茶碗、火箸、茶釜、柄杓、茶碗、火鉢、炭斗、五徳）を火

袋に描く善導寺型灯籠の中台に描かれていることで有名である。三日月形は灯籠の種類にかかわらず良く描かれる。この2つの文様と茶人に好まれる粗末な草屋の表現から、本資料は茶道との関連性が若干あるのではないかと想定される。草屋型は、寺社参道・門前・堂前等に設置されるものではなく、庭園に置かれる傾向がある。このことから、本資料が出土した15号土坑（井戸状土坑）は、庭園をもつ屋敷地内に構築された可能性が考えられる。本資料は茶道具との関連性が考えられるので、敷地内に茶室が設けられていたかもしれない。

土製灯籠は江戸時代の大名屋敷跡などから少量見つかっている。しかし、草屋型の出土事例については確認できなかった。土製品は全国各地で土人形や祠など多種の形状が焼かれており、在地の民芸品的要素もある。東北地方で著名なものがいくつかあるが、福島県三春町の丈六焼（三春町民俗資料館2000）は祠・灯籠・狛犬・瓦等を焼き、土製灯籠のなかには三日月文様を採用している資料もある（三春町民俗資料館前掲）。三春町内の武家屋敷出土品の丈六焼灯籠について、「289の灯籠が出土した南町の武家屋敷では、この他に大量の高級陶磁器類が出土しており、文献からも経済的にかなり裕福な家であったことがわかっています。こうした屋敷の庭に、一般的な石製でなく、土製の灯籠が置かれたということは、石の代用品でなく、丈六焼のほうが評価が高かったためと考えられます」と考察している。これは、本遺跡出土資料にも当てはまる可能性があるだろう。

（9）木 製 品

鍋蓋、漆器、木札、板材、板状製品、杭、柱材が出土している。鍋蓋はナラ材を使用している。漆器は椀蓋、椀、茶筒が出土し、ケヤキ材が使用されている。木札は近世末～近代の18号土坑から出土した。破損品のため、形状や墨書内容は不明である。わずかに「廿四日」、「付？」が読める。上部に記号のような墨書があることから、祈祷札や呪札の可能性もある。板材・板状製品はヒバ材、スギ材が使われる。杭・柱材はすべてクリ材である。

2 川端遺跡の調査成果

遺跡範囲は南都田字大道219番地を中心に広がっている。調査前現況は水田、畑地であった。遺跡は水沢高位段丘面上に位置する。調査概要は第IV章記載のとおりで、調査面積は300m²である。調査区は3カ所に分かれる。検出遺構は、土坑1基、溝3条である。遺構の構築年代は不明である。遺物は、弥生土器1点、土師器片2点、石匙1点、剥片1点が遺構外から出土した。川端遺跡は遺跡登録台帳には古代遺跡として登録されている。今回の調査で弥生土器が出土していることから、遺跡の年代幅が広がった。

3 堤遺跡の調査成果

遺跡範囲は南都田字四ツ柱109番地ほかである。調査前現況は水田であった。遺跡は水沢高位段丘面上に位置する。調査概要は第V章記載のとおりで、調査面積は360m²である。

調査区は1カ所である。検出遺構は、竪穴住居2棟、竪穴住居状遺構1基、土坑3基、溝4条、柱穴32個である。主に奈良～平安時代前半の遺構である。出土遺物は、土師器・須恵器中コンテナ1箱、削器1点、土製紡錘車1点、鉄製品2点、粘土塊2点、炭化材である。調査面積が狭いため、ごくわずかな遺構数であるが、奈良時代～平安時代初頭の集落跡と判明した。

(1) 穫穴住居

1号竪穴住居が奈良時代、2号竪穴住居が平安時代初頭である。1号竪穴住居は火災住居である。2号竪穴住居からは須恵器の出土数が多く、土師器は9世紀前半の特徴がみられる。2号竪穴住居カマドは南壁の南東コーナー付近に設置されている。調査幅が狭く、判然としないが、竪穴内には支柱穴は見いだせなかった。竪穴外の周縁部に支柱穴が設置された可能性が考えられる。P28・30・32に竪穴住居の上屋を支える柱が設置されていたかもしれない。竪穴外の周辺に支柱穴配置が確認されている遺跡は岩手県内では少ない。しかし、竪穴内で支柱穴のない住居の事例は数多くあり、その中に、竪穴外に支柱穴を持つ建物があった可能性も否定できない。

(2) 器面発泡の著しい須恵器甕について

2号竪穴住居カマド付近から、須恵器大甕が出土している。特徴はタタキ目が見られるものの剥落が激しく、還元焼成は行われているものの器面に発泡が見られ、酸化により土師器の色調となっている。須恵器としては失敗作品であり二級品であるが、このような資料は窯元近郊で流通するが多く、遠隔地への流通は稀である。堤遺跡周辺では作屋敷遺跡で類似の特徴を持つ平安時代の須恵器大甕が出土している。このころの須恵器生産は斜面地に構築された窯窓による。堤・作屋敷の周辺としては、堤遺跡から南に約2.5kmの見分森遺跡で須恵器窯窓2基が発掘調査されている。おそらく見分森遺跡製作の2級品が周辺消費地へ搬出されたのであり、その一部が堤遺跡や作屋敷遺跡に搬入されたと考えられる。

引用・参考文献

- | | | |
|------------|------|--|
| 朝倉 雄大 | 2000 | 『東館Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第366集 |
| 伊藤 博幸 | 2007 | 『胆沢地方の古代掘立柱建物群とその評価』『岩手考古学』19号 岩手考古学会 |
| 遠藤 実一 | 2007 | 『胆沢地方における豪族屋敷の成立と展開』『岩手考古学』第19号 |
| 及川 真紀ほか | 2005 | 『明後沢遺跡群第7・10・15次発掘調査報告書』岩手県前沢町文化財調査報告書第18集
前沢町教育委員会 |
| 小原 真一 | 2001 | 『要害館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第386集 |
| 佐藤 良和 | 2008 | 『林前Ⅱ遺跡・寺ノ前遺跡発掘調査報告書』奥州市埋蔵文化財調査報告書第19集
奥州市埋蔵文化財調査センター |
| 高橋 千晶 | 2006 | 『城柵の終末-胆沢城を中心として-』『第35回岩手考古学会研究大会発表資料』 |
| 田中 宏明 | 2003 | 『地方の豪族と古代の官人 - 考古学が説く古代社会の権力構造』柏書房 |
| 東北歴史資料館 | 1995 | 『仙台・堤のやきもの』◎宮城県文化財保護協会 |
| 中村 純美 | 2010 | 『田代遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第556集 |
| 本多準一郎ほか | 2004 | 『明後沢遺跡群第16次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
第442集(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター |
| 前沢町教育委員会 | 1974 | 『前沢町史 上巻』 |
| 三春町歴史民俗資料館 | 2000 | 『平成12年度春季特別展 丈六焼』三春町 |

写 真 図 版



国分遺跡遠景（見分森公園展望台より）(南→)



国分遺跡航空写真（1991年撮影・胆沢町教育委員会資料に加筆）

写真図版 1 遺跡遠景



1号陷穴状土坑近景（南→）



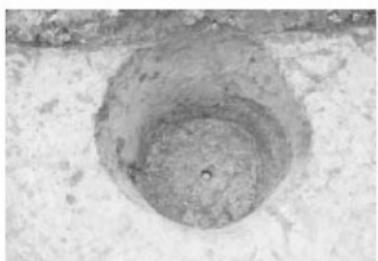
1号陷穴状土坑断面①（南→）



1号陷穴状土坑断面②（南→）



2号陷穴状土坑断面（東→）



2号陷穴状土坑近景（東→）



3号陷穴状土坑断面1~6層（南→）



3号陷穴状土坑近景（北→）



3号陷穴状土坑断面（北→）

写真図版2 1~3号陷穴状土坑



4号陷穴状土坑近景（南→）



4号陷穴状土坑断面（南→）



6号陷穴状土坑近景（南西→）



5号陷穴状土坑断面（北→）



6号陷穴状土坑断面（南西→）



7号陷穴状土坑近景（南→）



7号陷穴状土坑断面（南→）

写真図版 3 4 ~ 7号陷穴状土坑



8号陷穴状土坑近景（南→）



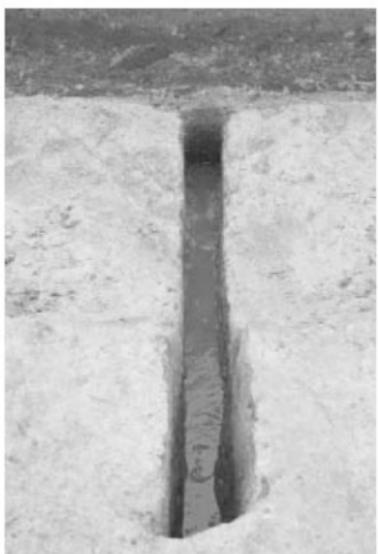
8号陷穴状土坑断面（南→）



8号陷穴状土坑上部堆積（南→）



9号陷穴状土坑断面（南→）



9号陷穴状土坑近景（南→）



10号陷穴状土坑断面（南→）

写真図版 4 8~10号陷穴状土坑



11号陷穴状土坑近景（南→）



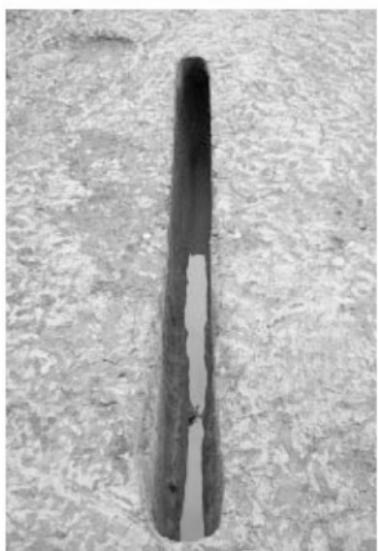
11号陷穴状土坑断面（南→）



12号陷穴状土坑断面（南→）



13号陷穴状土坑断面（南→）

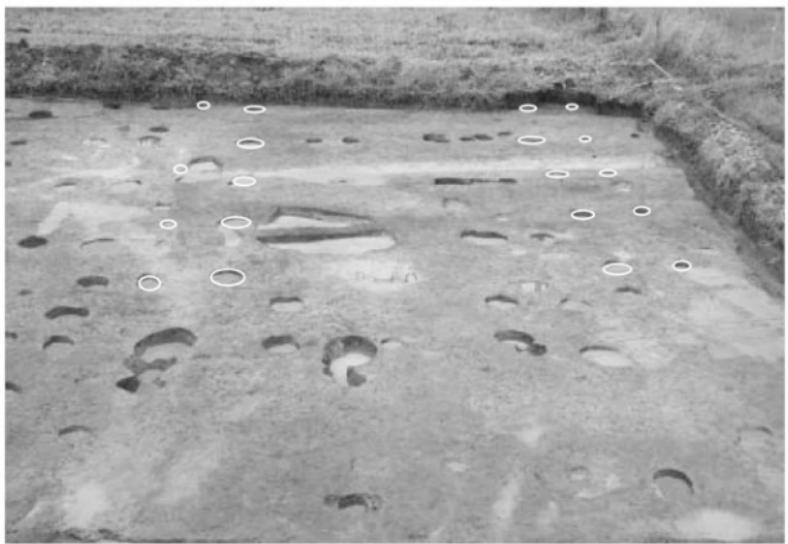


12号陷穴状土坑近景（南→）



13号陷穴状土坑近景（南→）

写真図版 5 11~13号陷穴状土坑



1号掘立柱建物跡近景(東→)



2号掘立柱建物跡近景(東→)

写真図版 6 1・2号掘立柱建物



3号掘立柱建物近景（東→）

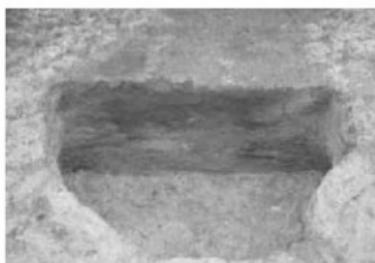


4号掘立柱建物近景（北→）

写真図版 7 3・4号掘立柱建物



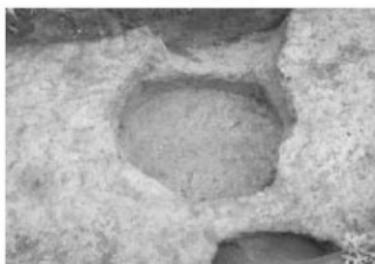
5号竪立柱建物近景（北→）



1号土坑断面（南→）



2号土坑断面（南→）



1・2号土坑近景（南→）



3号土坑断面・近景（東→）

写真図版 8 5号竪立柱建物、1～3号土坑



4号土坑近景(南→)



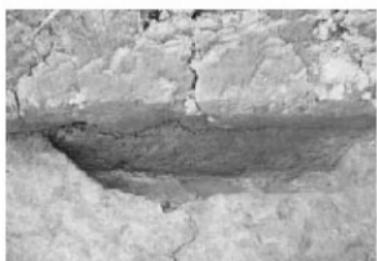
4号土坑断面(南→)



5号土坑近景(東→)



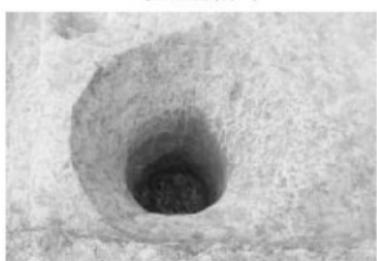
5号土坑断面(東→)



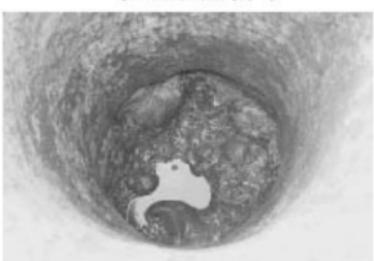
6号土坑断面(南→)



7号土坑出土状況(南→)



7号土坑近景(南→)



7号土坑底面(北→)

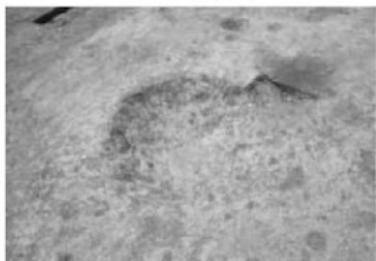
写真図版9 4~7号土坑



8号土坑断面（北→）



7号溝、10号土坑断面（南→）



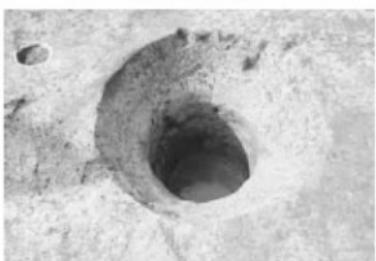
9号土坑近景（南→）



9号土坑断面（東→）



11号土坑断面（南→）



12号土坑近景（南→）



13号土坑近景（南→）

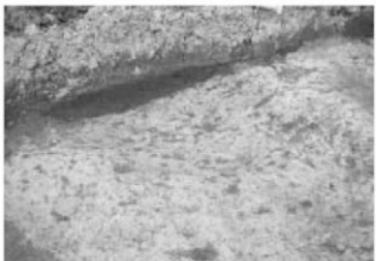


14号土坑近景（南→）

写真図版10 8 ~ 14号土坑



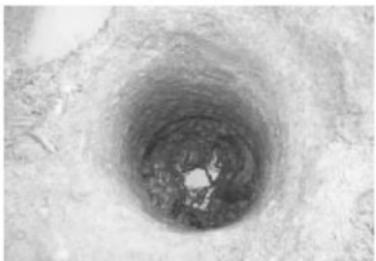
15号土坑近景（南→）



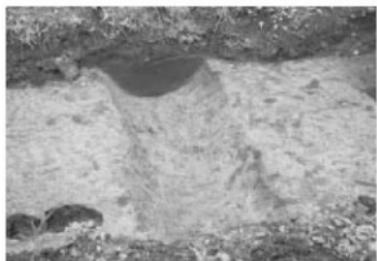
16号土坑近景（南→）



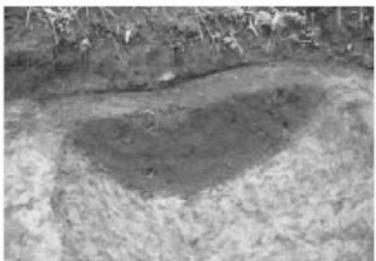
17号土坑断面（南→）



18号土坑近景（南→）



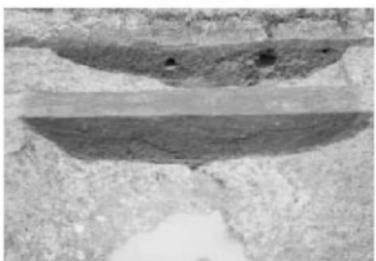
1号溝近景（東→）



1号溝断面（東→）



2号溝近景（南→）

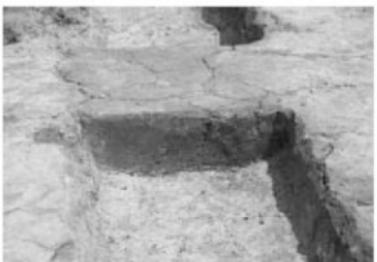


2号溝断面（南→）

写真図版11 15~18号土坑、1・2号溝



3号溝近景（南→）



3号溝断面（南→）



4号溝近景（南→）



4号溝断面（南→）



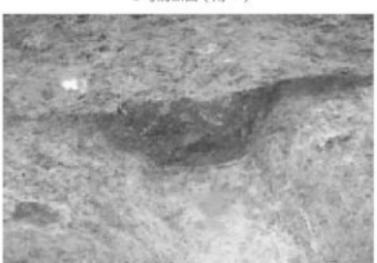
5号溝近景（南→）



5号溝断面（南→）



6号溝断面（南→）



7号溝断面（南→）

写真図版12 3～7号溝



8号溝断面（南→）



9号溝断面（東→）



10号溝断面G-G'（北東→）



10号溝作業風景



10号溝 断面G-G'（東→）

写真図版13 8～10号溝



10号溝作業風景



10号溝断面H-H' (東→)



9・10号溝近景 (西→)



9・10号溝断面I-I' (西→)

写真図版14 9・10号溝



1号池状遺構近景(東→)



1号池状遺構調査区完掘(西→)

写真図版15 1号池状遺構



2号池状遺構近景



11号溝近景（南→）



11号溝断面（南→）



12号溝近景（南→）



12号溝断面（南→）

写真図版16 2号池状遺構、11・12号溝



13・14号溝とE区柱穴群（北→）



13・14号溝断面（南→）



15号溝近景（南→）



15号溝断面（南→）



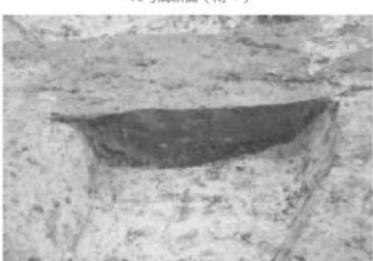
16号溝近景（南→）



16号溝断面（南→）

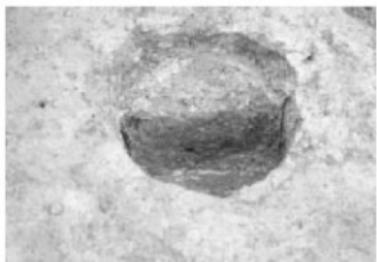


17号溝近景（北西→）



17号溝断面（西→）

写真図版17 13～17号溝



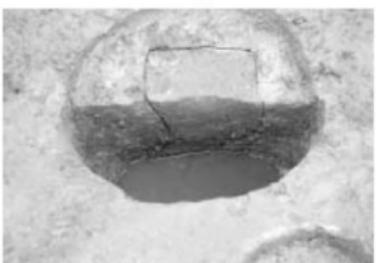
P64断面



P66断面



P71断面



P75断面



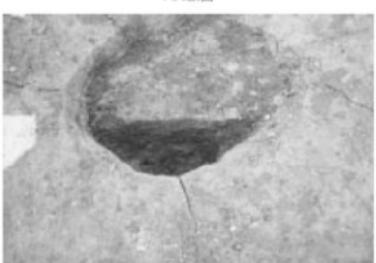
P83断面



P86断面

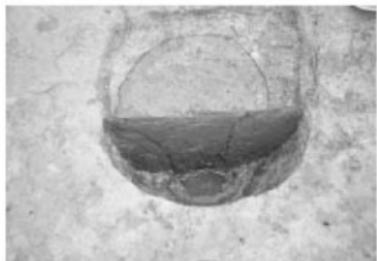


P87断面

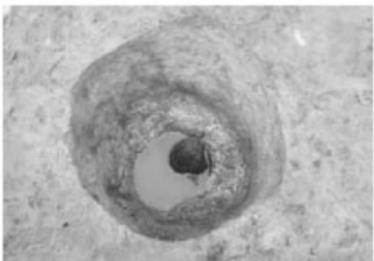


P88断面

写真図版18 E区柱穴群(1)



1号掘立柱建物 P97断面



1号掘立柱建物P97柱材遺存状況（南→）



1号掘立柱建物 P110断面



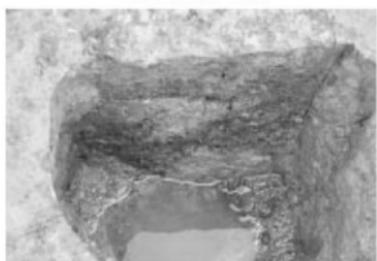
1・2号掘立柱建物P98・99断面



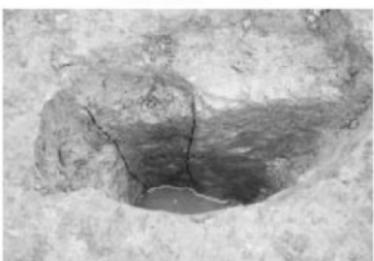
2号掘立柱建物P95断面



2号掘立柱建物 P112断面

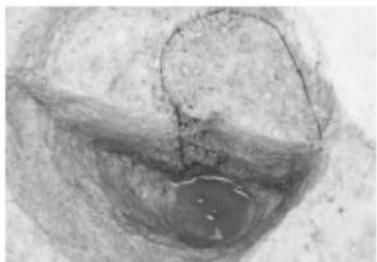


2号掘立柱建物 P116断面



2号掘立柱建物 P119断面

写真図版19 E区柱穴群（2）



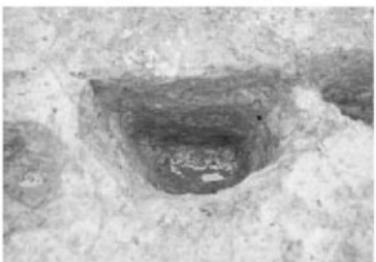
2号掘立柱建物 P123断面（南→）



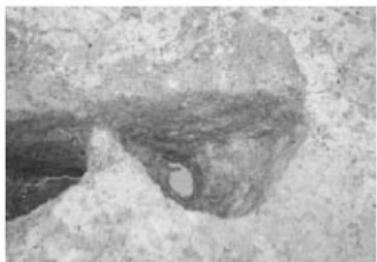
3号掘立柱建物P129断面（南→）



3号掘立柱建物P131断面（南→）



4号掘立柱建物 P103断面



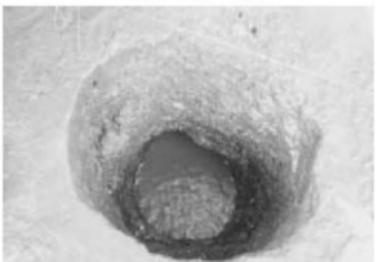
5号掘立柱建物 P104断面



5号掘立柱建物 P79断面



P94断面



P128断面

写真図版20 E区柱穴群（3）



A区東側完掘(西→)



A区西侧完掘(東→)



A区東側接出(西→)



A区中央接出(西→)

写真図版21 A区



B区西侧完掘(北→)



B区北側完掘(西→)



C区作業風景(西→)



C区全景(西→)

写真図版22 B・C区



D区全景（確認調査終了状況）(西→)



D区全景（西→）

写真図版23 D区



E区西端柱穴群検出(東→)



E区柱穴群(東→)



E区東端近景(東→)



E区中央部完掘

写真図版24 E区(1)



E区暗渠検出（東→）



暗渠断面（西→）

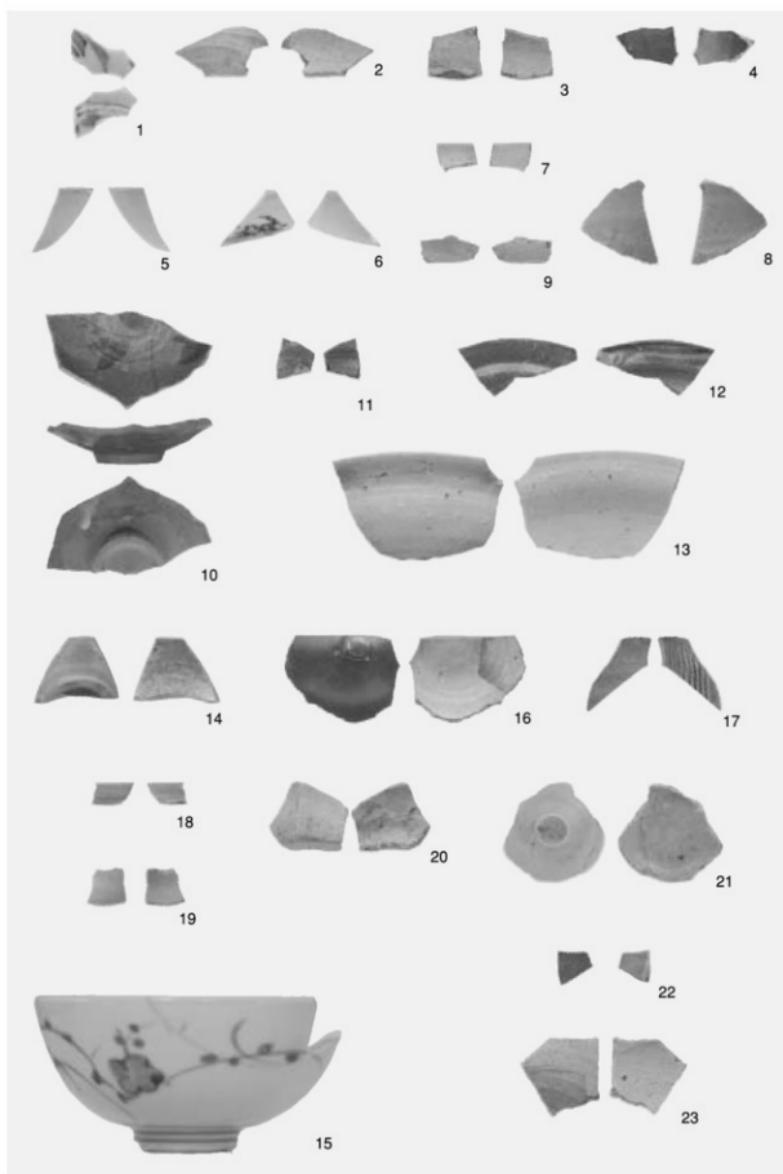


暗渠検出

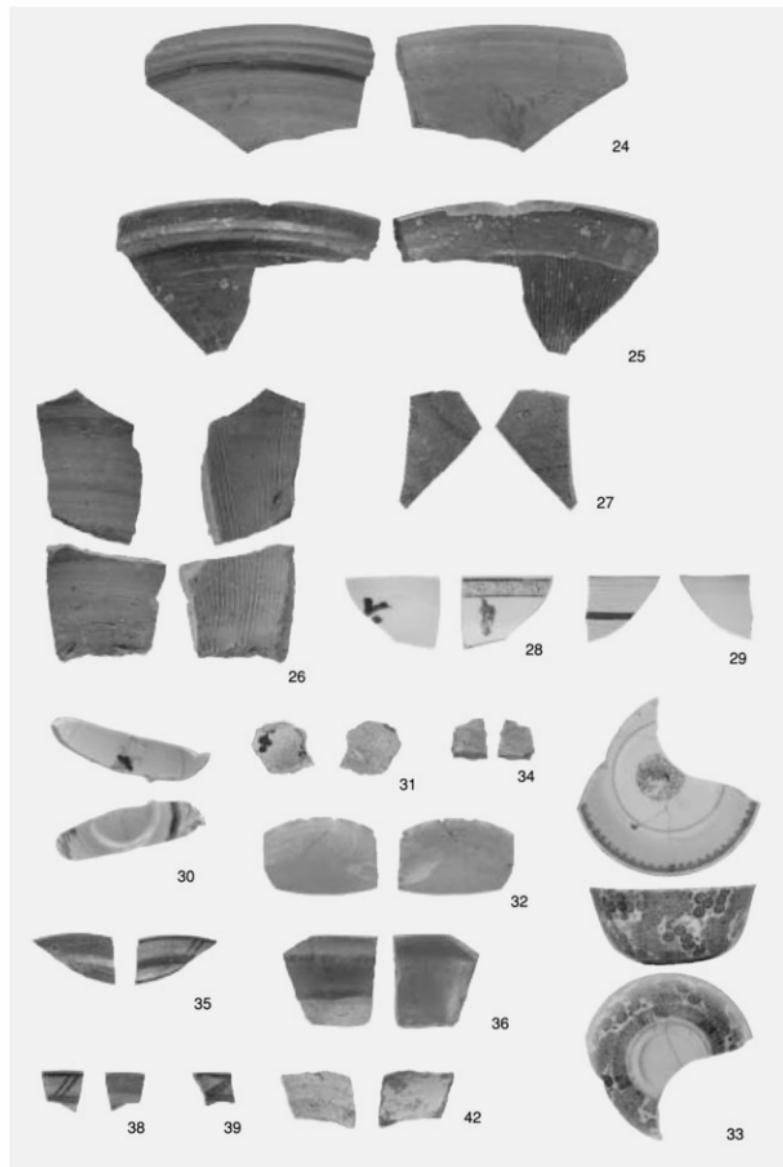


E区東端暗渠近景（西→）

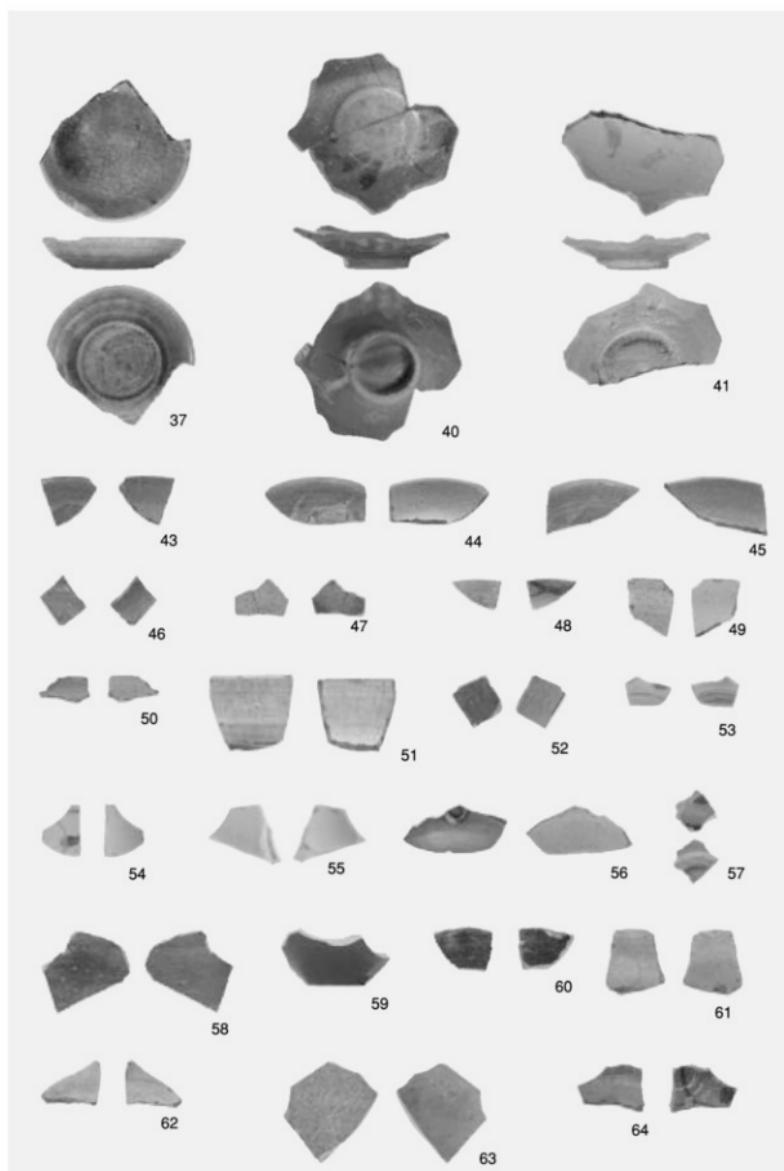
写真図版25 E区（2）



写真図版26 出土遺物(1)



写真図版27 出土遺物(2)



写真図版28 出土遺物(3)



65



66



68



69



70



71



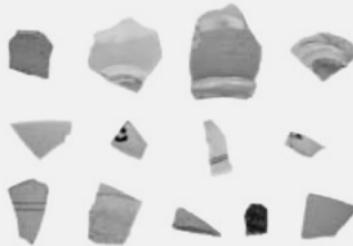
67



A区 I 層出土

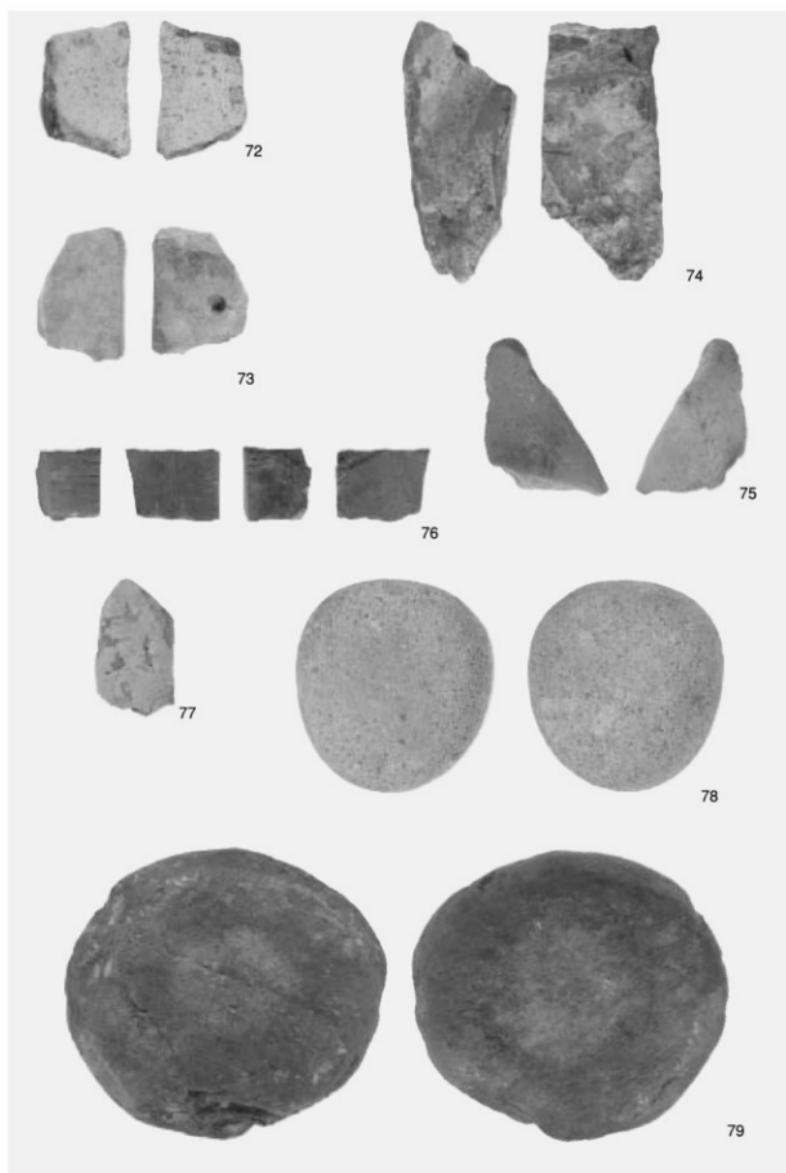


C区 I 層出土



E区 I 層出土

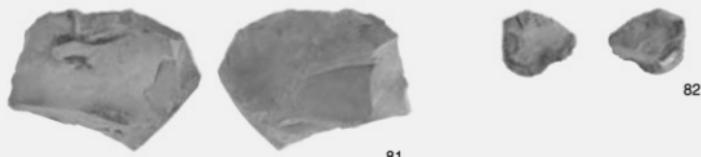
写真図版29 出土遺物(4)



写真図版30 出土遺物(5)



80



81



82



83

84

85



86

87

88



89

90

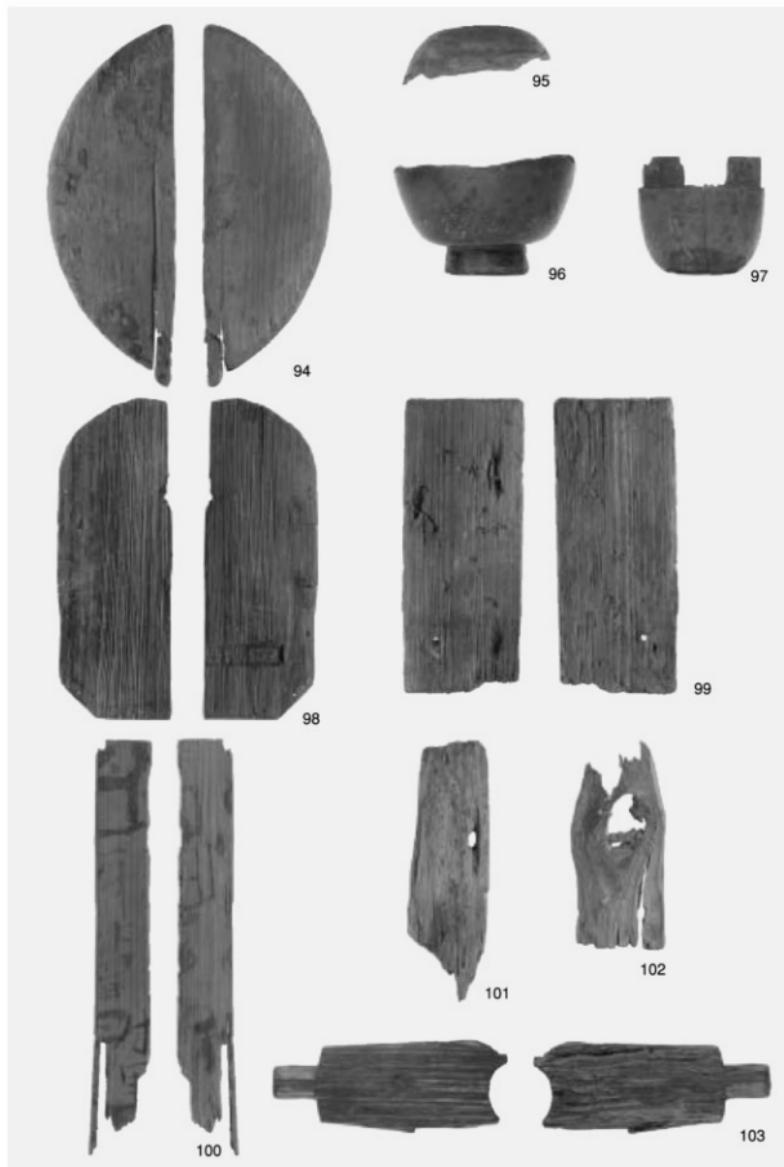
91

写真図版31 出土遺物(6)

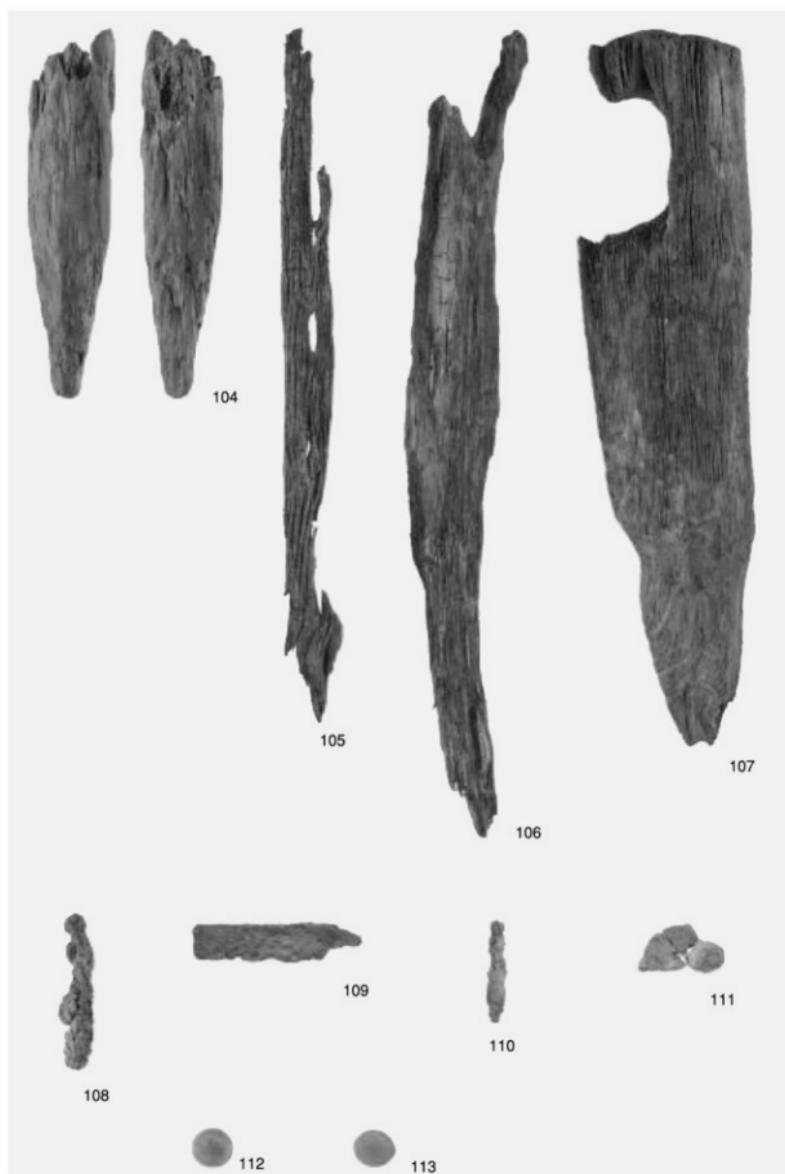


92 + 93

写真図版32 出土遺物（7）



写真図版33 出土遺物(8)



写真図版34 出土遺物(9)



試掘風景（北西→）



B区南側（北→）



基本土層（東→）



1号土坑断面（西→）



1号溝近景（南→）



1号溝断面（南→）



2号溝近景（南→）



2号溝断面（南→）

写真図版35 試掘風景、基本土層、1号土坑、1~2号溝



3号溝近景(束→)



3号溝断面(束→)



A区完掘(北→)



B区東側完掘(西→)



C区完掘(束→)



C区完掘(南→)



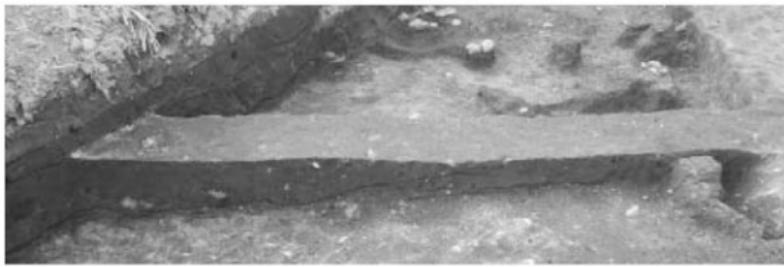
写真図版36 3号溝、調査区完掘、出土遺物



1号竪穴住居近景（南東→）



1号竪穴住居断面（東→）



1号竪穴住居断面（南東→）

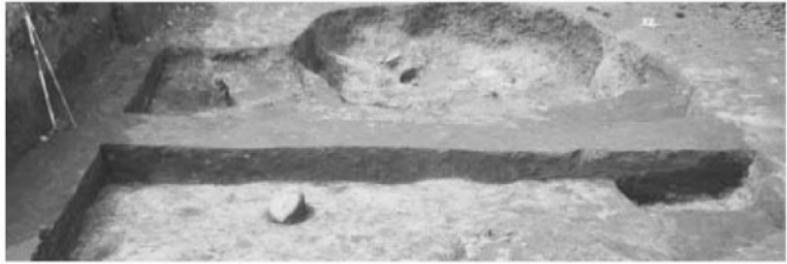
写真図版37 1号竪穴住居



2号竪穴住居床面遺物出土状況（北→）



2号竪穴住居断面（東→）



2号竪穴住居断面（南→）

写真図版38 2号竪穴住居（1）



2号竪穴住居床面近景（北→）



2号竪穴住居掘方全景（北→）



2号竪穴住居カマド付近遺物出土状況



2号竪穴住居遺物出土（北西→）



2号竪穴住居カマド 2層上面



2号竪穴住居カマド 3層上面



2号竪穴住居カマド断面A-A'（北→）



2号竪穴住居カマド断面B-B'（北→）

写真図版39 2号竪穴住居（2）



2号竖穴住居カマド断面C-C'（北西→）



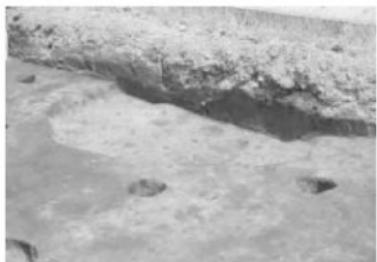
2号竖穴住居カマド断面C-C'（北西→）



2号竖穴住居カマド近景（北→）



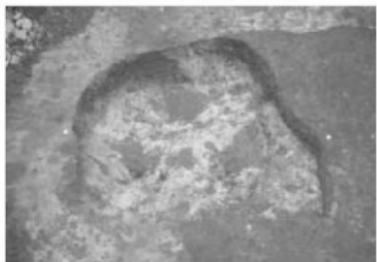
2号竖穴住居カマド袖部断面B-B'（北→）



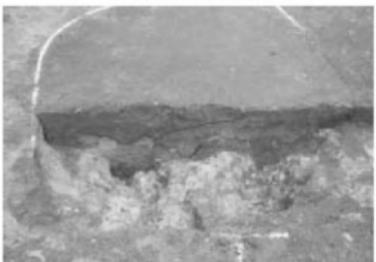
1号竖穴住居状遺構近景（西→）



1号竖穴住居状遺構断面（南→）



1号土坑近景（西→）



1号土坑断面（南→）

写真図版40 2号竖穴住居 (3) 1号竖穴住居状遺構、1号土坑



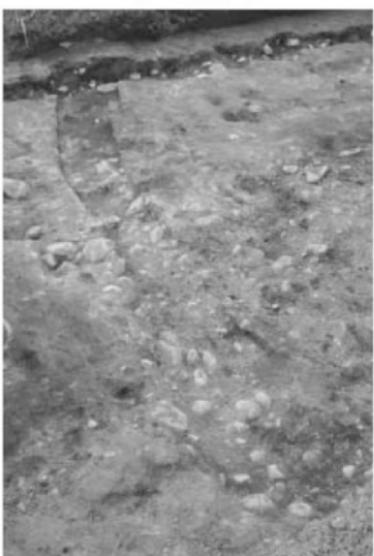
2号土坑断面（西→）



3号土坑断面（東→）



1号溝近景（南→）



2号溝近景（東→）



1号溝断面（南→）



3号溝近景（北東→）

写真図版41 2・3号土坑、1～3号溝



3号溝断面（南西→）



4号溝断面（東→）



4号溝近景（東→）



調査区北側完掘（南→）



調査区南側完掘（北東→）



作業風景

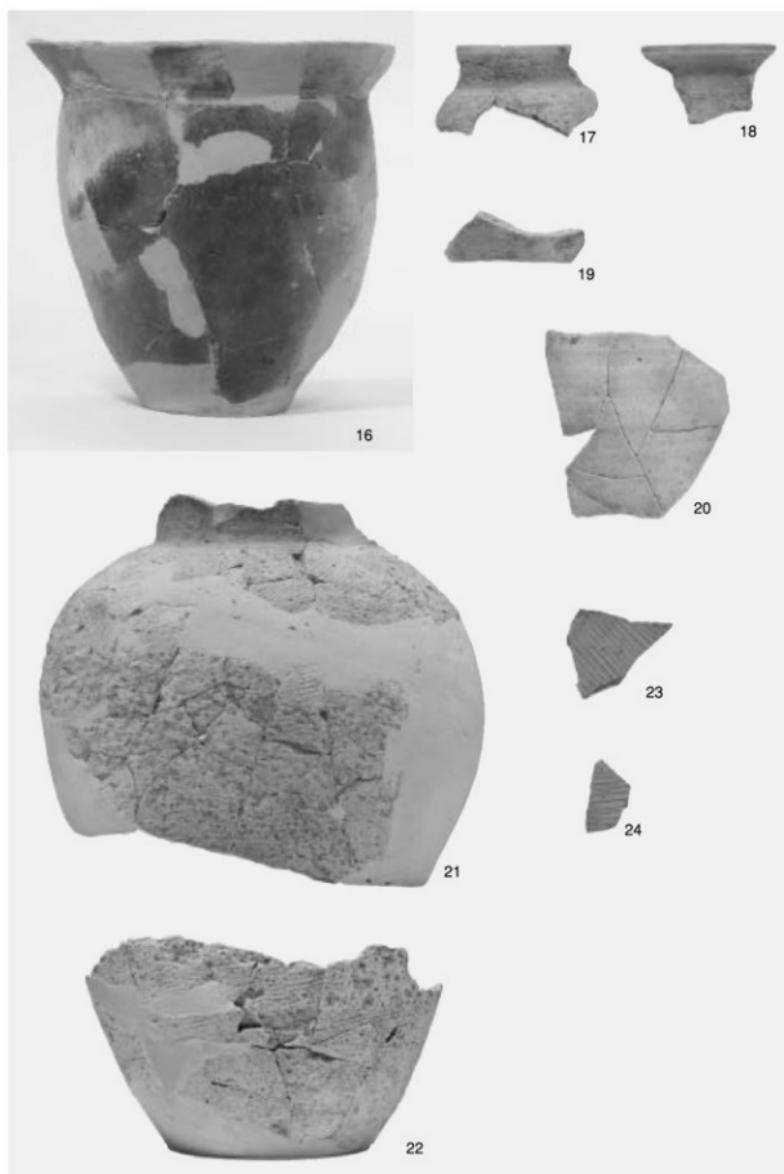


Ⅲ層深掘

写真図版42 3・4号溝、調査区完掘ほか



写真図版43 出土遺物(1)



写真図版44 出土遺物(2)



25



26



27



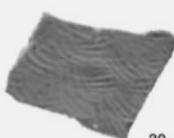
29



28



30



31



32



33



34



35



36

写真図版45 出土遺物(3)

報告書抄録

ふりがな 書名	こくぶんいせき・かわばいせき・つつみいせきはっくつちょうさほうこくしょ 国分遺跡・川端遺跡・堤遺跡発掘調査報告書										
副書名	経営体育成基盤整備事業都鳥2期地区関連遺跡発掘調査										
卷次											
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書										
シリーズ番号	第600集										
編著者名	米田 寛										
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター										
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001										
発行年月日	2012年2月29日										
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積	調査原因				
国分遺跡	奥州市胆沢区 南都田字上 広岡445ほか	03215	NE25-1107 07分 39秒	39度 05分 16秒	2010.06.18 ～ 2010.08.31	1,814m ²	経営体育成基盤整備事業都鳥2期地区				
川端遺跡	奥州市胆沢区 南都田字 大道219ほか		NE25-0240 08分 04秒	39度 05分 00秒	2010.06.14 ～ 2010.06.24	300m ²					
堤遺跡	奥州市胆沢区 南都田字 四ツ柱109ほか		NE25-0226 08分 17秒	39度 05分 24秒	2010.06.01 ～ 2010.06.15	340m ²					
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物	特記事項					
国分遺跡	集落跡	縄文～ 平安時代 中世末～ 近世	陥穴状土坑 掘立柱建物 土坑(井戸含む) 溝 柱穴	石器		中国産磁器、唐津産陶器 瀬戸大窯産陶器、天目茶碗 土製草屋型灯籠、土人形、 火打金、砥石、金床石 漆器、炭化種子、昆虫化石	中世末～近世初頭の屋敷地範囲の調査				
川端遺跡	集落跡	時期不明	土坑 溝	土師器、石器、剥片							
堤遺跡	集落跡	古代 時期不明	豊穴住居 豊穴柱建物 土坑 溝 溝 柱穴	須恵器、土師器 土製轆轤車、鉄製品		8～9世紀前半の集落					
要約											
国分・川端・堤遺跡は奥州市胆沢区南都田に所在する。											
国分遺跡では縄文時代～平安時代の陥穴状土坑が段丘崖線上に並び、中世末～近世の屋敷地が広岡街道沿いに確認され、掘立柱建物、井戸状土坑、池状施設を伴う溝の調査が行われた。また、中世末～近世初頭の中国産磁器、唐津産、瀬戸大窯産陶器などが出土しているほか、近世後半の井戸状土坑から三日月文と唐草文を模したハート文を描いた土製草屋型灯籠が出土している。											
川端遺跡では、時期不明の土坑、溝の調査が行われた。											
堤遺跡では8～9世紀前半の集落跡の調査が行われた。今回の調査範囲は遺跡登録範囲の西端部にあたる。											

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第600集
国分遺跡・川端遺跡・堤遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都烏2期地区関連遺跡発掘調査

印 刷 平成24年2月20日

発 行 平成24年2月29日

編 集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電 話 (019) 638- 9001

発 行 岩手県県南広域振興局農政部農村整備室

〒023-1111 岩手県奥州市江刺区大通り7番13号

電 話 (0197) 35- 8440

(公財)岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電 話 (019) 654- 2235

印 刷 有限会社 博光出版

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ5丁目8番43号

電 話 (019) 641- 0671